The Dictionary of National Biography: その概要と方法論

下谷和幸

野間教育研究所紀要
第　35　集

財団法人　野間教育研究所

野間教育研究所紀要　第35集

The Dictionary of National Biography: その概要と方法論

下谷和幸

まえがき

「*DNB*（＝*The Dictionary of National Biography*『国民人名伝記辞典』）以上に英国を誇らしいものにしているものはない」とチャールズ・ムーア（Charles Moore）は「インディペンデント（The Independent）」紙（1986年12月4日）掲載の書評の冒頭に書いているが、『オックスフォード英語辞典（*The Oxford English Dictionary*）』（現行版本体12巻、補遺1巻、新補遺4巻）と並んで*The Dictionary of National Biography*（現行OUP版本体22巻、補巻9巻）は英国民の誇る文化的財産といってよいであろう。両辞典とも、その採録する量と範囲の広さにおいて、また典拠としての信頼性においてもまさに英国民が誇りとするに値する大辞典であり、掛け値なしに「世界中のすべての図書館における必要不可欠の参考書」[(1)]となっている。ともに、英国が歴史上最も繁栄したヴィクトリア朝の文化の精華といってよいであろう。

チャールズ・ムーアが*DNB*が英国を誇らしいものにしているという時、辞典そのものが誇るに足るものであるということと同時に、この辞典によって過去から現在にいたる誇るに足る同国人の存在を確認することができるという意味も込められている。同胞の誇りとなる人物たちの伝記集という意味でも*DNB*は英国民の誇りなのであり、そうした意味で英国民のアイデンティティの拠り所といえるものである（もっとも、採録されているのは誇りとなる人物ばかりではないが）。英国及び英国民を理解しようとする者にとって、この辞典からこうむる恩恵には測り知れないものがある。

以下に記述したのは、*DNB*すなわち*The Dictionary of National Biography*の歴史と編集方針、その意義など、この辞典の概要である。*DNB*そのものについてのアカデミックな文献は極めて少なく、主として以下の文献に依拠して執筆した。

---

(1) John Carter, Percy Muir ed.: *Printing and The Mind of Man*（『西洋をきずいた書物』p.276）

第1章は*DNB*第1巻所収の「G.スミス(Smith)伝」(S.リー(Lee)執筆)、第2章以降第7章までは同じく*DNB*第1巻所収の「統計的解説（A Statistical Account)」、レズリー・スティーブン（Leslie Stephen）著『一伝記作者の研究(*Studies of A Biographer*)』(3 vols., 1910, London）所収のエッセイ『国民的伝記について(National Biography)』、シドニー・リー著『「国民的伝記とは(*National Biography*)』(1896年1月31日王立科学研究所で行われた講演記録、「コーンヒル・マガジン（Cornhill Magazine)」誌1896年3月号に掲載。筆者はリーが友人や同僚に配るために作った限定25部のassociation copiesの1部を所蔵しておりこれに依った)、第8章は1991年に訪英した際に*DNB*の現編集者であるC.S.ニコルズ(C.S.Nicholls) 博士から提供された最近の補巻についての書評、主としてA.O.J.コックシャット（A.O.J.Cockshut）の「*DNB*の100年（The Century of the *DNB*)」(「タイムズ文芸付録」The Times Literary Supplement, 26 April, 1985掲載）などを参照した。また、全章を通して、ギリアム・フェンウィック(Gilliam Fenwick）著の『*DNB*執筆者索引（*The Contributors' Index to the Dictionary of National Biography*)』の序文を参照した。フェンウィックのこの著書は*DNB*の各項目の執筆者を明確に、丹念に確認した最新の研究である。というのは、66巻のオリジナル版が22巻に合本されて再版された時、執筆者が洩れ落ちたり、誤記されたり、同じイニシャルだが違う執筆者が同一扱いされたりしてきわめて不正確になっていたからである。したがって、そうした不正確な資料に基づいている*DNB*第1巻所収のA Statistical Accountにもいくつか誤りがあることを指摘している。本論では、A Statistical Accountの記述に従いながら、フェンウィックの指摘する誤りを脚注その他で指摘しておいた。

なお、前述のS. リーとL. スティーブの "National Biography" と題するエッセイを参考のために翻訳し、それぞれ付録1、付録2とした。また、スティーブが各執筆者に文体及び体裁の見本として提示した「アディソン」伝も翻訳して付録3とした。

目　次

まえがき
1　創設者ジョージ・M・スミスについて……1
2　出版までの経緯……9
3　人物の採録範囲と基準及び時代別配分……13
4　記述枚数と執筆者……17
5　記述の仕方……19
6　*DNB*出版の意義及びその価値……24
7　補巻（Supplements）について……28
8　100年目の*DNB*の評価……34

付録1　「国民的伝記」とは（S. Lee）……41
2　「国民的伝記」について（L. Stephen）……73
3　アディソン伝（L. Stephen）……101

The Dictionary of National Biography:
その概要と方法論

1　創設者 ジョージ・M・スミスについて

1900年に完成した*The Dictionary of National Biography*（以下*DNB*と略す）はスミス，エルダー・アンド・カンパニー社の社主ジョージ・マレー・スミス（George Murray Smith）が、自らの出版事業の総決算として、1882年に出版を決意したことから誕生したものである。英国の歴史上名のある人物約３万人を採録した伝記辞典という空前の大事業は、本来ならば国家的事業であり、国庫からの資金援助を受けてなされてもおかしくないものである。事実、ドイツ、オーストリア、ベルギーなど他のヨーロッパ諸国では同様の企画は国立の文学アカデミーの後援のもとで行われたり、国庫から財政援助を得て行われている。これを一民間人が企画し、自らの資金を投じて完成させたところが、いかにもヴィクトリア朝の英国人らしいところで、彼らの独立自尊の精神が如実に表れている。したがって、*DNB*の概要を述べるには、まず、G.M.スミスという人物の略歴から始めるのが適当であろう。

G.スミスの伝記は*DNB*では創設者に敬意を払って、彼の死の年に出版された3巻の補巻の第１巻の巻頭に掲げられている（現在のオックスフォード大学出版局版では本体の第１巻巻頭）。執筆したのはシドニー・リーで、39頁に及ぶ長文の伝記となっている。これは*DNB*の中ではシェイクスピア（Shakespeare）の49頁についで2番目に長文の伝記である。以下はその概略である。

G.M.スミス（1824～1901）の先祖はスコットランド出身で、父親の代になってロンドンに移住してきた。父親は最初有名な出版社ジョン・マレー社で働いていたが、後にアレキサンダー・エルダー（Alexander Elder）という同郷の人物とスミス・アンド・エルダーという書籍と文房具を商う会社をつくり、後に、出版事業にも手をつける。父親は成功したガラス器製造業者のアレキサンダー・マレー（Alexander Murray）の娘と結婚し、その長男として生まれたのがジョージ・マレー・スミスである。G.スミスは６歳の時、脳の病気にかかり、親は医者から厳しい躾をしないようにと注意を受ける。生来、活発な少年だったと

ころに、甘やかされて育てられたために、腕白で気ままな性格が助長され、ために学校教育にはまったくなじめなかったようである。いくつか転校を重ねた結果、父親は家庭で教育を受けさせることにし、かつ14歳で自分の会社に入れて仕事を仕込むことにする。もっとも、知的能力が弱かったわけではなく、数学や化学に興味を示し、とりわけ、文学には直観的な理解力があったという。しかし、その旺盛な知的エネルギーが発揮されるのはビジネスの世界に入ってからのことであった。

一方、父親の会社は共同経営者が１人増え、名前もスミス，エルダー・アンド・カンパニーとなり、一層繁盛することになる。というのは、この新しい共同経営者がインドのカルカッタにコネクションがあったため、インドに商社をもつことができたからである。当初は東インド会社の役人たちに書籍と文房具を輸出するだけだったが、やがてあらゆる商品を扱うようになり、銀行業務も兼ねたりして、当時インドにあった商社のなかでも圧倒的な規模の会社に成長する。G.スミスはこの３番目の共同経営者のもとでビジネスの修業を始めたのである。

商社の成功によって財政基盤が固まるとともに、スミス，エルダー・アンド・カンパニー社の出版部門も目覚ましい仕事をするようになる。とくに、『友情の贈物（*Friendship's Offering*）』という年鑑は、詩人のサウジー（Southey）[(1)]やコールリッジ（Coleridge）[(2)]といった一流の執筆者をそろえ、有名な画家の挿し絵を入れたので、非常に人気を博し、よく売れた。オリジナル小説とロマンスのシリーズものを出したり、豪華な美術本なども出版した。この当時の出版事業の中でとりわけ目を引くのは、政府が派遣した様々な科学探検隊の調査報告書を出版していることである。この中にはダーウィン（Darwin）が参加した有名なビーグル号の探検の動物学上の報告書も含まれており、これが契機となってダーウィンとスミス，エルダー・アンド・カンパニーには個人的つながりができ、後にダーウィンの著書を数冊出版することになる。

---

(1) Robert Southey（1774～1843）イギリスの詩人、文学者。

(2) Samuel T. Coleridge（1772～1834）イギリス・ロマン派の詩人、批評家。

もうひとつ特記すべきは、19世紀英国の最も偉大な著述家の一人であるジョン・ラスキン（John Ruskin[1]）と特別な関係が生じたことである。当時ラスキンは有名な『現代画家論（*Modern Painters*）』の第１巻を完成したところで、その原稿をラスキンの父親は最初ジョン・マレー社に持ち込むのであるが断られる。スミス，エルダー・アンド・カンパニー社はこの出版を快く引き受け、これが縁となり以後30年間ラスキンとの親密な関係が続くことになり、特にG.スミスの代になってこの偉大な人物との個人的親交は出版事業に大きなプラスとなる。G.スミスは20歳になった時、出版部門の指揮をまかされる。最初に手がけたのが著名な文人たちのエッセイ集で、これがかなりよく売れ、出版人として順調なスタートを切ることになった。

しかし、G.スミスが21歳の時、父親が亡くなり、また第三の共同経営者だった人物の資金の不正な使い込みが発覚して、共同経営を打ち切るという事態が起こる。さらに、同じ時期に、創業以来の共同経営者A.エルダーが引退してしまう。したがって、経営手腕が最も要求される困難な時期に、経営の全権がG.スミスの双肩にのしかかってきたのである。しかし、G.スミスは賢明さと果敢さをもって、杜撰な経営を立て直し、正常な軌道に乗せ、以前よりもはるかに発展させることに成功する。当初は商社部門と金融部門の経営の掌握と拡大に乗り出し、若さにものをいわせて精力的に働く。科学測量機材を定期的にインド政府に供給したり、電信装置のプラントや軍需品を輸出したりして仕事を拡大していき、彼の会社に依頼した品物で届かないものはないといわれるくらい、ありとあらゆる商品を扱った。32時間ぶっ通しで働くなどということもやったりしたせいで、取扱い高は以前の13倍にものぼり、ボンベイやジャワにも支店を開設する。この商社事業の目覚ましい成功が、もう一方の出版事業の経営基盤となっていくのである。

経営の立て直しを計っている間、スミスは出版事業はW.S.ウィリアムズ(Williams)にすべてをまかせておいた。ウィリアムズは帳簿に関しては無能で

---

(1) John Ruskin（1819〜1900）イギリスの批評家、社会思想家。『現代画家論』は風景画家J.M.W.ターナー（Turner）の絵画を擁護したことで有名。

あったが、文学の知識と判断にかけては並々ならぬものをもっていた。これを見抜いたスミスは以後30年間にわたってliterary adviserとしてウィリアムズを重用する。しかし、出版の企画と交渉はウィリアムズが始めるが、最終的に話をまとめるのは殆どスミスであった。こうして出版されたものに天文学者であるサー・ジョン・ハーシェル（Sir.John Herschel）の『喜望峰に於る天文学的観測(*Astronomical Observations made at the Cape of Good Hope*)』やラスキンの『現代画家論』第2巻、『建築の七燈(*The Seven Lamps of Architecture*)』などがある。

スミスは全生涯にわたって、作家と単にビジネス・ライクな付き合いをするのではなく、常に親密な個人的交際をするよう心掛けた人物であった。作家たちと個人的な交際をし、その輪を広げていき、そこから生まれる成果を出版事業に生かしていくのがスミスの流儀であった。スミスによって文学界に登場することができた有名な作家は数多く、そうした作家との個人的交際はみな終生にわたって続いた。すでに述べたラスキンもその一人である。このころから始まったシャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë）との交際も、スミスの出版人としての鋭い才覚とともに、その優しい人柄を物語るエピソードのひとつとなっている。あちこちの出版社に断られて回ってきた『教授(*The Professor*)』の原稿を読んでウィリアムズもスミスもブロンテの将来性をすぐに認める。そして、『教授』の出版は成功しないだろうが、あきらめずに新たな作品を執筆するようにと心暖まる激励の手紙を出す。まもなく届いたのが傑作『ジェーン・エア（*Jane Eyre*)』の原稿であった。スミスがこれを出版するとたちどころに好評を博する。以後7年後に彼女が若くして世を去るまで、スミスは彼女がロンドン滞在中は家に泊めたり、一緒に旅行したりして親しく面倒を見た。また、C.ブロンテが尊敬してやまない文豪サッカレイ（Thackeray）に会う機会をもうけてやり、彼女の長年の念願をかなえてやった。スミス自身もサッカレイとはそれまで面識がなかったのであるが、これを機縁にこの文豪とも終生の親密な交際が始まる。サッカレイの作品を出版することが若い頃のスミスの夢であったので、『エズモンド（*Esmondo*)』などの作品が次々と出版されていく。文壇に影響力のあったサッカレイと親交を結んだことは、後にスミスの事業に測

り知れない利点をもたらすことになるのである。スミスの方もまた終生サッカレイを援助し、死後は全著作の版権を買取って、残された家族の経済的な面倒をみている。その他、桂冠詩人のブラウニング (Browning) とも同様の信頼感に満ちた付き合いがあった。この詩人は息子に自分の死後は何事もスミスに相談するよう遺言している。出版人として作家との交友はいわば財産であり、それは当然のことであったが、スミスの場合、損得勘定を越えた、彼自身の人柄から出た交友であったようである。

好調な商社の事業と出版事業を背景に、スミスは長年の夢であった新聞事業に乗り出す。最初サッカレイのすすめによって「スペクテーター (Spectator)」紙や「タトラー (Tatler)[1]」紙のような広範な批評を掲載した日刊紙を計画するがうまくいかず、結局は週刊紙の「オヴァーランド・メイル(The Overland Mail)」と「ホームワード・メイル (The Homeward Mail)」を発刊するにとどまる。前者は英国本国のニュースをインドへ、後者はインドのニュースを本国へ伝えるものであった。しかし、オリジナルな日刊紙を出したいというスミスの希望は止みがたく、9年後にはついに実現している。「ポール・モール・ギャゼット (The Pall Mall Gazette)」紙がそれで、最初こそ売れ行きは悪かったが、後には有数の日刊紙に成長し、セダンの戦いとナポレオン3世の降伏のニュースをどの新聞よりも早く英国に伝えている。

新聞事業と同時に、スミスの出版人としての名声を一躍高めたのは、「コーンヒル・マガジン (Cornhill Magazine)」誌 (1859) の発行であった。サッカレイを編集長にいただいたこの文芸雑誌は、サッカレイ自身をはじめとして、ヴィクトリア朝の有名な作家たちを綺羅星の如く執筆陣に配し、高名な画家や版画家のイラストを挿入した雑誌で、たちどころに評判をとり、創刊号は12万部を売り尽くした。その後も順調に売れ行きを伸ばし、英国のこの種の定期刊行物

(1) 「タトラー」(1709年4月12日〜1711年1月2日) はR.スティール (Steele) が、「スペクテーター」(1711年3月1日〜1712年12月6日) はJ.アディソン (Addison) とスティールが出版した定期刊行物。イギリス・ジャーナリズムの基礎を作り、平易なエッセイのスタイルの確立に寄与した。

では前例のない発行部数の雑誌となった。J.ラスキン、A.テニスン(Tennyson)、R.ブラウニング、M.アーノルド(Arnold)[1]、A.トロロープ(Trollope)[2]、G.H.ルーイス(Lewes)[3]、ジョージ・エリオット(George Eliot)、C.ディケンズ(Dickens)など、ヴィクトリア朝の有名な詩人、小説家、評論家でこの雑誌のために筆を執らなかった者は一人としていないくらいである。この雑誌に執筆したことが契機になって売り出していった作家も多く、スミスはヴィクトリア朝英文学の隆盛を陰で支えた立て役者だったといっても過言ではない。例によって、この雑誌を契機にして知遇を得た文人たちとスミスは親密な関係を維持することに努める。たとえば、しばしば彼らを別荘に招いて歓待したのであるが、S.リーによれば19世紀の70年代に名声を得ていた文人や美術家で、この別荘で歓待を受けなかった者はほとんどいないくらいであったという。その中にはロシアの文豪ツルゲーネフやフランスの文豪モリエールらの名前もみえる。雑誌を通じて親交のできたこれらの作家たちの単行本もぞくぞくと出版したほか、医学書やヴィクトリア女王の「ハイランドでの日記抄」の私家版の出版も依頼されて行っている。そして、これが機縁となって女王の夫君アルバート公の伝記など王室関係の出版もつぎつぎに手懸けるようになる。こうして、自らの才能と育んできた人脈をフルに活かしたスミスの出版事業は圧倒的な成功をおさめたのだった。

1868年には商社と銀行の仕事はすでに人に任せて、出版事業のみに専念していたのだが、企業精神は相変わらず旺盛であった。たとえば、偶然ライン川東の渓谷の天然水の源泉の権利を買っておいたところ、その水が英国ばかりでなくアメリカ、ヨーロッパ、インドでも非常によく売れ、20年間ほどは、他の事業の収益すべてを上回るほどの収益をスミスにもたらしたという。

このように、自らの商業的センスと勤勉さ、強靱な精神力と素早い行動力、そして鋭い直観的洞察力によって大きな財産を築いてきたスミスは、1882年に

---

(1) Mattew Arnold (1822〜88) イギリスの詩人、批評家、教育家。

(2) Anthony Trollope (1815〜82) イギリスの小説家。

(3) George Henry Lewes (1817〜78) イギリスの大衆向き哲学者。

いわば自分の事業の総決算として*DNB*の刊行を思い立つ。晩年を迎えるにあたって、この莫大な私財を投じて、同胞の役に立つことを為したい、感謝されるに値することを為したいと願ったのである。当初のスミスの計画は遠大で、「万国大伝記辞典」を構想していたのであるが、相談にあずかったL.スティーブンがもっと限定した実行可能な計画にしたほうがよいと忠告したためこれを受け入れ、ここに*DNB*の出版は端緒についたのである。出版の詳しい経緯は次章に譲ることにするが、まず当時サッカレイに代って「コーンヒル・マガジン」誌の編集長としてこの雑誌をますます活気あるものにしていたL.スティーブンを口説いて初代の編集者に任命し、計画は動きだす。冒頭で述べたように、本来なら政府機関が推進すべき企画を一民間人が独力で実行するという事実に、スミスの独立自尊の気概は一層かきたてられ、計画は完成に向かって着実に進行していった。1885年1月1日から年4巻ずつ刊行され、1900年6月24日に全63巻が15年半の歳月をかけて完成している。

刊行の途中からスミスの愛国的業績を称える反響が多数あった。1895年にはオックスフォード大学がM.A.の名誉学位を授けているし、1897年には第2回国際図書館会議はスミスが「驚倒すべき事業を推進している」ことに対して、会議の席上祝意を表わすことを満場一致で決議している。この決議に応えてスミスは、30年以上にわたる多忙な生活の中で、*DNB*を完成させる仕事ほど自分の関心をとらえ、また満足感を与えたものはないと述べている。完成を目前にひかえた1900年の5月には、スミスを祝うために設けられたディナーの席にエドワード3世（当時は皇太子）が臨席している。さらに、1900年7月30日にはロンドン市長がスミスと編集者たちのために、文学界と公職にある最高クラスの著名人を招いた宴会を公邸で催している。かくしてスミスは生涯の最晩年に自ら念願した如く、国家国民のためになる一大事業を完成させたのである。1894年にはすでにビジネスの全権は息子に譲っていたのであるが、この愛着のある辞典の所有権だけは死ぬまで自らの手に留めておいた。もっとも、完成後1年たらずの期間ではあったが。すなわち、完成の翌年1901年4月6日にスミスは世を去ったのである。

S.リーの指摘をまつまでもなく、スミスの全生涯を通観して我々が強く印象付

けられるのは、成人してから六十有余年に成し遂げたその仕事の膨大な量と、その稀れにみる多様性であろう。スミスの場合、多方面にわたる大望と、多様な才能が一人の人物のうちに稀れなる結合をみたのである。独立自尊の気概を強くもち、機を見るに敏であり、冷徹な判断力と果敢な行動力をもったすぐれた才覚の事業家であったと同時に、文学や美術作品の価値を直観的に見抜く才能に恵まれ、そうした分野の理想を求めて真摯に努力する人々に心から敬愛の念を抱き続けた出版人だったといえる。だからこそ、*DNB*という質量ともに圧倒的にすぐれた仕事が世に現われ得たのだというべきであろう。

セント・ポール大寺院にあるG.スミスの墓碑銘には、次のように記されている。

「ジョージ M. スミス(1824年3月19日～1901年4月6日)、この人物によりて英国の文学は*The Dictionary of National Biography*を得たり、その温かき心根によりて同時代の文人ら斉しく彼を敬愛せり。敬愛せし友ら、集いてこれを刻む。」

2　出版までの経緯

*DNB*は、自国民に永久に役立ち、文学的価値においてもそれまでにヨーロッパで出版されたいかなるものをもしのぐものを出版したいというG.M.スミスの念願から生まれたものであった。スミスの最初の構想はフランスで出版されていた『万国伝記辞典（*Biographie Universelle*）』（1843～1863、40巻）をお手本にした万国伝記辞典の出版であった。スミスはこの出版計画をまずレズリー・スティーブンに相談する。この二人の交友関係は「ポール・モール・ギャゼット」紙にスティーブンが寄稿した時から始まり、スティーブンがサッカレイに代って数年後に「コーンヒル・マガジン」誌の編集長を引き受けてからは一層親密なものとなった。スミスが親しく交際を続けていたサッカレイの末娘とスティーブンが結婚したこともあって、とりわけ二人の仲は信頼感に満ちたものであったという。スティーブンはスミスにその計画はあまりに遠大すぎて実行不可能であることを説得する。そこでスミスは、実現可能な国民伝記辞典に計画を変　更する。すなわち、「ブリテン諸島とその植民地に住んだ、古代から現代にいたる注目すべきあらゆる人物の完全で正確で簡潔な伝記の辞典」である。

当時、ヨーロッパではドイツ、オランダ、ベルギー、オーストリア、スウェーデンなどで国民の愛国心を満たそうとの観点から、国民伝記辞典の計画が着手されていた。英国では18世紀に『英国伝記辞典（*The Biographia Britannica*）』（1747～1766、7巻フォリオ版；第2版1778～1794、第5巻Fの項で中断）という国民伝記辞典があったが、それ以後ほぼ1世紀間は国民伝記辞典の試みはなかった。19世紀前半には伝記辞典は何種類か出たが、すべて万国伝記辞典であった。[(1)] し

(1)　たとえば、アレグザンダー・チャーマーズ（Alexander Chalmers）の『伝記辞典（*Biographical Dictionary*）』（1814、32vols）、ローズ（Rose）の『新万国伝記辞典（*New General Biographical Dictionary*）』（1839～1847、12 vols）がある。いずれも万国伝記辞典としては不完全なものであった。ローズの辞典の12巻目を最後に、英国では万国伝記辞典の試みも、国民伝記辞典の試みも放棄される。

たがって、識者の間では、包括的でかつ権威のある国民伝記辞典の出現が待望されていた。[1] それがなかなか現われなかったのは、このような膨大な出版にともなう採算上のリスクをあえておかそうとする出版人がいなかったからである。[2] だが、スミスは、経費はこれまでのいかなる出版物をも上回り、投資する資金の回収の見込みも薄いこの計画に、採算を度外視して着手したのである。逆に言えば、当時このような出版計画にあえて挑戦できる出版人はスミスをおいてほかにはいなかったのである。

1882年の秋に、L.スティーブンが編集者に任命されて計画は実際に動きだす。まず、1882年12月23日にスティーブンは「アシニーアム（Athenæum）[3]」誌に「新『英国伝記辞典』」（A New *'Biographia Britannica'*）というタイトルで*DNB*出版の計画を発表する。それは計画発表の声明であると同時に、編集方針を明確に述べたものであった。すなわち、*DNB*に採録される人物はすでに死亡している人物であること、正確な日付と事実に基づいて記述されること、哲学的あるいは批評的な論文に陥ることなく、人となりをいきいきと描写もしくは入念に分析したものであること、その人物の特徴を物語る逸話や見解にはスペースを割くこと、などである。そして採録する人物のリストを公表するから、その中に伝記を執筆してみたいと思う人物がある人は、特にその人物について研究している人は名乗り出てもらいたいと呼び掛けている。その後、スティーブンの指揮のもとに、H.R.テダー（Tedder）とC.F.キアリー（Keary）によってAの項目に採録する人物のリスト作りが始まる。その際の方針は、*DNB*はこれまで

---

(1) *DNB*以前の英国における伝記辞典出版のあらましについては、S.リーの、*'National Biography'* p.28以下（付録1、p.62以下）参照。

(2) スミスはこの事業によって50000ポンドの損失を被るであろうと事前に予測していた。ジョン・マレー社も1850年代に同様の企画をたて、数百ポンドを注ぎ込んで予備調査までしたのであるが、採算がとれないことがわかり放棄している。ジョン・マレーは、スミスが計画を発表すると、自社で行った調査報告書、とくに登載すべき人物名のリストを提供している。G.Fenwick : *The Contributors' Index,* pp.x-xi参照。

(3) 'Athenæum'誌は、1824年に創設された有名な文学者や、芸術家、科学者たちのクラブの機関誌。1828年創刊。

英国で出版された伝記の集大成でなければならないということであった。すなわち、すでに出版されている個人の伝記、伝記辞典、特定の団体や階層の高名な人物の伝記集、主要雑誌や新聞に掲載された死亡記事などをすべて網羅するものでなければならないということであった。さらに、同じように際立った人物で以上のものから洩れている人物たちを補充する必要があった。そのためには、広範な歴史上の文献や学問的文献、雑多な記録や報告書などを渉猟することが要求された。

こうして作成されたA項のリストが1883年1月10日に、すすんで筆を執ってくれそうな有能な執筆予定者に送られる。彼らは大部分が執筆経験豊かな専門家たちであった。執筆を応諾する返事をよこした者の中から、Aの項目に関してはスティーブンが最終的に執筆者を割り振っている。B項以下の採録者リストの作成にはトムソン・クーパー（Thomson Cooper）があたる。同年3月にはスティーブンを助けるためにシドニー・リーが編集補佐に任命されている。リーは後にスティーブンの後を継いで2代目の編集者になる人物である。

6月には2番目の採録者リスト（Baalun－Beecheyの項）が完成する。このリストは「アシニーアム」誌のコラムに公表し、読者から提案や訂正を受けることにする。採録する人物の妥当性と範囲の決定は非常に難しい問題であるが、広く読者の意見を参考にするというのは、国民伝記辞典という性格からいってもなかなか卓抜なアイディアであった。以後、リストは同誌に半年ごとに公表され、執筆者の手に渡る前に、その妥当性について広く人々の批評を受けることになる。

また、とりあえず、年に4巻ずつ刊行していくことが決まる。執筆に際しては、最新の伝記的、歴史的研究からのみならず、未刊の書類や記録など直接原資料から情報を得ることが原則とされた。また、情報源の完全なリストを付けることが義務づけられている。スティーブンは詩人で随筆家のJ. アディソン（Addison）の伝記[1]を自ら執筆し、それを文体と体裁のモデルとして各執筆者に送付している。

---

(1) 付録3参照。

こうして、1885年1月1日に第1巻（Abbadie-Anne）が出版されたのであるが、年に4巻を確実に出版していくためにも、第1巻を出すまでにリスト作成後2年の準備期間を要している。第1巻は505人の人物が収録され、87人の執筆者によって執筆されている。以後、1900年6月24日の最終巻（第63巻）の出版まで、平均460頁、18×24.4cm、クロース装丁（各巻にアルファベット順に並べた索引付き。図版なし[(1)]）が年4巻、四半期支払い日（quarter-day、すなわち、3月25日、6月24日、9月29日、12月25日）に忠実に配本されていく。このような徹底的な調査研究に基づいた、しかも大勢の執筆者によって書かれた大部の書物が、きちんと定期的に刊行され、15年半というむしろ短期間に完成したのは驚異的であるといってもよいであろう[(2)]。この間第21巻（1889年12月30日）まではL.スティーブンの単独編集であったが、病気と過労のために第22巻～26巻（1890年3月～1891年3月）はスティーブンとリーの共同編集になっている。1891年春にはスティーブンは8年半の編集の仕事から正式に降りている。しかし、その後、健康が回復したので執筆者として最後まで仕事をつづけ、最終巻にはワーズワース（Wordsworth）やエドワード・ヤング（Edward Young）らの伝記を執筆している。第27巻から第63巻まではリーの単独編集になっている。*DNB*（補巻1912～1921）所収のS.リーの伝記を執筆したチャールズ・ファース（Charles Firth）は *DNB*が見事完成し、成功を収めたのは、とりもなおさず、「包括的な国民の記録を残そうというスミスの大胆な計画、すでに知られている重要な事柄はなんでも明快に簡潔に要約したいとするスティーブンの願望、知識を一層増やさんとするリーの情熱」、この三者が一体になったからにほかならないと記している。

---

(1) 1917年以降、出版権がオックスフォード大学出版局に移り、現在にいたっているが、現行版は1901年に出た3巻の補巻と合わせて全66巻を合本して22巻とし、15×23cm、クロース装丁、各巻平均1400頁として出版されている。

(2) A Statistical Accountによれば、ヨーロッパの他の諸国の同種の国民伝記辞典は不定期に、しかももっと長い歳月を要して刊行されている。たとえば、スイス（23巻、24年間）、オランダ（24巻、26年間）、オーストリア（60巻、35年間）、ドイツ（45巻、25年間）、ベルギー（1900年の時点で33年間かけてまだNの項まで）。

3　人物の採録範囲と基準及び時代別配分

全63巻中に収録された人物の数は、29120人[(1)]であった。そのうち27195人の伝記は充実した完全な伝記で、残りの1925人のものは短い伝記である。この29120人という採録数は、当時出版されていたヨーロッパやアメリカのいかなる国民伝記辞典よりも多かった[(2)]。これは*DNB*が、国民がこぞって記憶に留めるに値する際立った人物を、できる限り幅広く採録することを方針としたからである。したがって、「国民の」（National）という限定がついているけれども、初期にアメリカに移住したイギリス人、外国で名を成したイギリス人、あるいは逆に、イギリスで名を成した外国人も採録されている。また、歴史上実在したと誤って信じられてきた伝説上の人物や物語上の人物11人も採録されている[(3)]。

しかしながら、採録にあたってはどこかで線引きがなされなければならない。いうまでもなく、これには万人が納得するような原則があるわけではもちろんないが、S.リーは講演の中で、アリストテレスの以下の定義を援用して次のように考えたといっている。すなわち、「崇高で、完結した、そしてある程度の大き

---

(1)　この数字はA Statistical Accountによったものであるが、G.フェンウィックによると、実際に採録されているのは27236人の伝記であるという。また執筆者の数も653人となっているが、実際には647人だという。そのほかにもA Statistical Accountには数字上不正確な点がいくつかあるが、これを執筆した当時S.リーは補巻の編集に超多忙の上、乱雑で狭いデスクで仕事をしていたため、このような誤りが生じたのであろうと、フェンウィックは推測している。また、このくらい膨大な仕事となると今日のテクノロジーをもってしても多少の誤りは免れ難いのではないかと同情している。(G.Fenwick : ibid.,pp.xxi,xxiii)

(2)　たとえば、A Statistical Accountによれば、諸外国の国民伝記辞典はドイツ（23273人）、オーストリア（ドイツ以下）、アメリカ（2000人）、オランダ（10000人）、ベルギー（1900年現在で5000人、完成しても10000人）であるという。

(3)　たとえば、アーサー王、ロビン・フッドなど。

さをもった[1]」行為を少なくとも一回も為さなかったような人物の生涯は採録する資格がないと。たとえば、シェイクスピアが37編の劇を創作したのは第一級の「大きさ」をもつ行為であり、これに比べればウェリントン（Wellington）のワーテルローでの勝利は「大きさ」の点では一段劣った行為であるという。なぜなら、同様の軍事的成果は他の軍人によっても成し遂げられてきているし、これからも成し遂げられるであろうから、というのである。

このように、成し遂げられた行為の「大きさ」のレヴェルを徐々に下に下っていくと、何千人もの人間によって成し遂げられるような行為に到る。そうした行為しか行わなかった人物は当然ながら国民伝記辞典には採録される資格はない。「献身的な夫であり父親」であったとか、「有能な教師」であった、「模範的な教区司祭」であったというだけでは、それがいかに称賛に値することであっても、採録の条件である「際立った人物」という資格を満たすことにはならないのである。「両院の議員、市長、学部長、教授、教育委員」などの公の高位高官に就いた人物も、ただそれだけでは採録の資格を満たすことにはならない。このような地位に就いた人物は他にも少なからずいるのであるから。ただし、高位高官でも、極めて少数の人物しか就くことができず、あるいは、その地位を継承すること自体が稀なる成就と見做されるものは別である。国王、首相、大主教などの地位は、大部分の人間には就くことのできない地位であり、そのような地位に就くこと以外に「崇高で、完結した、そしてある程度の大きさ」のある行為を一切為さなくとも、採録するに値するとされている。

要するに、採録するに値するかどうか機械的に判断する基準はないが、「国民的伝記は慎重に線引きをすると同時に、寛大に受け入れるという原則を採用しなければ、その目的を果たすことは」できない。なぜなら、「国民的伝記はあらゆる層の国民の記念本能を満足させる意図をもつ[2]」からであると、リーは指摘する。

---

(1) アリストテレスの悲劇の定義、「悲劇は、崇高であると同時に、ある大きさをもって、それだけで完結しているひとつの行為の模倣である」（『詩学』第六章）を援用したもの。

(2) S.Lee : *National Biography* p.25（付録１、p.58）

これに対して、L.スティーブンはリーとは別の観点から、*DNB*に採録される資格について、もう少し「客観的」な基準もあり得ると指摘している。

歴史とは個人個人の生涯の集積であり、その個人の生涯には大きな歴史の流れが反映している、したがって歴史家も伝記作家も歴史全体の流れと個人の生涯の相互作用を見落としてはならない、というのがスティーブンの基本的な考え方である。

「歴史家は無名の人物が大衆の前に登場した特定の舞台しか扱うことができない。しかし、その出来事の意義は、表舞台に登場する前のその人物の行動を跡付けることができる時、より一層鮮明になるのである。」[(1)]歴史家と伝記作家のこうした関係をふまえた上で、歴史の研究上、これからさらに研究が見込まれる人物は国民伝記辞典にはすべて採録しなければならない、というのがスティーブンが主張する原則のひとつである。

また、採録する人物をリスト・アップする上で基礎になるのは過去に出版された様々な伝記集であり、こうした伝記集に取り上げられている人物はすべて採録される資格のある人物と見做すべきであるという。英国には聖職者、画家、医者、裁判官など、分野別の伝記集が多数あった。理想的国民伝記辞典とは、過去に存在したすべての伝記集をもれなく集大成したものか、要約したものであり、そうしたものに少しでも近づくように努力せねばならないという。そして、その上で、さらに、そうした伝記集からもれている人物で、同じように扱うべき人物を大勢補充するというのが採録上の基本原則だという。

*DNB*は以上のような原則に基づいて約３万人を採録しているわけであるが、採録されるに値する「際立った人物」の割合を数字で示すと次のようになるという。すなわち、歴史時代以降英国で成人に達した人数（24歳以上）と比較すると、5000人に１人が採録するに値する際立った人物になるという。誕生した人数に基づいて計算すると1万人に1人の幼児がそうした人物の域に到達することになるという。これを世紀別にみると、16世紀は6250人に１人、17世紀は6000人に１人、18世紀はこれより少しおちる、そして19世紀は4000人に１人という

(1)　L.Stephen ; *Studies of A Biographer*, 'National Biography'、p.16（付録２、p.83）

割合になるという。[1] 19世紀はアメリカを除く英国の植民地で英語を話す住人を含めた数字である。18世紀に割合が落ちた理由は、リーによれば17世紀に比べて歴史上大きな危機が少なかったこと、18世紀後半の工場システムの導入が社会の大部分の領域で独創的発想や行動を助長しなかったことが挙げられるという。また、19世紀末現在で、女性が採録するにふさわしい際立った人物になる割合は、男性と比較すると1対30くらいになるという。

このような統計的数字から採録されるべき人物の割合を正確に決定できるわけではないが、リーが言うように、国民的伝記辞典を作ろうとする者が完成すべき仕事の量と伝記作者が視野に入れるべき人物の割合は把握することができる。

因みに、世紀別採録者数は以下のようになっている。

5世紀の終わりまで	36人	13世紀（1201－1300）	515人
6世紀（501－600）	81人	14世紀（1301－1400）	678人
7世紀（601－700）	134人	15世紀（1401－1500）	659人
8世紀（701－800）	96人	16世紀（1501－1600）	2138人
9世紀（801－900）	57人	17世紀（1601－1700）	5674人
10世紀（901－1000）	76人	18世紀（1701－1800）	5789人
11世紀（1001－1100）	186人	19世紀（1801－1900）	12608人
12世紀（1101－1200）	377人		
		総計	29104人

(1) S.リーは、講演ではこの割合を、17世紀が6250人に1人、18世紀が6000人に1人、19世紀が4000人に1人と間違えている。スティーブンもリーが数字上の勘違いをしていると指摘している。L.Stephen : *Studies of A Biographer,* 'National Biography 'p. 1（付録2、p.74参照）。

4　記述枚数と執筆者

全63巻の総頁数は29180頁である。この中に29120(正確には27236)人の伝記が収められているわけであるから、平均すると一つの伝記の長さは、1頁弱ということになる。平均の長さは巻を追うごとに徐々に長くなっている。一番長いものは編集者のS.リー自身が書いたシェイクスピア伝で、49頁になっている。以下、ウェリントン伝（34頁)、フランシス・ベーコン（Francis Bacon）伝（32頁)、クロムウェル（Cromwell）伝（31頁）と続き、20頁代のものが12本ある。

執筆者の総数は653（正確には647）人で、そのうち1項目しか執筆しなかった者は224人、2項目から20項目執筆した者は329人、それ以上の項目を執筆したレギュラー執筆者は100人となっている。全巻の約4分の3はこの100人によって執筆されている。

執筆は、分野別にできるだけ専門の人間が通して書くようにしている。たとえば海軍関係の人物の伝記はすべてJ.K.ロートン（Laughton）が執筆しているし、俳優は殆どすべてジョセフ・ナイト（Joseph Knight）の筆になるものである。他の専門分野の人物も、2、3人程度のレギュラー執筆者によって書かれるか、1人が担当してきたものを他の者が引き継ぐという形をとっている。そうした分野をいくつか挙げると、軍人、中世史、16世紀史、17世紀史、18・19世紀の法律家及び政治家、ロンドン史上における著名人、有名なアイルランド人、有名なスコットランド人、有名なウェールズ人、国教会の聖職者、アイルランド・スコットランド及びウェールズの非国教会の聖職者、ローマ・カトリックの聖職者及び著述家、クウェカー教徒等である。スティーブンは主な文人や哲学者の伝記を書いているし、リーはエリザベス朝の文人や政治家の伝記を数多く執筆している。オースティン・ドブソン（Austin Dobson）は同様に18世紀の文人を、リチャード・ガーネット（Richard Garnett）は19世紀の文人を多数執筆している。その他美術家、建築家、音楽家、古銭研究家、メダル製作家、医者、天文学者、植物学者、地質学者、化学者、エンジニア、発明家、数学者、

農学者、経済学者などもそれぞれの専門家によって一貫して担当されている。

100人のレギュラー執筆者の中でも、とりわけ34人が大量に執筆している。これらの執筆者の分だけで各巻の半分が占められ、総計するとそれだけで38巻以上に及ぶ。全巻に執筆している執筆者は7人いる。大量執筆者の中の上位10人を以下にあげる。

1.	Sidney Lee	1370頁（3巻分）	820項目	(753、63)
2.	J.K.Laughton	1000頁（2巻1/4分）	904項目	(895、9)
3.	Leslie Stephen	1000頁（2巻1/4分）	378項目	(281、97)
4.	T.F.Henderson	900頁（2巻分）	918項目	(866、52)
5.	Thomson Cooper	900頁（2巻分）	1422項目	(1451、7)
6.	William Hunt	830頁（2巻分）	595項目	(577、18)
7.	Alexander Gordon	750頁（1巻3/4分）	691項目	(685、6)
8.	Gordon Goodwin	730頁（1巻3/4分）	1178項目	(1164、14)
9.	Thomas Secombe	680頁（1巻1/2分）	578項目	(567、2)
10.	W. P. Courtney	610頁（1巻1/3分）	595項目	(593、2)[1]

こうしてみると、L.スティーブンとS.リーは有能な編集者であったと同時に、重要な執筆者であったことがわかる。

(1) G.フェンウィックの調査によると、A Statistical Accountに示されているこの執筆者たちの項目数には、執筆者の署名がはいっていない項目数も含まれているという。右に挙げた（　、　）内の数字は、左が署名入り項目数、右は無署名の項目数を示している。依頼した原稿が内容的に使いものにならない場合、ここに挙げた執筆者たちが大幅に書き換えたらしく、そういう場合、その項目は無署名にしておいたのであるが、リーはそうした項目も実質的執筆者の項目数に数え入れたのである。スティーブンとリーにとりわけ無署名の執筆項目が多いのはそのためである（G.Fenwick:ibid., p.xxii)。

5　記述の仕方

限られたスペースに大量の人物の伝記を登載する国民伝記辞典と、スペースのことを気にしなくともよい個人の伝記では、執筆に際しては当然異なった記述法が要求される。

S.リーは両者の記述法の違いについて、次の3点を指摘している。すなわち、国民伝記辞典は個人の伝記に比べて、(1) 叙述がすこぶる簡潔でなければならない、(2) 生涯の日常的側面あるいは些事に類する側面は省略しなければならない、(3) 比較考量という原則に基づいて記述されなければならない。[(1)]

(1)と(2)については言うまでもないことであろう。採録人物数についてはできる限り多くの人物を採録するのがその方針であるから、記述スペースについては可能な限り簡潔にする方針を採らなければ膨大な巻数になってしまい、使用に堪えないものになってしまう。リーはJ.プリーストリー（Priestley）[(2)]の言葉を援用して、「最小限のスペースの中にでき得る限り多くの知識を盛り込む」[(3)]ことが、国民伝記辞典の記述に一貫していなければならない記述法であると強調している。L.スティーブンも国民伝記辞典は墓碑銘ほど厳しい制約は課せられていないが、墓碑銘と同じ長所を備えなければならない、すなわち、可能な限り少ない言葉でその人物の人となりと、子孫に記念として伝えるべき事柄の要点だけを記さなければならない、と指摘している。[(4)]

個人の伝記の場合はその人物を賛美するために熱い思い入れを込めたレトリックを弄したり、細部の事実を長々と書き連ねたり、閑話休題的エピソードを盛り込むことも許されるだろう。だが、伝記辞典の場合はそれらは一切許され

---

(1) S.Lee : *National Biography* p.23（付録1、p.56）

(2) Joseph Priestley（1733～1804）イギリスの化学者、聖職者。

(3) ibid. p.20（付録1、p.52）

(4) L.Stephen : *Studies of A Biographer,* 'National Biography', p.27（付録2、p.90）

ない。その人物の生涯の全体像を明確に示す事実（生年月日、教育を受けた場所、結婚、子供、死亡年月日など）と、その人物を際立たせている人生のエピソードに叙述を集中しなければならない。前者は叙述の一貫性に不可欠であり、正確を期さねばならない。しかし、叙述の中心はあくまで後者であり、前者は後者に従属した叙述にしなければならない。

その人物が家庭人として立派な人物であったというような月並みな事実については筆を控えるが、一方、異常な精神的傾向や通常の道徳規範から逸脱した行為があった場合には、慎重を期しつつ叙述せねばならない。道徳的堕落そのものよりも、それがその人物の業績に及ぼした影響の方にスペースを割くべきであるとリーは注意している。しかし、それが常習的であったり、悪名高き場合[(1)]は記述すべきであるという。その場合も周囲の人間に及ぼす影響を考慮しつつ、公正な判断に基づいて記述しなければならない。この辺の配慮はいかにもヴィクトリア朝の人間らしい。

レトリックを弄したり、批評的な論文を書くことも避けねばならない。事実を指摘するだけで満足し、論争を挑んだり、長々と解説したりすることはできないのである。たとえば、宗教上の異端の悪影響について長広舌をふるったり、異端であることを証明しようとしてはならない。その人物の信仰が当時主潮となっていた思想との関連でどのように歴史上位置付けられるかを指摘し、専門家の見解を紹介するだけに留めておかなければならない。

日付は個人の伝記の場合よりも短い間隔で登場しなければならないし、小さな業績や就いた地位、作家の場合ならその著作物、画家や彫刻家ならその作品は年代順に、あるいはカタログ式に整理して淡々と記述されなければならない。リーはこうした叙述の違いを、個人の伝記を絵に、国民伝記辞典を地図あるいは設計図にたとえている[(2)]。

以上の指摘からすると、リーもスティーブンも国民伝記辞典の記述はいくら

---

(1) リーは例としてバイロン（Byron）やネルソン（Nelson）の不倫騒動、コールリッジ（Coleridge）が阿片に、ポーソン（Porson）が飲酒に溺れた例などを挙げている。

(2) S.Lee : *National Biography* p.21（付録１、p.53）

無味乾燥なものであっても構わないと言っているかのように思われるが、そうではない。リーは上述のたとえの後に続けて、「建築設計に芸術味がまったく無くていいわけがないのと同じように、国民伝記辞典も適切に書かれた時には文芸作品の香りをなにがしか備えている[(1)]」と指摘している。スティーブンも大事なのは本当に興味深い点を骨抜きにしないようにして圧縮することであり、「英雄的行為について筆者自身が称賛の辞を述べることはできないが、読者が賛嘆の言葉を洩らしたくなるように文章を構成しなければならない。言葉を慎重に控えめにすることによって、かえって一層感動を高めることもできる」と述べている。そして、「理想的な記述というのは、機械的に並べられる生のままの日付や事実に縮約してしまうという意味で圧縮されたもののことをいうのではない。目指すべき目標は、教養のある人であれば心から興味を抱くようなものは何であれ、すべて提供するということである[(2)]」といっている。

このように、圧縮して述べることは「伝記辞典執筆者の文体上の何よりも重要な美点であるばかりでなく、そのために他のすべてのものを犠牲にすべき美点なのである[(3)]」とスティーブンは言うのであるが、これには高度の技術が要求されることは無論のこと、非常に強い克己心も要求される。何故なら、苦労して事実を発掘しながら、スペースの関係でそれについて口をつぐまざるを得ない結果になることも間々あるからである。また、そのために文体が拙くなることも覚悟しなければならない。これは現実に伝記執筆者としてのスティーブンの痛切な嘆きだったようである。「哀れな伝記執筆者は文体がはなはだ拙くなるという犠牲を払っても文章を圧縮しなければならないのである。百語も費やせば美しい文章になると思えるのに、それを十語で言い尽そうとして必死になって組み立てたおぞましい文章があることを私は嫌というほど承知している。短いドラマチックな装飾としてもってこいに思われる魅力的な逸話に出会うと思わずうなってしまうことがある。そして心を鬼にしてそれを割り当てられた片

(1)　S.Lee : *National Biography* p.21（付録１、p.53）

(2)　L.Stephen : *Studies of A Biographer*, 'National Biography', pp.23-24（付録２、p.88）

(3)　ibid. p.22（付録２、p.87）

隅に押し込めたことがある。[1]」これは一人スティーブンだけの嘆きではあるまい。執筆者全員の嘆きであったろう。[2]

S.リーのいう(3)の比較考量の原則というのは、個々の伝記の長さは記述される人物の業績や人となりの本質的価値や面白さに応じて、決定されなければならないということである。そのためには、記述される人物の軽重の度合いを正確に判断し、優先順や位置付けを慎重に考慮しなければならない。郷土の恩人にお国自慢からでた賛辞を奉ったり、お気に入りの作家だといって二流、三流の作家に大量の頁を割いてはならないということである。そういう意味で、リーは国民伝記辞典の執筆は「比較研究」であるといっているのである。[3]

以上はリーもスティーブンもともに指摘している記述上の注意点であるが、次にスティーブンだけが指摘している点をいくつか挙げておく。(1) 国民伝記辞典というものは、その人物について今までに書かれたものをすべて指摘するものでなければならない。(2) 最近の研究成果を手短に述べ、最もすぐれた専門家たちの間で通説となっている見解を解説しなければならない。(3) 今後問題となると思われる点を指摘する。(4) 最良のかつ最もオリジナルな情報源を提示する。(5) 個々に充実した伝記のある偉人の場合は、それらをすべて読んで、要約し解説するだけで満足しなければならない。

とくに(4)については、スティーブンは、「良き辞典の最も重要で価値ある部分は、その事項についての権威者たちを列挙した無味乾燥なリストである。[4]」と指摘している。辞典の場合、記述の分量には限界があるわけであるから、さらに

---

(1) L.Stephen : *Studies of A Biographer*, 'National Biography', p.23（付録２、p.88）

(2) 簡潔な記述をすることには高度の技術が要求される。他人の原稿をチェックする編集者として、絶えず冗漫な原稿に悩まされていたスティーブンはC.E.ノートンへの手紙に次のように書いている。「私の最大の悩みの種は、平均的執筆者たちの常軌を逸した言葉数の多さと格闘しなければならないことです。たったひとつの事実を表現するのにこんなにも多くの言葉を費やせるものとは思いもよりませんでした。山のような原稿を読み、至る所を削除し、ある原稿など３分の１にまで切り詰めてしまいました。」（G.Fenwick : ibid., p.xii）

(3) S.Lee : *National Biography* p.22（付録１、p.55）

(4) L.Stephen : ibid. p.19（付録２、p.85）

詳しく知りたい者のための文献案内は必要不可欠であり、またそれは、辞典の最も貴重で有用な部分でもある。スティーブンもいうように、なんの変哲もないリストであるが、このリストの作成にはしばしば熟練と多大の労力が要求されるのである。

なお、伝記の末尾には参考資料及び情報源のリストが必ず付記されている。

6　*DNB*出版の意義及びその価値

*DNB*出版の意義とその価値についてL.スティーブンとS.リーは自ら編集に携わりながら、どのように考えていたか。'National Biography'とそれぞれ題するエッセイと講演の中で二人が指摘していることを以下にまとめてみる。

まず、リーであるが、彼は講演の中で出版の意図あるいは意義として次のような点を挙げている。すなわち、およそ文明国の国民であるなら、傑出した自国の先祖の思い出を国民共通の思い出として永久に残したいという願望がある。それは、いわば国民の祖先にたいする「記念本能」(commemorative instinct)ともいうべきもので、この本能を満たさんとするのが*DNB*であるという。祖先の傑出した業績や人となりを国民全体で記念する方法は色々あるが、彼にいわせると次の3条件を満たしていないとそれは効果のある妥当なものとはならないという。すなわち、記念するものが恒久的であり、公共のものであり、わかりやすいものでなければならないということである。たとえば、記念する方法として、ピラミッドや彫像などのモニュメントや墓碑銘、讃歌などがあるが、いずれも上記の3条件を満たすとはいえない。3条件を満たし、なおかつ、できるだけ広く大勢の国民を記念しようとするならば、国民伝記辞典が最もふさわしいとリーは主張する。

また、長い間忘れられてきた偉人を発見したり、不当に評価されてきた人物を正しく歴史の中に位置付けることも国民伝記辞典の存在によってはじめて可能になるという。たとえば、有名な科学上の発見や、機械の発明などは、その最終的発見者や発明者だけに名誉と称賛が帰せられがちであるが、彼ら以前に、あるいは同時に、同じ目的に向かって努力を重ねてきた人たちがほかにもいたからこそ成就したものが少なくない。こうした人物の業績は最終的完成や成就に至らなかったという、ただそれだけの理由でまったく忘れられてきている。そうした人物たちにもそれぞれにふさわしい光を当てるのが国民伝記辞典なのである。歴史家カーライル (Carlyle) は「偉大な人物を見つけ出し、ほこりを

ぬぐい、ふさわしい台座の上に据えること」は歴史家の役目だといっているが、リーはこれこそ国民伝記辞典の執筆者が担うべき役目なのだと強調している。したがって、今まであまりかえりみられることのなかった、いわば二流の人物たちが大勢*DNB*には採録されている。偉大な人物たちの生涯はすでに出版されている個人の伝記を読めば簡単に知ることができるわけであるから、スティーブンのいうように、*DNB*の本当の価値は、偉大な人物たちの伝記にあるのではなく、そうした二流の人物たちの伝記にあるということができるだろう。死亡記事や様々な回想録、書簡集などを渉猟しなければ知ることのできない人物たちの生涯をたちどころに知ることができるということこそ、*DNB*の真価といえよう。

リーは、政治的出来事や制度を通して民衆のまとまった大きな動きを叙述するのが歴史家であり、一方、社会の発展を叙述することよりも人類という大きなかたまりの中から傑出した人物という単位を選り分け、それを詳細に調べるのが伝記作者の仕事だという。「歴史家は人類全体を双眼鏡で見、伝記作者は個人を虫めがねで見る」のだと。これに対して、L.スティーブンは歴史家と伝記作者の役割と領域をこのように単純に区別し割り切ってしまうことには反対のようである。なぜなら、すべての個人の生涯には、その個人が生きた時代の状況が反映しているのであり、「世捨人でさえ、少なくとも、両親と学校教育のもたらした成果であり、同時代の思想の影響を受けている」[(1)]からである。そして、この事実が歴史家にも伝記作者にも無視されているとスティーブンは指摘する。歴史と伝記という二つの学問が相互に依存しあっているのは明白であり、お互いの研究が相互に光を投げかけ合い、新鮮な活力を与えあうことが必要である。伝記作者の第一の任務は伝記と歴史のそうした相互作用を円滑にすることであり、*DNB*もそうした役に立たんとするものであるとスティーブンは主張する。

こうした観点に立って、スティーブンは*DNB*発刊の意義は次の点にあるという。すなわち、資料というものは蓄積すると同時に利用しやすくするための工夫が常に施されなければならない。大きな図書館は蔵書が増えるにつれて蔵書

(1)　L.Stephen : *Studies of A Biographer*, 'National Biography', p.12（付録２、p.81）

目録をきちんと整備していかないと「絶望的な迷宮と化す」。また、目録と同時に蔵書に関する明快な案内が必要である。これがなければ「広大な荒野をさまよう」ことになる。この「荒野」はあらゆる「豊饒な土地」へとつながっているのであるから、これを抜け出す小道を明快なシステムに基づいて知る必要がある。「この必要性に応えること、あるいはこの必要性の一部でも満足させる手段を提供すること、これこそ*DNB*が第一に意図するところである」と。*DNB*は「山のような古文書の泥沼を渡るための舗装道路の働き[(1)]」をするのだと。

さらに、スティーブンは*DNB*の存在価値について次のようなことを指摘している。すなわち、存在するかどうかも疑わしい情報を求めて闇雲に何冊も書物をひっくり返したり、図書館をいくつも調べて回るのは途方もない労力と時間を費やす作業である。最終的に見つけることができればよし、できなければ膨大な時間と労力は無駄に費やされたことになる。そうした場合に、もし「そこに見つけることができなければ、そういった情報はそもそも存在しないのかもしれないと多少とも自信をもって言い切れる一冊の書物、あるいは図書館があれば私の努力は否定的な結果ではあるが、明確な結果を生じたことになる[(2)]」。大英博物館にありとあらゆる印刷物を収集しておくのはこのためだという。大英博物館の「膨大な書棚のどこを探しても記録が見つからないということは、それ以上その事実を探求してみたところで十中八九無駄骨に終わるだろうということがわかっていれば、やれるだけのことはやったという満足感を得られるからである[(3)]」。これはアカデミックな研究に携わる人間の精神衛生にとって非常に大切な点である。資料の探求はやりだせば切りがないわけで、資料の探求そのものを専門にしている人は別にして、研究者は資料の探求にはある程度で見切りをつけなければいつまでたっても自分の専門の仕事を完成させることはできない。かといって、適当にすませれば研究者としての良心が痛む。その場合、この書物に当たって、なおかつ見つけることができなければ、それ以上の探求

(1) L.Stephen : ibid. pp.11-12（付録２ ,pp.80-81）

(2) ibid. p.18（付録２、p.84）

(3) ibid. p.18（付録２、p.85）

はあきらめても一応は許されるという、権威のある広汎な典拠があれば実にありがたい。逆にいえば、それはその書物に当たっていなければ、まだやるべきことをやっていないと見做されるような書物である。いかなる伝記辞典も完全な意味で網羅的ではあり得ないが、「*DNB*は、歴史の研究者の目的からすれば完全なものではないが、網羅的に近いもの[(1)]」といえる。また、たしかに*DNB*は二次的な典拠にすぎないが、「最も徹底した研究家でさえ、膨大な二次的な事実はそのまま信用するしかないのだ。そして、そうすることによって二次的な事柄から専門知識に関する情報を得る際の際限のない労力は節約されることになる[(2)]」。スティーブンにいわせれば、これこそまさに辞典というものの実用的価値なのである。このあたりのスティーブンの指摘は、単に卓越した伝記作者として仕事をしたのみならず、すぐれた思想史や評論[(3)]を書き上げた著述家としての実感がこもっている。アカデミックな研究者は同感するところであろう。

さらに、スティーブンは、疑問が湧いたら即座に利用できる便利さこそ辞典の身上であり、伝記辞典というものは「いわば絶えず身近にいて、関連が出てきそうな二次的な問題について、歴史家だけでなく、古物研究家や系譜学者、書誌学者たちの知識をかいつまんで教えてくれる信頼のおける友人のようなものでなければならない」と指摘している。そして、そのためにも「いつもポケットにしのばせておく[(4)]」ごとく、常に座右に備えておいてもらいたいと希望を述べている。

---

(1)　ibid.p.18（付録２、p.85）

(2)　ibid.p.20（付録２、p.86）

(3)　代表的評論に『直言と自由なる思考（*Essays on Plain-speaking and Free-thinking*）』（1871）があり、著述家としての地位を確立した思想史に『十八世紀英国思想史（*History of English Thought in the Eighteenth Century*）』（1876）などがある。

(4)　ibid.p.11（付録２、p.80）

7　補巻（Supplements）について

刊行開始後に亡くなった同時代人800人と、偶然採録から洩れ落ちた人物200人の合計1000人を補った3巻の補巻[(1)]が1901年9月に出版されている。偶然洩れ落ちた人物200人は中世から19世紀末まで、様々な時代に属している。しかし、この補巻を出す主な目的は刊行開始後に亡くなったり、編集中に亡くなったために、伝記の執筆が間にあわず、登載することができなかった著名な同時代人を補充することであった。したがって、AからEの項目の人物で3巻の半分が占められている。

もともとは19世紀の終わり、すなわち、1900年の12月31日までに亡くなった人物を採録する予定であったが、ヴィクトリア女王が1901年の1月22日に亡くなったので、女王の伝記を含めるために女王の死の日まで期間を延長している。英国の歴史上、19世紀の終わりという時代区分よりもヴィクトリア朝時代の終わりという時代区分のほうがより意味があると考えたためだという。

また、補巻編集中の1901年4月6日には*DNB*の創設者で所有者でもあるジョージ・スミスが亡くなっている。スミスの伝記はヴィクトリア女王同様、S.リーが執筆し、この偉大な出版人を記念して、肖像画とともに補巻の第1巻の冒頭に掲げられた[(2)]。

1917年、スミス，エルダー・アンド・カンパニー社の消滅により、ジョージ・スミス未亡人の申し出を受けて*DNB*の出版権はオックスフォード大学出版局（Oxford University Press）に移される。現行のOUP版はオリジナル本体の63巻と補巻3巻の計66巻を合本して22巻となっている。

1901年の補巻以降「20世紀*DNB*（*The Twentieth Century DNB*）」として、

---

(1)　現行のOUP版では1巻に合本されて第22巻となっている。

(2)　現行のOUP版では本体第1巻の冒頭に収められている。但し、肖像画は削除されている。

1971～1980年の補巻（1986年出版）まで、10年刻みで8巻の補巻が出版されている。1981年以降は5年刻みとなり、1981～1985年の巻（1990年）が現在出版されている。

次に、各巻の出版年、編集者、採録人数（項目）、頁数、及び前書きの中で編集に関する重要な部分を要約する。

1901～1911年――1912年出版、S.リー編、採録人数1660人、2035頁、オリジナル版は3巻、現行版は1巻。

採録された人物1660人のうち、オリジナル版3巻の第1巻には500人が登載されている。その500人を職業別に分類すると以下のようになるという。

英本国、インド、その他植民地の役人　（53人）
美術（建築、音楽、舞台を含む）　（70人）
商業及び農業　（17人）
陸軍、海軍　（44人）
社会改革（慈善、教育を含む）　（34人）
文学（ジャーナリズム、文献学、哲学、出版、辞典を含む）（115人）
法曹　（19人）　宗教　（54人）　スポーツ　（8人）
科学（工学、医学、探険を含む）　（86人）

1912～1921年――1927年出版、H.デイビス（Davis）、J.H.ウィーバー（Weaver）共編、採録人数458人、600頁。

出版権がOxford University Pressに移されて最初に出版された補巻。前回の補巻よりも全体の分量を縮小する方針がとられる。というのも、前回同様の方針でいくと15000人、20000頁にも及び、使用に耐えないものになるからである。1901年の補巻も含めて本体ですら30000項目弱なのであるから、これは当然であろう。編集者は'Est modus in rebus.'（「物には程度あり」）というホラティウ

スの言葉を引用して、編集方針の妥当性を訴えている。具体的には、必須の事柄を洩らさない限りは、一項目あたりの平均的長さを縮小した。ただし、同時代人でなければ下せないような評価や情報にはできるだけスペースを割いた。なお、1926年3月3日に亡くなったS.リーの伝記（C.H.ファース執筆）が巻頭（寄稿者リストの後）に掲げられている。

1922～1930年――1937年出版、J.R.H.ウィーバー編、採録人数567人、933頁。

前巻よりは採録人数も、個々の伝記に割かれたスペースも若干多くなっている。このままの割合で採録を続ければ、今世紀の終わりには本体と1901年に出版された補巻に、さらにほぼ7000人位の人物が追加されることになる。そうなると本体部分がもっている歴史的尺度とパースペクティブが失われてしまうことになりかねない。本体部分の目的は、その行動や思想、著作、発見などで自らの時代に貢献した人物、したがって、現在及び将来その人物の生涯を調査することが意義をもつことになりそうな人物のみを採録するのが目的だったはずである。

同時代人を扱うということは、当然ながら伝記の執筆に影響がある。

まず第一に公的なものであれ私的なものであれ、材料が膨大にあるので、情報を得ることよりも、重要な情報を取捨選択することのほうが難しい。第二にほとんどすべての寄稿者が採録する人物に対して個人的な評価を下せる立場にある。私情を一切はさまない判断が必ずしも完全無欠であるとは限らない。本巻にみられるような評価は同時代人の見解として将来独自の意義をもつものになるだろう。また、同時代人の評価を無視した説や推量を排除する上でも歴史家にも伝記作家にも有用なものとなろう。

1931～1940年――1949年出版、L.G.ウィッカム・レッグ（Wickham Legg）

編、採録人数729人、933頁。

採録にあたっては、厳し過ぎず、かつ安易過ぎないように中庸を心掛けた。

1941～1950年――1959年出版、L.G.ウィッカム・レッグ、E.T.ウィリアムズ（Williams）共編、採録人数725人、988頁。

1951～1960年――1971年出版、E.T.ウィリアムズ、H.M.パーマー（Palmer）共編、採録人数760人、1099頁。

1961～1970年――1981年出版、E.T.ウィリアムズ、C.S.ニコルズ（Nicholls）共編、採録人数745人、1123頁。

同性愛については、かつての補巻では触れられなかったが、本巻ではより率直に語られている。そのためにE.M.フォスター（Foster）やW.サマーセット・モーム（Somerset Maugham）といった文人の生涯がより理解しやすくなった。

1971～1980年――1986年出版、ロード・ブレイク（Lord Blake）、C.S.ニコルズ共編、採録人数748人、935頁。

編集方針はほとんど従来のものを踏襲しているが二点だけ変更した。

ひとつは、これまでは採録した人物の写真以外の肖像画や彫像の存在について必ず言及していたが、カラー写真の時代になった今日必ずしもその必要がないと思われる。したがって、一律にすべて言及することは時間の浪費になるのでやめることにする。

また、すべての採録人物について、その父母、生没の日付と場所、家族の中の位置（三男であるとか、4番目の子供であるなど）、結婚についての詳細、子供の数について記述するのが習慣になっていた。しかし、これらのあるものについては調査が想像以

上に難しいものがある。したがって、割愛したものもある。

1981～1985年――1990年出版、ロード・ブレイク、ニコルズ共編、採録人数380人、436頁。

初めて5年おきに補巻を出すことになった。その理由は、(1) 補巻をもっと頻繁にだせという大勢の読者の要望があったこと、(2) それを可能にする新しい技術が出現したこと、(3) 従来のように10年間単位で扱っていた項目数が半分になると編集がしやすくなること、(4) 5年にすると採録人物の同僚からの個人的情報が得られるが、(5) 10年だとその同僚も亡くなってしまう可能性があることである。

編集者は代々、採録人物の知人や一緒に仕事をした人物に執筆を依頼するのが長い間の慣例になっている。彼らは後世の歴史家には書けないような視点で記述することができる。

例外的なものを除いて750～1000語でまとめてもらった。[1]

当然採録されるべきなのに、不注意や死後名声が高まる(たとえばG.M.ホプキンズ(Hopkins))などして洩れ落ちている人物たちを集めた巻の編集に着手した。採録するにふさわしい人物で洩れ落ちている人物を教えてもらいたい。

10年刻みで、そして最新巻では5年刻みで登場することになった補巻は英国民にとってまさに「時代の肖像」(a portrait of an age)[2] なっており、伝記による同時代史として、続巻が常に待望されているようである。また、エッセイの伝統が衰退しつつある英国にあって、その人物を知る人間が書いた活き活き

(1) これもこの巻の特徴のひとつで、すべて短くまとめられており、長いものでもせいぜい2頁程度にまとめられている。この傾向は前2巻の補巻からみられる傾向であるが、それらにはたとえばW.チャーチル(Churchill)の23頁にわたる伝記などまだ長文のものが幾編か含まれている。

(2) Charles Moore, The Independent 紙書評、1986年12月4日。

とした人物エッセイとして、「編集者の厳しいチェックを受けた」「最良のエッセイ集のひとつ」('one of the best anthologies of the short essay'[1]) として高く評価されている。補巻が出るたびに、過ぎ去ったばかりの過去を回顧し、その時代を新たにとらえなおすのが、英国人の知的楽しみであるようだ。

(1) Michael Holroyd, The Guardian 紙書評、1981年10月 1 日。

8　100年目の*DNB*の評価

1985年は、*DNB*の第1巻が世に出てからちょうど100年目にあたった。1971～1980年の補巻の序文によると、1961～1970年の補巻以来編集を続けているC.S.ニコルズの発案によって1月30日に初代編集者であるレズリー・スティーブンの業績を称えて記念講演が行われたという。講演をしたのはスティーブンの専門家のアラン・ベル（Alan Bell）である。講演の後、オックスフォード大学の副学長がホストとなり、オックスフォード大学出版局の代表者が主催してパーティが催され、ケンブリッジ大学出身の偉大な人物スティーブンにオックスフォード大学関係者は感謝を捧げたと記している。

また、「タイムズ文芸付録」（The Times Literary Supplement）の1985年4月26日号はA.O.J.コックシャット（Cockshut）の「*DNB*の100年」という記事を掲載している。100年たった時点で*DNB*の長所と短所を総括しているのであるが、的を得た批評となっているので要点を紹介しつつ、コメントを付け加えることにする。

スティーブンの伝記を書いたF.W.メイトランド（F.W.Maitland）[(1)]によると、スティーブンは、個々の伝記の執筆者として単に有能であるばかりでなく、広い心をもった寛容な人物、執筆対象となっている人物に共感を抱けるような人を確保すべく編集者として努力したという。これはなんでもないことのように思われるが、しかし、伝記の執筆には重要な要件であろう。対象となっている人物に興味も愛着も抱けなければ、味も素っ気もない無味乾燥な伝記になりやすいし、狭量な執筆者なら、人物のちょっとした傷を針小棒大に言いたてて、非難と罵倒の伝記にしてしまいかねない。それでは先人たちの生涯を国民共通の思い出として記念するという国民伝記辞典の主旨に反することになる。かといって、あばたも笑くぼとなっても困るわけで、対象となっている人物に寄せ

(1)　Frederic W.Maitland : *The Life and Letters of Leslie Stephen*, London, 1906。

る親愛の情は、冷静に慎重に抑制されなければならない。コックシャットによると、キャノン・エインジャー（Canon Ainger）[1]は、1897年に、*DNB*の執筆要領をユーモラスに'No flowers by request'だと要約しているという[2]。これは死亡広告などに用いる決まり文句で「弔花御辞退申し上げます」に相当する。死者を悼むからといって伝記を美辞麗句で飾ることはしないということである。コックシャットはエインジャーは「かといって、墓碑銘に刻まれている華麗な言葉にも偏見を抱くことなく執筆する」と付け加えたことだろうと言っている。コックシャットが指摘するように、ここに初代編集者以来、代々の編集者が頭を悩ませてきたディレンマがある。すなわち、人物の欠点や問題点もきちんと記すだけの決意が必要だし、同時にそれがその人物の評価を一挙に低下させてしまうような書き方にならないよう配慮も必要だというわけである。現代の読者の観点からすると、*DNB*の本体部分の記述の仕方は、いかにも堅苦しい道徳観が支配していたヴィクトリア朝の産物らしく、あからさまな記述は極力避けてあり、物足りないように思われる。しかし、コックシャットは*DNB*の記述は当時としてはかなり率直で、当時の読者はわれわれ以上にその率直な記述に衝撃を受けたかもしれないという。

例として、コックシャットはスティーブンの書いた歴史家トーマス・カーライル（Thomas Carlyle 1795～1881）の伝記を挙げている。カーライル自身生前に、英国の伝記は伝統的に奥歯にものがはさまったような記述が多い、と非難していた歴史家なのであるが、その弟子のJ.A.フルードは*DNB*が企画されるすこし前にカーライルのかなり率直な伝記を発表して評判になっていた。スティーブンが書いた伝記はこのフルードの伝記の影響もあってか、当時の伝記辞典の記述としては夫婦間の心理的葛藤などについてかなり率直に書き込まれている。なるほど、ヴィクトリア朝という堅苦しい時代を生きていた読者には、

---

(1) Alfred Ainger（1837～1904）イギリスの作家、聖堂参事会員。随筆家チャールズ・ラム（C.Lamb）の専門家で、*DNB*にラムの伝記を寄稿。その他友人だったテニスン（Tennyson）などの伝記も寄稿。

(2) *DNB*補巻（1901～1911）所収のAingerの伝記も参照（p.27）。

つい昨日まで生きていた同時代人の日常生活が率直に記述されていると感じられたかもしれない。もっとも、率直といってもあくまで比較的ということであって、たとえば性的な事柄はほとんどタブー扱いされ、それこそ奥歯にものがはさまったような記述がされている。フルードもスティーブンもカーライルがインポテンツであったらしいことには一切触れていない。「カーライルの夫婦関係に関するスティーブンのもやもやとした記述も、このことに触れておけばもっとすっきりとするように思われる」とコックシャットはいう。

コックシャットは挙げていないがオスカー・ワイルド（Oscar Wilde）の伝記などもアルフレッド・ダグラス（Alfred Douglas）との男色問題に一切触れていないので生彩を欠いた伝記になってしまっている。伝記ではこの点については単にCriminal Law Amendment Actによって罰せられ、投獄されたとあるだけである。この法律がヴィクトリア朝の社会が厳しく取り締まっていた同性愛を罰する法律だとピンとくる人は今ではあまりいまい。この辺のことを書かなければ、英国の世紀末芸術においてワイルドの占めた特異な位置は理解することができないし、そもそも最後の作品である『獄中記（深淵より）』が何についての告白録であるかもまったくわからない。ワイルドの生涯を破滅させた事件であったばかりでなく、当時ロンドン中の耳目をそばだてたこの事件について、その内容にまったく触れないというのは現在の伝記では考えられないことである。

ホモセクシュアリティの問題も避けずに触れるとようやく宣言したのは、前述したように1981年出版の補巻の序文である。一番新しい1990年出版の補巻では、渡部昇一教授も指摘しているように[(1)]、たとえば、アーサー・ケストラー（Arthur Koestler）の伝記では彼の奔放な性生活についても筆を抑えずに記述されている。現代人の目からみても記述が率直になったと思われるのは最近の補巻になってからである。

コックシャットは当時としては比較的率直な記述がなされたことを*DNB*の進歩的側面としてそれなりに評価しているのであるが、一方相変わらず根深く因

(1) 「英語教育」1990年7月号、57頁。

襲にとらわれている点もあることを指摘している。コックシャットが例として挙げているのは、平凡で退屈な人物であったヴィクトリア女王に、当時の最も偉大な作家であったチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）や、精神界で当時最も影響力のあったニューマン（Newman）枢機卿[(1)]の10倍以上のスペースが割かれているという事実である。女王の伝記を書いたのはS.リーだが、その記述の仕方も当たり障りのない退屈なものになっているとコックシャットは不満をもらす。そのつもりになれば、女王の欠点として非難できるような事実を記述しながら、非難めいた指摘は一切していないという。たとえば、「女王に仕えていた者たちは、女王は決して寒さをお感じにならないらしい、と嘆いていた」と書きながら、このことから女王が利己的人物で、常に自分の便宜を優先させる人物であったと推測できるのに、リーにはそのような事を指摘するつもりは微塵も念頭になかったらしいと非難している。コックシャットにいわせると、リーはスティーブン以上に因襲にとらわれた人物であったということになる。もっとも、この非難はヴィクトリア朝の人間にたいする現代人のないものねだり的要求と言えなくもない。

また、チャールズ・ディケンズの伝記の中でスティーブンはディケンズが妻との別居を世間に公言するという非紳士的行為を行ったと非難はしているものの、現実にディケンズが妻をどう扱っていたかについては一切触れていないとコックシャットは指摘する。ディケンズは実際は冷たい独善的人物であったらしく、彼の子供の一人は父親のことを「すこぶる底意地の悪い人間だった」と言っているし、また、彼は、妻が子供たちと会うことを決して許さなかったという。スティーブンはそういう事実にまったく触れていないとコックシャットは指摘する。さらに、ディケンズの晩年の小説にはインスピレーションが衰えてしまっているという、まったく見当違いの判断すら下しているという。前者について言えば、女王や当代一の小説家の伝記を歯に衣を着せずに書くことは易しいことではないが、できる限りその人物の実像にせまらないと、時がたつ

(1) John Henry Newman（1801～90）イギリスの神学者。英国国教会の牧師からカトリックに改宗。当時多くのイギリスの知識人が彼の影響によって改宗する。

とその伝記は色褪せたものになってしまう。後者について言えば、文学上の評価は、それぞれ時代ごとに独自の趣味や流行があり、それに左右されるので、1世紀以上もたてば現代と評価にずれを生じてもある程度は致し方がないというところであろうか。

全体的な事柄では、*DNB*が着手される前に亡くなっていた人物と、それ以後に亡くなった人物では、その記述のトーンに違いがあると指摘している。前者の記述はいわば学究的な要約で、しばしば公平さと、圧縮された記述が目立つという。はるか昔に亡くなった人物については史料だけを頼りに書くわけだから、これは当然であろう。一方、1850年頃以降に亡くなった人物の伝記にはもっと親密さがこもっているという。これは、その人物を実際に知っていた者が執筆したわけだから、これまた当然そうなる。その証拠に、末尾に付されている参考資料及び情報源の箇所には、'private information'（未公開の私的な情報）、'personal knowledge'（執筆者が直接個人的に知っていたこと）という記載がしばしばみられる。因みに、当の人物を実際に知っている者に執筆してもらうため、その執筆者が亡くならないうちに書いてもらうという目的で、初めて5年刻みで出された1981～1985年の補巻では、ほとんどどの頁にも'private information'、'personal knowledge'の付記がみられる。本体部分よりも補巻の伝記のほうにより生々しい人物像が描かれているのは当然であろう。

最後に、コックシャットはこうした伝記辞典の価値を我々が判断する際に規準になるのは、どの程度正確な記述がなされているかという点と、どの程度包括的に人物を採録しているかの二点であると指摘している。前者についてはスティーブンの書いた詩人トーマス・グレイ（Thomas Gray）の伝記は「校訂ということにまったく鈍感で、すべての文が不正確で不適切で、誤解をまねく代物」とこきおろす専門家もいるが、一般には権威ある典拠として高い評価を受けてきているという。後者については、採録洩れがあるのは、主としてその人物の名声が死後高まったためであろうという。しかし、たとえば、19世紀最大の詩人G.M.ホプキンズが落ちているが、それが今になっても訂正されないのはおかしいと苦言を呈している。この点に関しては、補巻の章で指摘したように、現在の編集者たちは、採録洩れになっている重要な人物だけを集めた巻の編集

にすでに着手しているようである。間もなくコックシャットの不満も解消されるであろう。最後に総括してコックシャットは「このくらい役に立ち面白い作品が他にあろうか」と結んでいる。この結論に異を唱える者はいないであろう。

追　記

*DNB*の本体を4分の1に縮抄した*The Concise Dictionary of National Biography*が最初1903年にスミス，エルダー・アンド・カンパニー社から、1920年以降はオックスフォード大学出版局から出版されている（15×23cm、1514頁)。この7刷以降の版には誤りの箇所に★を付し、巻末に正誤表をつけている。この1900年までの分をPartIとし、1901～1970年までをPartII（752頁）としたコンサイス版も出版されている。このほかに、本体と1960年までの補巻を2巻にしたコンパクト版が天眼鏡つきで出版されている。

付 録 1

「国民的伝記」とは

シドニー・リー

1896年1月31日金曜日夕刻
王立科学研究所に於ける講演

1 人物を国民共通の思い出として記念する方法
2 伝記と歴史の関係
3 国民的伝記と個人的伝記
4 国民的伝記における人物の採録範囲
5 採録するにふさわしい際立った人物の割合
6 国民的伝記の先駆となった伝記

1 人物を国民共通の思い出として記念する方法

祖先の成した業績を誇りに思う気持は、言語能力と同様、あまねくすべての人類にみられる特徴であります。文明化した国民と同じく、未開の国民においてもこの誇りはしっかりと育まれております。

支那人は、野蛮と文明の狭間で救い難くも立ち往生しているかのように見える国民でありますが、支那においては、国民の宗教は祖先を、それもはるか遠い祖先にいたるまで敬うことが中心になっております。

幸いにして、より恵まれた西洋の国々では、祖先を礼拝することは宗教儀式のほんの一端を成しているにすぎません。しかし、宗教上の義務と考えられることはまったくないものの、傑出した人格の持主や偉業を成し遂げた人物たちの思い出に、程度の差はあれ、本能的に敬意を表わしたいと願う気持は西洋の国民も支那人とまったくかわりありません。

文明化した国の国民はそうした傑出した人物に対する敬意をいかにしたら最も効果的に、最も然るべく表わすことができるでありましょうか。これが、今宵の私のお話の眼目であります。

文明国では、たとえ傑出した人格と偉業によって同胞から評価されている人物を記念するものであっても、次の三つの条件を満たしていなければ、それは決して至当なものとも、効果あるものともなり得ません。その3条件とは、その記念するものが、恒久的であること、公共のものであること、そしてわかりやすいものでなければならないということであります。

「わかりやすい」というのは、すなわち、国民の中に記念したいという願望を生み出した当の人物の業績なり人格上の特徴が何であるか、子孫にはっきりとわかるような形をとらなければならないということです。実際、記念となるものは、来るべき世代に対して、明快に自らの存在理由を示すものでなければなりません。

ピラミッドや霊廟、彫像や円柱などは、それがいかに芸術的な興味をそそるものであっても、恒久性、公共性、明快性という3条件をすべて満足させるも

のではありません。石や真鍮の記念碑は人の名を２、３世紀間は留めておけるかもしれませんが、しかし、単に名前を留めておくだけではさして目的に叶うとはいえないでしょう。

墓碑銘の場合、そこに記されるのは単に名前だけではありませんが、それでも永久に残るものではありませんし、充分わかりやすいということもめったにありません。それに墓碑銘というのは常に本当のことが書かれているとは限りません。と申しますのも、ジョンソン博士（Dr. Johnson）[1] も言っておりますように、「碑文というのは、嘘は書かないという誓いのもとに書かれたものではない」からであります。ですが、きちんと真実が述べられていることこそ、まさに、人を記念する際のわかりやすさにほかなりません。名前がいくら哀歌調の美辞麗句で飾り立てられていても、ある人物の言行を書き留めようとする者はそれを鵜呑みにしてはなりません。

感謝の念の篤い人たちは、町や山やその他馴れ親しんでいる対象に偉大な人物たちの名前をつけて、その名前を日常語化してしまうことがよくあります。しかし、それでは、記念の効果はなくなってしまいます。言葉というものは使っているとその価値が目減りしていくもので、記念という目的で使われた言葉も、毎日それを使う人にとっては、なんの含蓄もなくなってしまうからです。その言葉から歴史上の人物の行為や人格が連想されることは次第になくなってしまうのです。

アメリカにピッツバーグ（Pittsburgh）という町がありますが、この名は、チャタム伯ウィリアム・ピット（William Pitt）[2] を讃えて名付けられたことを普段思い出す人はいないでしょう。ブルーム型馬車[3]のことを口にする人で、すぐれた大法官であり、大衆文化の先駆者であったブルーム卿のことを意識的に讃えている人はいないでしょう。

時間というアヘンに対抗する解毒薬は、すこぶる強力なものでなければなりません。経験が示す通りこの場合、効果のある処方箋はたったひとつしかありません。「記憶を忘却から救う最も確実な方法はそれを書き記しておくことである」とトマス・フラー（Thomas Fuller）[4] は言っております。

文学を愛好する方なら、哀歌形式の文学こそ、この場合の条件を一番満たす

ものであるとおっしゃるかもしれません。キーツ (Keats)[5] を讃えて書かれたシェリー (Shelley)[6] の「アドネース (Adonais)」、テニスン (Tennyson)[7] の「ウェリントン公爵の死によせる頌歌 (Ode on the Death of the Duke of Wellington)」は偉大な人物の偉大なモニュメントであり、それはいつまでも残り、広く人々に知られ、かつ、わかりやすいものであります。これらとは種類を異にする詩編ではありますが、ウルフ (Wolfe)[8] の「ジョン・ムーア卿の埋葬 (Burial of Sir John Moore)」は、他のいかなる回想録よりもジョン・ムーア卿の名を活き活きと人々の心の中に留めるものでありましょう。

しかしながら、偉大な詩人が偉大な人物を記念するのは、稀なる偶然にすぎません。ウルフの「ジョン・ムーア卿の埋葬」は例外的な作品なのです。「アドネース」のように、人物の思い出をいつまでも人の心に留める作品は五指で足りるほどしかありません。

ミルトン (Milton)[9] の「リシダス (Lycidas)」やテニスンの「イン・メモリアム (In Memoriam)[10]」は同じ範疇に入るものではありません。年代を追って綴られているその生涯や友情はプライベートなものであって、大衆が注目しなければならないものかどうか疑問だからです。不朽の芸術作品ではありますが、国民が共にこぞって記憶に留めるという観点から言えば条件にかなうものではありません。

このように条件にかなう詩文の回想録が数えるほどしかないのでありますから、したがって、国民的な記念の方法を模索する者としては、詩による方法は考慮の埒外におかざるを得ません。傑出した国民たちに、それぞれにふさわしい効果的なモニュメントが用意されなければならないとしたら、国民は、散文体ではありますが、より近づきやすく、応用の利く、伝記という方法に目を向けざるを得ません。

伝記は本質的に、大衆に公開される、わかりやすいものであり、もちろん恒久性という点でも決して遜色のあるものではありません。ギリシアやローマの英雄たちの墓所に立っていた大理石の彫像は、大部分が崩れ落ちてしまっています。しかし、『プルタルコスの英雄伝 (*Plutarch's Lives*)』は今に残っております。タキトゥス (Tacitus)[11] の『アグリコラ伝 (*Life of Agricola*)』はアグリ

コラの霊廟よりも長くこの世に残っております。「時間、それは古きものを廃れさせ、ありとあらゆるものを塵芥と化す技をもつ。しかし、これらのささやかなるモニュメントだけは残してくれた[12]」のであります。

しかしながら、伝記によって、国民の記念本能を満足させようというのなら、そこには特別のまとまった方針がなければなりません。通常の伝記には、国民全体のためという考慮は一切払われていません。気まぐれに書かれたものです。偶然や気まぐれや内輪のひいきから、一人の傑出した人物と何千というもっと凡庸な人物が、伝記を書いてもらえるという栄誉に浴している一方、同じように、あるいはそれ以上に卓越した大勢の人物たちの伝記は書かれないままになっています。

もし伝記というものが、人物の記憶を留めたいという全国民の願望に応えるためのものであるなら、国民の記念本能を掻き立ててきたすべての人物を一人も漏らさないように、その範囲は拡大され、明確に定義される必要があります。その一方、そうして集められた伝記は、あまりに膨大すぎて、われわれを圧倒してしまうようなものにならないよう配慮せねばなりません。こうした目的と方針によって編まれた伝記集こそ、国民の伝記と呼ばれるにふさわしいものでありましょう。そして、他の形の国民的記念物は、国民の伝記という見事に計画された宝庫と比較対照してみる時、おそらく色あせて「実体の無い見せ物[13]」となってしまうものと思うのであります。

2 伝記と歴史の関係

カーライル（Carlyle[14]）やその弟子である故フルード（Froude[15]）氏の学問的伝統の中で育った人たちは、国民の伝記を書くという伝記作者の役割は、現実には国民の歴史を書く歴史家によって充分果たされているという誤った考えを抱きがちであります。フルード氏は、自己の歴史家としての生涯の目標は、卓越した人物を発見して、いきいきと描き出し、心から讃えることだと申しております。「人類の歴史とは偉大な人物たちの歴史である。そうした人物を見つけ出し、ほこりをぬぐって、ふさわしい台座の上に据えることが歴史家の真の役目

である」という師であるカーライルの言葉をフルード氏は実行に移そうと努めたとのことであります。

かくも高名な権威ある方々と意見を異にするというのは憚られるのでありますが、私は次のように申し上げたい。「偉大な人物を見つけ出し、ほこりをぬぐい、ふさわしい台座の上に据えること」は歴史家ではなく、国民的伝記の作者が担うべき役目なのだ、と。そのようなことをしようとする歴史家は他人の領分を侵すものであると申し上げたい。

歴史と伝記の違いの多くは表面的なところにあるので、混同されても無理からぬことかもしれません。歴史は機械学、すなわち、物体全体を動かす力を判断する科学に譬えてみるとよいかもしれません。一方、伝記は化学に、すなわち、個々の物質を分析し、その構造からその働きを説明する科学に譬えればよいでしょう。

歴史家は民衆のまとまった動きを叙述しなければなりません。したがって、出来事や制度を通して大きな動きをまとめます。ですから、近年反対の主張もありますが、政治的出来事や制度がやはり主として歴史家の最大の関心事であることには変わりありません。

民衆全体が、民衆の中に等しく存在しているひとつの勢いに支配されて動いているように見えることがよくあります。動きの源が全体の構成員である個人の独立した行動にまで明白にさかのぼることができないからです。今世紀初頭の選挙法改正[16]での大きな動きは、まさにそうした特徴をもっておりました。こうした場合には、政治経済学者や統計学者同様歴史家も、伝記作者としての才能は発揮する機会がありません。

民衆を動かしているものを、民衆の中の１、２の人物を取り巻く状況の中にはっきりと見て取ることができる場合もあります。自由貿易運動[17]はまさにこうした特徴をもった動きで、コブデン(Cobden)[18]とかジョン・ブライト(John Bright)[19]という名前がすぐに浮かんできます。この場合、歴史家は民衆の構成員である個人の行動力を詳細に評価しないわけにいきません。そして、さしあたり、歴史家の役割は伝記作者の領域に近づきます。

しかし、それは単に近づくだけにすぎません。歴史家は、政治的・社会的出

来事や制度の改革に共に立ちあがった大衆の運動に影響を及ぼした人物たちのそうした側面を考慮に入れさえすればいいのです。社会の発展、民衆の全体的動向をなんら明るみに出さないような細部の事柄、伝記上の細部の事柄は、本来歴史家の視野の外にあるべきものです。

伝記作者が探索するのは、まったく異なった領域です。仕事の上では、伝記作者は社会の発展にはほとんど、あるいはまったく関心をもっていません。伝記作者は、人類という大きなかたまりの中から、明らかに傑出した人物という単位を選り分け、それを細部にわたって詳しく調べます。ですから、伝記作者の書く観察記録は、そうした傑出した人物たちの誕生から死にいたるまでの偉業と人間的特徴を映し出す鏡となります。歴史家は人類全体を双眼鏡で見、伝記作者は個人を虫めがねで見るのです。

それだけでなく別の相違点もあります。歴史家はある領域の事柄を隅から隅までことごとくつぶさに視野の中に収めることはめったにありませんが、伝記作者はこれ以上できないくらい徹底して材料を集めます。歴史家の場合、伝記作者なら熱烈な関心を寄せる人物像をぼんやりと把握しているだけでも、あるいは、まるっきり把握できなくとも、その目的が果たせることがよくあります。

レッキー（Lecky）[20]氏は18世紀に関する歴史家として目覚ましい業績をあげましたが、伝記作者の目からすれば18世紀の最も抜きん出た人物であるジョンソン博士のことにほとんど言及しておりません。ベンヴェヌート・チェリーニ（Benvenuto Cellini）[21]やチャーベリのハーバート（Herbert of Cherbury）[22]卿、日記作者のサミュエル・ピープス（Samuel Pepys）[23]は歴史家にはまったく黙殺されていますが、そのことによって歴史家が非難を受けることは一切ありません。しかし、国民の伝記作者がそうした人物たちを無視するとしたら、第一の義務を怠っていることになります。

とはいえ、歴史家と伝記作者は異なったゴールを目指しながらも、その過程でお互いに真に役に立ち合うことができます。聡明な伝記作者ならしばしば歴史家に援助を求めるにちがいありません。歴史的な環境――同時代の民衆の大きなまとまった動向――についての透徹した知識は、個人のあらゆる活動を然るべきパースペクティブの中で捉えようとするなら、伝記作者にとってはなく

てはならないものです。君主や政治家を彼らが生きている政治の世界から切り離すことはできません。政治上の環境は政治家の伝記の舞台背景となります。

しかし、舞台背景をあくまで役者に従属させるのが伝記作者の腕前なのです。作品の本当のおもしろさから観客の目をそらせてしまうような装飾的な大道具や舞台装置で舞台の上を一杯にしてはなりません。

スコットランド女王メアリー（Mary Queen of Scots）[20]の生涯について書こうとする場合、女王の生涯に豊かにちりばめられている人間としてのおもしろさや私人としての胸おどらせるような経験を際立たせないで、スコットランドの長老派教会の信者とローマ・カトリックの信者との間の複雑な関係や、エリザベス女王（Queen Elizabeth）の不正な外交政策を、あれもこれもと付加的に並び立てるならば、伝記としての目的を達成することはできないでしょう。そうした事柄は歴史を書く際の材料なのです。それらの一部分は伝記という大建築物の大枠の柱として必要ですが、その場合でも、大部分は目に見えないようにせねばなりません。

伝記作者が歴史家に負っている以上に多くのものを歴史家は伝記作者に負っています。伝記作者は、歴史家のたどる小道から遠くはずれた荒野の中に自らの採石場を求めます。伝記作者は荒涼とした沼地を進んでいかなければなりませんが、幸福なことに歴史家は足を踏み入れる必要がありません。教会区戸籍簿、学問的な古文書、家族の手紙、手書きのメモ、州の来歴、地誌に関する論文、家系についての論文、系図など、主だったものを挙げれば、こうしたものと伝記作者は日がな一日取り組まなければならないのです。

しかしながら、こうした材料は歴史家が飛び付きたくなるような代物ではないにしろ、時として重要な歴史的事実を内に隠していることもあります。歴史の動きの曖昧な部分に歓迎すべき光を投げかけることもあるかもしれません。歴史家は18世紀の政党政治の推移を伝記作者よりは明確なアウトラインで、より鮮明に描き出しますが、その前に歴史家は伝記作者から、政治家を同志として結びつけた血族関係や幼い頃の友情について、あるいは、敵対関係にはしらせることになった身内の対抗意識について、知識を得ているのです。

英国におけるローマ・カトリック運動は、王朝が変わろうとも、また陰謀や

暴動を生じようとも衰えることなく持続しています。この運動に身を捧げた人物たち――トマス・モア卿（Thomas More）[25]からガンパウダー事件[26]の陰謀者たち、そして、近年の数多くの無名の聖職者やイエズス会士たちまで――彼らは密かにではあったとしても、確実に世代から世代へと連綿と信仰の燈を受け継いできました。こういう人物たちのことを伝記作者の拡大鏡を通して見ないならば歴史家はカトリック運動の持続的流れについて極めて不充分にしか理解できません。

プライドが高すぎるか、怠惰なために伝記上の記録から助けを得ようとしない歴史家は、言うまでもないことながら、そうした記録を無視したために危険を冒すはめに陥ります。マコーレー（Macaulay）[27]は、その明晰な文体同様、勤勉な調査探究をした点でも際立った人でしたが、しばしば伝記に助力を求め、すばらしい成果を挙げました。それに対してフルード氏は、見事な文体をもっていながら――あらゆる分野の英語の散文の中でも最も見事な文体のひとつでありながら――その研究方法ははるかに徹底性を欠いたものでありました。

フルード氏は歴史家として仕事をする上で、伝記の存在を文献の独立した一部門としてほとんど認めていなかったように思われます。純粋な伝記的記録に助けを求めることを軽蔑していたことは確かです。氏の読者こそいい迷惑です。問題点の多い国家資料中の、しかもいまだに傍証されていない文章によって広く支持されてはいるものの、初歩的な伝記上の事実によって誤りであることが証明されている人間的特徴や動機、そうしたものが重要な歴史上の人物のものであると指摘したことが、氏には一再ならずあるのです。そして、歴史上の人物を誤って表現することによって、歴史家は歴史の動きを誤って表現する危険があります。

イングランドのメアリー女王はフルード氏の著書では、友人や家臣に疎んじられ、国家の歴史の進路を無理やりねじまげることに冷酷なまでに精力を注いだ、愛国心や暖い感情のない、魔女のような頑な人物として登場します。もし、フルード氏が、ストリックランド（Strickland）[28]女史の『イングランド女王史（*Queens of England*）』の中の「メアリー女王伝（Life of Queen Mary）」のような誰もが手に取ることができる本を読んでいたら、偏見を修正し、メアリー女王の

経歴と政策についてもっと説得力のある解釈をしていたかもしれません。

ストリックランド女史の作品は伝記芸術という寺院の極めてつつましやかな壁龕のひとつを埋めているに過ぎませんが、しかし、ストリックランド女史が集めた伝記上のちょっとした細部の事実を歴史家が見逃すとしたら賢明とはいえません。メアリー女王の場合、この細部の事実によって、女王が当然のことながら自分が教えを受けた信仰に忠実であったこと、そして、若い頃、迫害という代償を払ってまでも信仰を守りぬいたこと、また、カトリックの信仰を復活させようと努力したことによって国民の大多数から王位に就くことを支持されていたことが、疑問の余地なくはっきりとわかります。この女王に愛国の情が無かったなどというのは事実ではありません。カレーを失ったことについて女王が今わの際に語った言葉が——本当に女王の口から出た言葉だと立証されていますが——女王の愛国の情を充分に証明しています。フルード氏はこの言葉を取り挙げていません。

事を計画したことも、それを実行し損ねたことも、女王の人間としての宿罪がまねいたこととしか言いようのないことなのです。女王の計画は、ひとつを除けば女王の個人的な献身的情熱に発した数多くの大義から生まれたものだったのです。確かに、その計画が失敗に終わったのは主に女王の個人的な行動によるものでしたが、しかし、惨事を引き起こすことになった女王側の失策は、女性なるが故のものであって、決して容赦し難いものではありません。つまり、女王は夫の選択を間違えたのです。大衆に不人気な外国人のいとこと結婚することによって、大多数の消極的なカトリック教徒の国民が女王に対して抱いていた敬愛の念を弱めてしまい、一方、少数派の積極的なプロテスタントの国民が示した女王の宗教政策に対する抵抗に、愛国主義的色彩を帯びさせる好機を与えてしまったのです。そして、愛国の情というのは、ひとたび火がつくと、どうにも手のほどこしようがなくなるのが常なのです。

フルード氏が、議会の公文書や法令書、同時代の年代記、そして外国の大使たちの公文書のようなオーソドックスな権威ある歴史文献の中に発見した事柄に、伝記というわき道を時々渉猟して得た事柄を重ね合わすということをしていれば、これ以外にも多くの誤った印象を読者に与えずに済んでいたかもしれ

ません。

しかしながら、良心的な英国の歴史家の立場に立ってみるならば次のように言えるかもしれません。すなわち、繰り返して参照するに値いする伝記が極めて数が少ないではないか、それに、歴史という包括的な仕事のほかにオリジナルな伝記的調査もやらせようというのは酷ではないか、と。なるほど、ごもっともな意見だとは私も思います。しかしながら、英国の歴史家諸氏に御忠告申し上げたい、そういう弁解は間もなく通用しなくなりますぞ、と。程なく完璧な国民伝記辞典が思いのままに使えるようになるのですから。そして、フルード氏の後継者の中には、労力を省いてくれる道具としての辞典のこのすばらしさに狂喜して、クーパー（Cowper）[29]がカシの古木に向かって訴えた言葉そのままに、国民伝記辞典に次のように呼びかける人があらわれるものと私は信じております。

「汝によりてわれは改めん、
誤れること繁き歴史という時計を。
事実や出来事の日時をより正確に定め
埋もれたる事実を発掘し、
誤れる言説を正さん。」

3 国民的伝記と個人的伝記

国民的伝記は、学問的著述の一分野ですので、したがって、すべての学問的著述がそうであるように、その言説は細心の注意を払って正確さと明快さを期さなければなりませんし、また参考資料は慎重に証明されているものを用いねばなりません。しかし、ここでは、国民的伝記も他の分野の学問的著述と共通する特徴をもっているということを述べるだけに留めておき、むしろそれよりも他の分野の学問的著述との違い、とりわけ、より馴染み深い文芸のひとつとなっている個人的伝記と一線を画している特徴について考えてみるほうがより有益だと思われます。個人的伝記のほうも当然学問的著述の領域に含まれるべきです。しばしばその領域からはみ出てしまっている作品を見かけることがあ

りますが。

国民的伝記と申しますのは、すでにみてきましたように、過去から現在にいたるまで国民の記念本能を掻き立てた人物たち一人ひとりを、ひとつの百科事典という枠組の中で記念しようとするものであります。個人的伝記のほうは、一人の人物の生涯を描くことに全力が傾けられており、それだけでもう著述の十二分な対象と看做されています。国民的伝記と個人的伝記という2種類のタイプの伝記の最も大きな違いというのは、したがって、規模の問題ということになります。

プリーストリー(Priestley)[30]は科学上の説明をする際には、「最小限のスペースの中にできる限り多くの知識を盛り込む」ことを目標にしていましたが、これこそ国民的伝記に一貫していなければならない支配的方法論であります。人物を記念するという然るべき役割をきちんと果たせる限りにおいて、でき得る限り簡潔にするということが、国民的伝記を著わす伝記作者の守るべき第一の法則であります。この必要性については言わずもがなでありましょう。

個人的伝記の作者としては最もすぐれているボズウェル(Boswell)[31]とロッカート(Lockhart)[32]が、それぞれジョンソン博士とウォルター・スコット(Walter Scott)[33]卿の個人的伝記を書いたようなたっぷりとしたスペースで国民的伝記の各部を構成したならば、5020巻でも納まりがつかないでしょう。もっとも、支那人は百科事典が5020巻に及んでも少しも不都合は感じないでしょうが。私はこうした物理的な事柄に考慮を払わずにはいられないのです。この点が無視されるといかなる国民的伝記も使用に耐えないものになってしまうからです。また、こうしたことに考慮が払われることによって、表現のスタイルや情報の配列が決まってくるのであり、これこそ国民的伝記が個人的伝記との間に明確に一線を画する違いなのです。

ある人物を際立たせ、記念するにふさわしいと納得させる事実や人格について語る時、国民的伝記の作者は、最大限の正確さと明快さをもって、しかし、最小限の言葉をもって語らなければなりません。レトリック、饒舌、熱い思い入れ、感情、くだくだしい感傷などの入り込む余地はないのです。日付は、個人的伝記の場合よりもより大きく、より短い間隔で登場しなければなりません。

小さな業績や就いた地位、作家の場合ならその著作物、画家や彫刻家ならその作品は、年代順に、あるいはカタログ式に整理して淡々と記述されなければなりません。

個人的伝記と国民的伝記の記述の仕方の違いは絵と地図あるいは設計図との違いのようなものです。個人的伝記の作者は、大きな建物をキャンヴァスの上に描く画家に譬えられるでしょう。一方、国民的伝記の作者は、建物の立面図を描く設計師に似ています。設計師は画家よりも芸術味の乏しい表わし方で成果を表現します。しかし、建築設計に芸術味がまったく無くていいわけではありません。同様に、国民的伝記も適切に書かれた時には文芸作品の香りをなにがしか備えているものです。手慣れた書き手なら読者のために、人物の特徴を端的に表わす好もしい形容語句や様々な言い回しを用いて、単なる図表のような味気無い叙述に陥らないように読みやすく配慮してくれます。そして、国民的伝記の作者が書き上げた回想録が申し分ない出来のものであるなら、読者は少なくとも、およそ芸術というものから得られるいかなる満足感にも匹敵する満足感を得ることができます——すなわち、人物を記念したいという本能が渇望する情報をことごとく与えられたという満足感を得られるのです。

そうした満足感を生み出すのに必要な知識以上の知識まで与えたいという誘惑は抑えなければなりません。国民的伝記の作者は、個人的伝記にこそふさわしい詳細な事柄や逸話の多くを、勇気を奮い起こして割愛せねばなりません。国民的伝記の作者は、人物の生涯を際立たせている側面に叙述を集中する必要があります。

某月某日に生まれたとか、どこそこで教育を受けたとか、結婚し、子供をもうけ、そして死んだといういくつかの通常のエピソードは当然記録される必要があります。そうしたエピソードは叙述の完全性と一貫性に不可欠のものであり、そうした情報の正確さを期する努力は決して惜しんではなりません。しかし、あくまでそれらはその人物の生涯を際立たせているエピソードに従属させねばなりません。人生の大多数の月並みな事柄については、当然ながら、筆を控えるべきです。たとえば、ある人物が家庭人としての月並みな美徳をもっていた——近所の多くの人達と同じように良心的で敬虔な人であった——という

ような事はことさら述べるには及ばない事柄です。2本の足と2本の手をもっていたということと同じように余計な事です。

ある人物の道徳上の、あるいは精神上の経験に当然言及しなければならない場合もありますが、それは、異常な精神的傾向や、通常の道徳規範からの甚しい逸脱があった少数の生涯を叙述する場合に限られます。伝記作者はある人物のひととなりや功績を周囲の人間のひととなりや功績から効果的に際立たせている事実をすべて提示する義務があります。そして、信仰心や家庭人としての美徳を人並に育んできたというようなことは、この点では材料にはなりませんが、一方、それが人並ではない場合には慎重に検討してみる必要があります。

信仰上の正統的な教義から逸脱したという場合には、取り扱い上特別な難しさというのはありませんが、正常な道徳観から逸脱したような行為を取り扱う場合には、国民的伝記の作者は充分に慎重を期す必要があります。与えられているスペースが小さいのですから、様々なエピソードの間で全体からみて適切な釣り合いがとれているように配慮せねばなりません。したがって、道徳的堕落そのものよりも、それがその人の業績に及ぼした影響の方にスペースを割くべきです。社会のしきたりとなっている道徳を少しばかり犯したという程度のことは、国民的伝記の場合には問題にならなくなってしまう場合が多く、少しも注目に値しないことが少なくないのです。

とはいえ、公の、あるいは私的な義務を怠ったことが悪名高かったり、常習的であった場合には、伝記作者の義務としてそれを記述しなければならないことは言うまでもないことであります。それは率直に記述しなければなりません。バイロン（Byron）[34]、ネルソン（Nelson）[35]、パーネル（Parnell）[36]の不倫騒動、コールリッジ（Coleridge）[37]が阿片に、ポースン（Porson）[38]が飲酒に溺れたこと、偉大な探検家たちの偉業を時として汚すことになった犯罪などは当然記述されるべきものであるばかりでなく、国民的伝記には欠かせないトピックでもあります。これらについて筆を抑える伝記作者は伝記作者としての第一の本分を怠っていることになるからです。もちろん、こうした題材を取り扱う際には、記述することで傷付くかもしれない友人や身内の人間に出来る限り苦痛を与えないように配慮しなければなりません。証拠は疑問の余地のないものを挙げ、公

正な判断をした上で簡潔に要約して記述しなければなりません。ある人物の名声を傷付けてしまいかねない箇所のみならず、叙述のあらゆる部分にわたって、国民的伝記の作者は公正な判断をする気質を培わねばなりません。個人的伝記の作者よりもはるかにたゆまずこの気質を培う必要があります。と申しますのも、国民的伝記というのは相当部分が、――科学の分野ではよく知られた用語を使えば――比較研究になるからです。国民的伝記は単に名声を記録するものではありません。その名声に相対的な正当性を与えなければならないのです。国民共通の思い出として記念しようとする対象の間には、然るべき軽重の度合や優先順、位置付けなどがあって、それらは守られなければなりません。個々の伝記の長さは、描かれているひととなりや業績の本質的価値と面白さにでき得る限り比例しなければなりません。また、自分の時代に近いために公正な視点がゆがめられることがないよう極力努める必要があります。同じように際立った行為でも過去の時代よりも自分の時代の行為のほうをより高く評価したり、より興味深いと判断してしまうのが普通だからです。郷土の恩人にお国自慢からでた讃辞をことごとく奉るようなことをしてはなりません。

その他、構想を立てるどの段階においても、判断のバランスを正しく保つことがまずなによりも大切です。ライヴァルであった政治家、神学者、芸術家、発明家――同じ名声を求めて同じ土俵で奮闘することにその生涯を費やした人たち――こうした各々のライヴァルたちにも、国民的伝記の作者は、等しい考慮を払います。チャールズ（Charles）１世[39]をないがしろにしてクロムウェル（Cromwell）[40]を讃えることはできないし、クロムウェルを黙殺してチャールズ１世を讃えることはできません。ヘンリー（Henry）８世[41]に関する叙述は、いかなる細部においても、ウルジー（Wolsey）枢機卿[42]についての叙述と矛盾してはなりません。とくに両者がともに役割を演じた場面においては。

論争によって苦い評価を受けている生涯でも、内包している興味深い点に関してはすべて然るべき考慮が払われなければなりません。論争の対象になっている人物の各々に、個別に引き続いて同様の敬意に満ちた扱いをするのが国民的伝記の作者の義務であると心得るべきです。有名な科学上の発見あるいは機械の発明も、同時に２人乃至は３人の人物がいなければ成就しなかったように

思われます――それぞれの人間がまったく独自に取り組んできたと主張していますが。国民的伝記の作者はこうした人物の各々の業績を論理的一貫性をもって扱わねばならず、したがって、そうした人物の間の問題点を公正に判定するために最善を尽くさなければなりません。

でありますから、国民的伝記が個人的伝記とその方法論において大きく異なっている点は、叙述がすこぶる簡潔であること、生涯の日常的な側面、あるいは些事に当たる側面は省略すること、そして、比較考量という原則に基づいて記述がなされている点であります。なるほど、芸術的価値という点では国民的伝記の最良の例でさえ個人的伝記のすぐれた作品には及ばないといってもよいでしょう。しかし、それでも、国民的伝記の方法論のいくつかは個人的伝記が採用しても決して悪くはないものだと私は思います。

個人的伝記はわが国ではほとんど毎日のように、2巻あるいは3巻もの大冊で出版されています。しかし、そうした伝記も、芸術的な味わいという点で必ずしもいつも異彩を放っているわけではありません。個人的伝記の作者たちが、伝記を書く技術を磨くために練習としてエッセイを書いてみるなどということはまずありません。概していえば、彼らが筆を執ったのは、物を書く能力という点で伝記作者としての適性があったからではなく、故人となった英雄的人物のいまだ存命中の親戚の友人であるからとか、あるいはその身内であるからという理由のためなのです。ある人物と人生を共に生きた人だけが、その人物についての全生涯を語る資格があるという説には一理あるかもしれませんが、すぐれた人物と共に生きた人で、その人物について何を一番語るべきかをわきまえている人は極めて稀であることも同じように確かなことであります。そういう人たちの目には自分たちが英雄視する人物がペンを執って書いた紙きれはことごとく同じように神聖なものに見え、みな等しく称讃に値するものに見えてしまうことがよくあるものです。

国民的伝記の作者に課せられているスパルタ的訓練を個人的伝記の作者は免かれていることが、一般的にいって、読者たちのプラスになることでしょうか。散漫な書きっぷり、取るに足らない細部に対する執拗なこだわり、党派に偏る傾向、こうしたことに対して彼らにはなんの歯止めもないのです。こうしたこ

とから普通どのような結果が生じるでしょうか。脈絡の無い情報や白けた文章の塊が読者の眼前につきつけられ、英雄的人物の真に傑出した業績や際立った人格は、風変わりな弁舌、月並みなゴシップ、あるいは、噴飯ものの誉め言葉という塵と埃の下に埋もれてしまうことでしょう。

4 国民的伝記における人物の採録範囲

国民の記念本能を掻き立てる人物には色々あり、その程度もまた様々であります。国民的伝記の作者は、国民生活のどの分野であれ、この本能をいかなる程度であっても掻き立てた人物はことごとく記念することを目標にしています。したがって、同胞から広く敬意を払われているならば、政治家、聖職者、画家、作家、発明家、役者、医者、科学者、旅行家、音楽家、軍人、航海士はすべて問題なく採録の対象となります。しかしながら、対象を求めてパルナッソス[43]の高みから下っていくにつれて、探し求める領域に明確な境界線を引く必要がでてきます。言い換えれば、国民的伝記に採録される根本的資格は何かということです。いかなる原則に基づいて、線引きがなされるべきでしょうか。

万人を納得させられるような原則を明確に述べることは容易ではありません。私はアリストテレスの定義に助けを求めることにいたします。すなわち、「崇高で、完結した、そしてある程度の大きさをもった[44]」行為を少なくとも１回も示さなかったような人物の生涯は、国民的伝記に採録されるべきではないということです。この定義の有効性を知ることは、個人的伝記の作者にとっても無駄ではないと信じます。国民的伝記作者の観点からいえば、どんな種類のものであれ、行為の大きさというのは、その行為が達成された回数、あるいは達成し得る回数によって決まります。シェイクスピアが37篇の芝居を創作したというのは第一級の大きさの行為です。これだけの創作を成し得た人物は皆無だからです。ワーテルローでのウェリントンの勝利はそれに比べると大きさの点では一段劣る行為です。なぜなら、同じように優秀な行動は他の軍人たちによっても成し遂げられてきたし、必要があれば必ず再び成し遂げられるからであります。功績の大きさを下へ下っていくにつれて、何千人もの人によって成し遂げ

られた、あるいは成し遂げられ得るレヴェルの行為に次第に近づいていきます。そして、そうした類いの行為というのは、当然ながら国民的伝記の作者が注目すべき大きさの行為ではまったくありません。

ある人物が献身的な夫であり父親であるとか、有能な教師であるとか、模範的な教区司祭であるというような事実そのものは、国民的伝記に堂々と採用されるべき価値をもつものではありません。いかにその行為が称讃に値しようとも、それは何千という同様の人物たちの行為と実際上見分けがつかないものだからです。

さらにまた、公の高位高官も、極めて稀れな、すこぶる高貴な高位高官は別ですが、高位高官そのものは国民が共に記念する対象となる資格を与えるものではありません。もっとも、そうした高位高官に就かなければ平凡な人物であったかもしれない人が、高位高官によって際立った人物となる好機を与えられる場合もあるかもしれませんが。上院議員や下院議員、市長、学部長、教授、そして教会委員などになってその職責を果たすことは、あまりに大勢の人間によってやり遂げられてきた、あるいはこれからもやり遂げられる行為であり経験であるので、それ自体はこれといった大きさのある行為とはいえません。

しかしながら、極めて少数の人間しか就くことができず、継承するという行為自体がひとつの稀れなる成就であり、ある程度の大きさを備えた行為であるような地位もあります。国王や女王、首相、大主教、その他の高位高官は大部分の人間には就くことのできない地位であり、みな国民的伝記の作者の注目を引くものでありましょう。たとえ、そうした地位に就くこと以外に、その人物の人格や才能をもってすれば普通なせるであろうような行為――「崇高で、完結した、そしてある程度の大きさ」のある行為――を一切なさなくとも。

しかし、国民的伝記は慎重に線引きをすると同時に寛大に受け入れるという原則を採用しなければ、その目的を果たすことはできません。国民的伝記はあらゆる層の国民の記念本能を満足させる意図をもつものでなければなりません。

大きな宗教的あるいは政治的な危機はどれも、ある層の国民の記念本能をとりわけ掻き立てる、大きさは小さいながらも際立った偉業を大勢の人の中に生み出すものです。ヘンリー8世の至上権を認めることを拒んで絞首台に向かっ

たほとんどの人々、ローマ法王の権威を認めることを拒んで火刑場に向かった大多数の人々、エリザベス女王の統治下で死刑に処せられたローマ・カトリックの聖職者たち、長期議会の多くの議員たち、幾度かの内乱の際の将校たち、チャールズ2世に宣誓することを拒んで1662年に追放された非国教派の大臣たち、初期のクウェーカー教徒たち、中心的な役割を果たした忠誠拒誓者たち、こうした人たちはみな、調査の行き届いた短い伝記として記念するに値する人たちであります。

同時に国民的伝記は、どんな突発的なケースにも臨機応変に記念本能を満足させる用意がなければなりません。長い間忘れられていた名声が突如復活するとか、偉業が成し遂げられた後、長い歳月を経て初めて名声が確立するような場合があるからです。そうした偶然のケースに遭遇しても、できる限り広く採録するという方針で編集されていれば国民的伝記はその偉業の記録をいつでも提供できるわけです。

さらに言うと、記念本能というのは時々常軌を逸脱してしまうことがあるのですが、国民的伝記の惜しみなく採録するという方針は国民に時として、この逸脱を矯正する薬効をもたらすことができるのです。同じ成果を目指して大勢の先人たちが積み重ねてきた研究を、ある人物が、わずかではあるが重要な進展をさせたことによって、機械上の発明や歴史的な傑作を完成させ、広く世間に知られることがあります。そうした業績は、完成には至らなかったものの、連綿として続けられてきた先行する大胆な試みが踏み石となって初めて成し遂げられたものです。国民は最終的完成者にのみあらゆる名誉を帰せたがりますが、その名誉は完成者と先人たちの間で、業績に応じて配分されるのが正しいはずです。国民的伝記は、大巻であるので、そうした不公正を矯正できるほとんど唯一の機関であるといえます。

国民的伝記がもつこの効用は科学の分野でとりわけ顕著にみることができます。17世紀に火力エンジンや水力エンジンに取り組んでいた実験家たちは幼稚なものではありましたが、最初に蒸気力を実地に示してみせた人たちです。チャールズ・モリソン（Charles Morrison）は1753年に電信装置を考案していました。ジョン・ケイ（John Kay）は、織機に関する最も重要な改良となった、

飛杼を発明した人です。こういう人たちは、きちんとした国家においては、国民の恩人として然るべき位置がきちんと与えられなければなりません。国民的伝記はこれを確実に行うのです。

5 採録するにふさわしい際立った人物の割合

しかしながら、適正なる原則に基づいて、国民的伝記の作者がいかに広範な網を張ろうとも、採録されるのは全国民の中のほんの一握りの人であり、網からもれてしまう人のほうが大多数であります。ひとつの文明国家において、全成人の数と、その中で、国民の記念本能を掻きたて、国民的伝記の作者の注目を引くような人物の数の割合を、正確に統計学によって決定しようとしても無理であります。しかし、国民的伝記の作者として私が個人的な経験から得たデータから、この点に関して大雑把な数字を２、３挙げることはできます。その数字は、他の目的には役に立たないかもしれませんが、一方では国民的伝記の作者が完成させなければならない仕事の量を示し、他方では国民的伝記作者の視野に入ってくる人物の確率を示してくれるように思うのであります。

私の計算によれば紀元1000年から今世紀の終わりまでに、この国に生まれ、死んだ人で国民的伝記の作者の注目を引きつけるような際立った人物は３万人ほどいます。この国で成人に達した全人数からいうと、ということはつまり、24歳前に死んだ人はすべて省くということですが、5000人に１人がこの900年間にこの際立ったレヴェルに到達していることになります。この数字には、この国の住人の半数が病気で24歳になる前に死んでおり、したがって、際立った人物として頭角を現わす間もなかったという事実が考慮に入れられております。誕生した全人数を計算に入れると、赤ん坊が際立った人物になれる確率は10000人に１人ということになります。この割合は、世紀が進むにつれて少しずつ高くなっています。17世紀の終わりまでには成人が際立った人物になる割合は6250人に１人になっていたように思われます。前世紀にはこの確率はかすかにではありますが上りました――すなわち、6000人に１人です。今世紀はアメリカを除く植民地で英語を話す住人を含むことになりますが、割合は目に見えて上昇

しています。すなわち、4000人に1人です。[45]

中世において比較的この確率が高いのは、打ち続く戦争や教会の占める特別な地位、数多くの聖職などによって、頭角を現わす機会が多かったためだと思われます。大勢の教会関係の役職者たち、彼らは絶えず一般大衆の中から補充されたのですが、彼らには単に教会関係の仕事においてのみならず、政治や法律や、文学など、もっと将来性豊かな分野においても目立った働きをする機会がひらかれていたのです。中世では、そうした分野の仕事は、専ら、教会関係者たちによってなされていたからです。

知的活動や、文学上、科学上の成果が明らかに増大しかつ広まったことを考えると、18世紀の確率の上昇はむしろ驚くほど少ないといっていいでしょう。その理由は、ひとつには16、17世紀には我国の歴史上非常に大きな危機が幾度かあり、人が際立った頭角を現わす機会が例外的に多かったのですが、18世紀にはそれが無かったこと、また一方、18世紀後半の工場システムの導入は、常にそうであるように、社会の大部分の領域において独創的な発想や行動の出現を助長しなかったことがその理由だと思われます。

今世紀になって際立った人物の割合が上昇したことについては、無論、同時代の人間の業績の重要性を誇張したくなる必然的な傾向があることを数字上勘定に入れておく必要があるとは思いますが、まったく客観的な根拠が無いわけでもありません。知的職業の多様化――たとえば工学とそこから枝分かれした様々な学問を考えてみればよいでしょう――そして、科学や技術が専門化したことによって、少なくともより小さな規模の行為が際立つ機会が近年著しく増大してきたのです。教育機関の改善もまた、国民の知的能力を増大させ、最終的には際立った業績を生み出す原動力になったでありましょう。

統計を調べているうちに私は次のことに気付きました。すなわち、現在ロンドン州には国民的伝記に採録されるにふさわしい成人が600人おり、そのうち約20人は女性だという事実です。女性の力というのは、程度の差はあれ思いもよらぬ際立った業績を挙げる傾向があるようですが、この最新の計算ではその最近活発になってきた女性の力のことがまだ不充分にしか考慮されていないかもしれません。しかしながら、わざわざ統計をもち出さなくても、女性が際立っ

た頭角を現わす機会は過去においては無限に小さく、現在においても男性に比較するとはなはだしく小さい――およそ1対30くらい――ということは言うまでもありません。したがって、国民的伝記の作者の注目を引くような女性が今後もずっと少ないのではないかと私は懸念する次第であります。

6 国民的伝記の先駆となった伝記

しめくくりとして、我国において、今日まで国民的伝記を目差してなされてきた努力の跡を手短かに辿ってみたいと思います。そうすることによって、こうした企画につきまとう様々な困難と危険が明らかになると思うのです。その困難と危険の大部分は偏見や冗慢さをうまく抑制することができなかったことに帰因するものです。

歴史的に言えば、国民的伝記というのは特殊な領域の人物たちの伝記を集めたものか、それらをさらに大きく集大成したものです。次第に対象となる人物の範疇が拡張され、ついには一国のあらゆる領域の人物が対象にされるようになったわけです。

ひとつの特殊な領域の人物たちの伝記、これが国民的伝記の先祖になるわけですが、これは中世にはお馴染みのものでした。中世文学には、聖者、法王、国王、司教、修道院長の伝記集がたくさん含まれています。当時は、著述の筆を執るのは、専ら聖職者たちでした。ですから、宗教上の偏見が伝記執筆上の難点でした。15、16世紀のルネッサンスは人々の精神を自由に解き放ち、興味を押し広げましたが、伝記作品から神学臭さは容易には消えませんでした。

ヘンリー8世の治世の頃、イングランドの数多くの古書研究家の中でも最も初期の一人で最も熱心だったジョン・リーラント（John Leland[46]）は、英国の著述家の伝記辞典を出版すべく準備をしていました。それは、友人であり弟子であったビショップのベイル(Bale)によって大幅に増補され、エドワード(Edward) 6世の治世に出版されました。ベイルは論争好きのプロテスタントで、自分の伝記辞典をカトリック教徒を攻撃する大砲たらしめようとしました。ところが、今度は16世紀の末に、不動の信仰をもつカトリック教徒だったピッツ（Pits)

は、イングランドの著述家の伝記辞典を著し、その中でベイルがかつてカトリック教徒に浴びせた悪口雑言をプロテスタントに浴びせて逆襲しています。

ベイルやピッツのような精神傾向を追い払うのは難しいようです。二人のすぐあとに続いた伝記作者たちも皆、同じ精神に毒されています。たとえばよく知られている例に、俗に「殉教者伝」と呼ばれているフォックス（Foxe[47]）著の『行為と功績（*Acts and Monuments*）』があります。この特定の階級の人物の伝記には、まさにこうした精神が躍動しています。

しかし、神学上の偏見だけが、こうした初期の伝記作者たちの努力の価値を減じてしまったわけではありません。真に充実した伝記が完成する前に根絶せねばならなかったのは神学上の偏見のみではなかったのです。愛国心からくる偏見、民族的偏見などもまた同じようにはなはだやっかいな代物であり、神学上の偏見同様これが原因となって叙述は歪曲されてしまうのです。

この悪影響の最も顕著な例は、17世紀に出版されたスコットランド人作家とスコットランドの歴史的人物についての辞典の中にみられます。トーマス・デムプスター（Thomas Dempster[48]）という熱狂的なスコットランド人が書いたものです。自国の名声を高めるために、大勢の外国の著名人をスコットランド生まれだと主張し、また、架空の著述家をでっちあげて、その著述家からの引用であるといって自分の主張の裏付けに利用したのです。この男の犯した誤りのなかでもとりわけ奇怪で気まぐれな誤りのひとつは、ブリトン人の女王ボアディケア（Boadicea[49]）をスコットランドの著述家で王女であると主張しようとしたことです。

さらに例を挙げれば、もっと後に出版されたスコットランド人による伝記集を挙げることができます。それは、マッケンジー（Mackenzie[50]）による『スコットランド国の最も傑出した作家の生涯とひととなり（*Lives and Characters of the Most Eminent Writers of the Scottish Nation*）』で、フォリオ版の３巻本として18世紀に出版されました。それを見ますと、民族の誇りというものは、否応なく、同様の結果を招くものだということがわかります。しかしながら、マッケンジーのこの本は、空想で書かれた部分が多く、不正確なのでありますが、国民的伝記へ向かって踏み出された明確な一歩となったのです。

一方イングランドでは、国民的伝記の方向に向かって歩みは着実に進んでいました。偉大なエリザベス朝時代は愛国心と文学に対する情熱が目覚ましく昂揚した時代でありますが、伝記も文学の一部門と看做され無視されるようなことはありませんでした。ノース（North）訳によるプルタルコスの『ギリシア・ローマ対比列伝（*Parallel Lives of the Greeks and Romans*）』によって英国民は伝記作者の腕前次第で人物描写がいかに申し分のない見事なものになり得るものであるかを知りました。同時に、50年間改定増補され続けた英国史詩集『為政者の鏡（*The Mirror of Magistrates*）』[51]において、一時的にせよわが国において初めて伝記が広く国民に利用されるようになったのです。この本では、歴史上の英雄的人物が一人ひとりきっちり同じ長さで次々と連続して伝記の体裁で叙述され、1巻のうちにまとめられています。幸いなことに、このような叙述の仕方はすぐに廃れてしまいましたが。

一般的に言うと、詩人が伝記の筆を執ると、記念すべき人物の亡霊が呼び出され、業績ばかりがやたらくどくどと列挙される傾向があります。偉大なエリザベス女王の死の直後、ロバート・ノーントン（*Robert Naunton*）[52]という名の一人の若い廷臣が女王の寵臣たちのことについて書きました。その中には有名な人物も大勢含まれています。しかし、ノーントンは、いまは泉下で憩っている人物たちを踏みにじることを恐れ、自分の知っていることを洗いざらいぶちまけることを思い留まりました。

17世紀には、伝記集において一段と進歩がみられました。まず最初に、ヘンリー・ホランド（*Henry Holland*）[53]が『英雄伝（*Herwologia*）』を出版しました。これは、当時の傑出した人物70人ばかりについて、丹念に刻まれたエッチングによる肖像画を掲げ、それぞれについて記念するいわれを簡潔に述べたものです。

チャールズ1世と国会との間に生じた内乱による緊迫した時代には、国民の記念本能は例をみないくらい掻きたてられ、双方の側の指導者たちに関する伝記集が数多くあらわれました。

もっと後には、オーブリー（Aubrey）[54]が著名人たちの伝記をまとめています。オーブリー自身の言葉を借りて言えば、「雑然と」書かれたもののようです

が、しかし、彼自身の思い出や、友人たちの回想をもとに、真実を赤裸々に描き出したものになっています。そして、専ら高名な人物たちの際立ったひととなりを描き出すことを目的とし、オーブリー自身が目撃しなかったこと、直に耳で聞いて確かめることができなかったことはいかなる特徴であれ極力書かないように努めました。オーブリーは正しい道を歩み出したわけですが、その歩みは必ずしも遠くにまで到ったとは言えません。

もっとはるかに成功しているのは、アンソニー・ア・ウッド(Anthony à Wood)[55]が脇道の仕事として書き上げた伝記でしょう。彼はその『オックスフォード学園名鑑(*Athenae Oxonienses*)』の中で、オックスフォードで学んだすべての著述家を扱っております。彼の勤勉な努力はとどまるところを知りませんでした。もしも時々、自己の宗教的政治的好みに従って思いのままに人物評価をしていたら、激しい非難や熱烈な讃辞を書き綴った彼の古風な言葉使いも、伝記文学の愛好家からもっと素直に大目にみられることでありましょう。

しかし、17世紀に、国民的伝記に向かってなされた最も顕著な前進はトマス・フラー(Thomas Fuller)[56]によるものであります。彼は1662年に初版が出た『イングランドの貴顕(*The Worthies of England*)』の中で、若干ふざけた饒舌気味のところもありますが、あらゆる時代の、あらゆる階層の英国人の業績をたっぷりと収録し、編集しています。

18世紀になるとあらゆる知識を百科事典という形式でまとめるシステムが登場しました。これは最初フランスで考案されたもので、その最初の成果としてベール(Bayle)[57]の『歴史的批判的辞典(*Dictionary Historical and Critical*)』が挙げられます。このシステムは英国の伝記作者に新しい伝記の方法論を示唆することになりました。百科事典的な形式へと移り行く潮流に影響されて、ついに我国においても国民的伝記への真の試みが着手されたのです。

その果敢な試みは、次のようなタイトルがつけられました。すなわち『英国伝記辞典(*Biographia Britannica*)』で、副題は「古代から現代まで、大ブリテン島及びアイルランドで活躍せし最も著名なる人物の伝記:活字本にせよ手稿にせよ、最も信用すべき典拠より蒐集し、ベール氏の『歴史的批判的辞典』の方法論に倣いて要約せり」となっています。第1巻は1747年に出、最終巻の17

巻は16年後に出版されています。この辞典には重大な欠陥がありましたが、しかし、あらゆる先駆的仕事には欠点はつきものであり、それらは大目にみられるべきでありましょう。採録する人物の選択の点で『英国伝記辞典』はいささか気まぐれであり、個々の伝記の長さは釣り合いがとれておらず、愛国心からくる偏見や階級的偏見も必ずしもすべてチェックされているとはいえません。また、各々の伝記の執筆者たちには、最も貴重な情報を、長々と活字の不鮮明な脚注の中に詰め込むという不愉快な癖がありました。

しかしながら、この辞典は、あとに続いた辞典とは異なり、まがりなりにも見事にZの項まで完成させております。したがって、いまだに教養ある人々から敬意を払われております。11年後に第2版の出版にそなえてジョンソン博士が招かれました。しかし、ジョンソン博士は辞書の編纂の仕事はそれまでに一度経験しており[58]、それ故にもっともなことながら二度目の経験は辞退いたしました。そのため、この仕事はキッピス（Kippis）博士の引き受けるところとなり、1793年に第2版の第5巻にして最後の巻となった巻が出ました。しかし、その巻の最終ページはFの項の初めに到達したにすぎませんでした。ジョン・フォルスタッフ（John Falstolf）卿の項でこの計画はストップしてしまったのです。そして後には、膨大な断片が、陰鬱な挫折が、みじめな実例が永久に残ってしまったのです。

「障害と思いがけない不幸が行為そのものの中に大きく立ちふさがっているのだ。[59]」

この挫折にもかかわらず、英国民に祖先たちの業績についてのまとまった記録を提供しようという試みが、次の90年間にひとつ、ふたつとなされました。1814年にアレグザンダー・チャーマーズ（Alexander Chalmers）[60]は32巻から成る『伝記辞典（*Biographical Dictionary*）』を完成させました。これはたいへん見事に編集されています。もっとも、『英国伝記辞典』と『ジェントルマンズ・マガジン（*Gentleman's Magazine*）』――この雑誌は長年にわたって毎月、完全なしかも役に立つ死亡記事を掲載している雑誌ですが――からの無断借用がみられますが。さらに30年ほど後に、「実用知識普及協会」、これはブルーム（Brougham）卿が議長を、スペンサー（Spencer）卿（現伯爵の御父上）が副議

長をつとめる委員会が運営している協会ですが、この協会が英国民の伝記と世界の伝記を結合した広大な規模の伝記辞典を計画いたしました。しかし、7巻を費してようやくAの項が完成したに留まりました。これほどの規模のものでありますから、この果敢な企てが頓挫してしまったのも無理もありません。同じ方針に基づいていますが、もっとずっと控え目な試みが続いてなされました。ローズ（Rose）の『伝記辞典（*Biographical Dictionary*）』です。しかし、この場合も、アルファベットの最初の3文字の項だけで6巻が費やされてしまい、残りの23文字の項はあとの6巻の中にぎゅうぎゅうに詰め込まれてしまいました。残りのアルファベットに該当する大勢の立派な人物に対してなされたこの非礼によって、この企ては完膚なきまでの批判にさらされることになりました。

その後、わが国では伝記集を作ろうとの努力は一時中断しました。新しい『英国伝記辞典』を作ろうとの計画はアルバマール・ストリートにある有名な出版社[61]によって長い間あたためられてきました。しかし、その計画は日の目を見ない運命となりました。この世紀の半ばすぎ、ドイツ、オーストリア、ベルギーの各国は政府援助の文学アカデミーの後援のもとに国民的伝記集をまとめる事業に着手しました。英国においてもついにわが文学における欠陥を補うための新たなたゆまぬ努力が開始されました――しかし、それは国家の援助を受けた文学アカデミーの後援のもとになされたのではありません。一人の偉大な英国人による独立独歩の啓蒙的努力によってなされたのです。国民的伝記集のためなされたこの最新の努力について多くを語ることは、私にはふさわしくありません。なぜなら、私自身がそれに深く係ってきたのでありますから。

『国民人名伝記辞典（*Dictionary of National Biography*）』は13年ほど前にレズリー・スティーブン（Leslie Stephen）[62]氏の編集采配のもとに着手され、現在私の采配のもとに完成に近づきつつあります。たとえ『国民人名伝記辞典』が、今夜私が皆様方にお話ししました、かくあるべき内容を必ずしもすべて具備しているとは言えないとしましても、また、間違いを含んでいるとしましても――このような広範な仕事の場合、間違いは避けられないものでありますが――、この伝記集を手にとって下さる方は、これがほぼ完璧に近いものであることをお認め下さると思います。われわれ本伝記集の出版に携わってきた者は、

先人たちの仕事を大きく前進させたということを、そして最後に、国家国民に奉仕せんとするものでありながら、これが民間事業の成果であり、民間人の手になるものであるということ、そしてそれが故にその有用性が減ずるなどということは微塵もなく、かえってその壮大な主題にふさわしいものとなっていることをお認めいただけるものと思うのであります。

訳　註

(1) Samuel Johnson (1709～84) イギリスの作家、評論家。『英語辞典』を独立で完成。当時の文壇の大御所的人物。

(2) William Pitt (1708～78) イギリスの政治家。通称大ピット。インドや北アメリカにおける植民地戦争でイギリスを勝利に導く。

(3) スコットランドの政治家で法律家であったブルーム卿 (1778～1868) が最初に用いた型の馬車で、1頭立ての2人乃至4人乗り4輪箱馬車。

(4) Thomas Fuller (1608～61) イギリスの聖職者。

(5) John Keats (1795～1821) バイロン、シェリーと並ぶロマン派第2期のイギリスの詩人。

(6) Percy B.Shelley (1792～1822) ロマン派第2期の詩人。

(7) Alfred Tennyson (1809～92) ヴィクトリア朝の代表的詩人。ウェリントン公爵 (1769～1852) はワーテルローでナポレオンを破った英雄的軍人。

(8) Charles Wolfe (1791～1823) アイルランドの詩人。ジョン・ムーア卿 (1761～1809) はイギリスの陸軍中将。ナポレオン戦争の時スペインへ出征。退却中に敵弾に倒れる。ウルフの詩はこの時のことを歌ったもの。

(9) John Milton (1608～74) イギリスの詩人。「リシダス」は溺死した学友エドワード・キングを追悼したもの。

(10) テニスンが学友アーサー・ハラムの死を悼んで書いた長詩。

(11) Cornelius Tacitus (55頃～115以後) ローマの歴史家。『アグリコラ伝』はローマの政治家で、タキトゥスの岳父アグリコラの伝記。

(12) イギリスの文人、トマス・ブラウン (1605～82) の「壺葬論」からの引用。

(13) シェイクスピアの「テンペスト」4幕1場からの引用。

(14) Thomas Carlyle (1795～1881) イギリスの歴史家、思想家。『フランス革命』『英雄崇拝論』『フレデリック大王伝』など。

(15) James A.Froude (1818～94) イギリスの歴史家。カーライルに傾倒。『英国史』(全12巻)。

(16) 1832年以降3次にわたって改正が行われ、労働者階級も参政権を得る。

(17)　重商主義的保護貿易に対する批判として始まり、19世紀中葉のイギリスでは関税改正、穀物法や航海条例の撤廃などが行われる。

(18)　Richard Cobden（1804～65）イギリスの政治家。ブライトとともに反穀物法同盟を組織。穀物法撤廃を導く。

(19)　John Bright（1811～89）イギリスの政治家。コブデンとともに穀物法廃止に尽力。

(20)　William E.H.Lecky（1838～1903）イギリス（アイルランド）の歴史家。『18世紀英国史』（全8巻）。

(21)　Benvenuto Cellini（1500～71）イタリアの彫刻家、金工家。決闘、殺人、陰謀などの罪により追放、ローマ、フランスなどを遍歴。波瀾に富む生涯の自叙伝が18世紀になって初めて公刊された時、ゲーテやルソーが絶賛した。

(22)　Edward Herbert（1583～1648）イギリスの哲学者、外交官。『自伝』『ヘンリー8世伝』。

(23)　Samuel Pepys（1633～1703）イギリスの日記名文家。海相となり「近代イギリス海軍の父」とも呼ばれるような業績を残す。その日記は日記文学の白眉とされている。

(24)　Mary Stuart（1542～87）エリザベス1世のいとこにあたるスコットランド王ジェームズ5世の子。イギリス女王エリザベス1世との対抗上カトリックに味方。国内に反乱がおきたため子ジェームズ6世に譲位。イングランドに逃亡したがエリザベスのために19年間幽閉された末、陰謀荷担を理由に処刑される。

(25)　Thomas More（1478～1535）イギリスの人文主義者。カトリックの信仰を固持し、国王ヘンリー8世の離婚に反対したため、処刑される。『ユートピア』。

(26)　1605年イギリス王ジェームズ1世の弾圧に反対したガイ・フォークスらカトリック教徒が、国王臨席の議会に火薬を仕掛けた事件。事前に発覚し、首謀者は処刑される。

(27)　Thomas Babington（1st baron Macaulay）（1800～59）イギリスの歴史家、政治家。『英国史』（全5巻）。

(28)　Agnes Strickland（1796～1874）イギリスの歴史作家。『イングランド女王史』（全12巻）は姉のエリザベスとの共著。

(29)　William Cowper（1731～1800）イギリスの詩人。ホメロスの翻訳家としても知られる。

(30)　Joseph Priestley（1733～1804）イギリスの化学者、聖職者。

(31)　James Boswell（1740～95）イギリスの伝記作家、弁護士。『サミュエル・ジョンソン伝』は伝記文学の最高傑作のひとつ。

(32)　John G.Lockhart（1794～1854）イギリスの著述家、ジャーナリスト。ウォルター・スコットの娘ソフィアと結婚。伝記『ウォルター・スコット卿の思い出』を書く。

(33)　Walter Scott（1771～1832）イギリスの詩人、小説家。『ウェイヴァリ』『アイヴァンホー』など。

(34)　George G.Byron（1788～1824）イギリス・ロマン派の詩人。生涯数多くの女性と恋愛

関係をもったことは有名。

(35) Horatio Nelson (1758～1805) イギリス海軍の提督。ナポレオンの艦隊をトラファルガー沖で撃滅するも、自身は戦死。ハミルトン夫人と同棲。

(36) Charles S.Parnell (1846～91) アイルランドの民族運動指導者。姦通罪に問われて政界から引退。

(37) Samuel T.Coleridge (1772～1834) イギリス・ロマン派の詩人、批評家。転地療養をかねたイタリア旅行中に阿片常用者になる。

(38) Richard Porson (1759～1808) イギリスのギリシア語学者。

(39) Chales I (1600～49) イギリス国王。清教徒革命で処刑される。

(40) Oliver Cromwell (1599～1658) イギリスの政治家。清教徒革命を指導、チャールズ1世を処刑し、共和制をしく。

(41) Henry VIII (1491～1547) イギリス国王。離婚問題でローマ教皇と対立。ローマ教会から離脱して自らイギリス国教会の首長となる。

(42) Thomas Wolsey (1475頃～1530) イギリスの聖職者。ヘンリー8世に仕えて栄進、枢機卿となる。ヘンリー8世の離婚許可をローマ教皇から得ようとするが失敗、政務を去る。後に反逆罪で逮捕、ロンドンに護送中に没。

(43) ギリシア中部の山。学芸を司どるアポロン神やミューズたちが住んでいたといわれ、詩歌と文芸の象徴とされている。

(44) アリストテレスの悲劇の定義、「悲劇は、崇高であると同時にある大きさをもった、それだけで完結しているひとつの行為の模倣である」(『詩学』第6章) を援用したもの。

(45) 現在出版されている*DNB*の第1巻の巻頭に収録されている「統計的解説」(A Statistical Account) (1900年のオリジナル版では最終巻である第63巻の序文になっている) をみると、以上の点の説明が異なっている。すなわち、成人が際立った人物になる割合は「16世紀が6250人に1人、17世紀は上昇して6000人に1人になるが、18世紀には少し落ちる……」となっている。「統計的解説」はS.リーが執筆し、現在も訂正されていないのであるからこちらの方が正しく、この講演をした時、リーが間違ったのであろう。レズリー・スティーブンは「国民的伝記について」の中で、リーが統計的数字について勘違いをしていると指摘しているのも、おそらくこの点を指しているのであろう。

(46) John Leland (1506？～52) イギリスの古事研究家。ヘンリー8世の図書寮司書、旧事古書調査係に任命され、宗教改革によって大量破壊にあった古文書を各地を旅して蒐集、保存に努めた。イギリス国学の祖といわれる。ここでリーが言及している著述家の伝記とはリーラントの「遺稿集」(5巻) の中に含まれている「イギリスの著作者列伝」のことで、これはリーラントの死後、半世紀以上も出版されることがなかったので、次に名前の登場するベイル (John Bale 1495～1563) とピッツ (John Pits 1560～1616) がそれぞれの宗教上の立場からまとめて出版した。

(47) John Foxe (1516～87) イギリスの宗教家。

(48) Thomas Dempster（1570～1625）スコットランドの歴史家。

(49) Boadicea（？～62）イケニ族（ブリトン人の一支族）の王妃。夫の死後ローマに対する反乱を組織、ローマ軍を破るも最後は毒を仰ぐ。

(50) George Mackenzie（1669～1725）スコットランドの伝記作者。

(51) William BaldwinとGeorge Ferrersが編集、出版したイギリス史詩集。原題は正しくは*Mirror for Magistrates*（1559）。

(52) Robert Naunton（1563～1635）イギリスの政治家。

(53) Henry Holland（1583～1650？）イギリスの編纂家、出版者。

(54) John Aubrey（1626～92）イギリスの好古家。ここで触れられている伝記集は『名士小伝』で1813年に死後、出版された。

(55) Anthony à Wood（1632～95）イギリスの好古家、歴史家。『オックスフォード大学の歴史と故実』

(56) Thomas Fuller（1608～61）イギリスの聖職者。数冊の歴史書を書く。『イングランドの貴顕』はコールリッジやラムなどの文学者に影響を与えた。

(57) Pierre Bayle（1647～1706）フランスの哲学者。その急進的自由主義思想のために迫害をうけ、オランダに移って『歴史的批判的辞典』（1695～94）を執筆。

(58) ジョンソンは独力で英語辞典を編纂している。

(59) シェイクスピア作『トロイラスとクレシダ』1幕3場からの引用。

(60) Alexander Chalmers（1759～1834）スコットランドの伝記作家。

(61) ジョン・マレー（John Murray）社のこと。John Murrayは1850年代に『英国伝記辞典』の計画を立て、数百ポンドを投資して予備調査までしたのであるが、採算がとれないと判断して計画を放棄している。Murrayは後にスミス，エルダー・アンド・カンパニー社が計画を発表すると、自社で行った調査報告、とくに、登載人名のリストを提供している。

(62) Leslie Stephen（1832～1904）イギリスの文学者、哲学者。登山家としても有名。*DNB*の初代編集長（21巻まで。22～26巻はリーとの共同編集。27～63巻はリーの単独編集）。伝記も378項目1000ページ執筆している。これはリー、ロートンに次いで3番目に多い。

付 録 2

「国民的伝記」について

レズリー・スティーブン

『一伝記作者による研究』所収

シドニー・リー（Sidney Lee）氏は先頃（1896年2月）「国民的伝記とは」という演題で王立科学研究所で講演をなされたが、この問題について語る人物として氏以上にふさわしい方は他にいないであろう。氏は『国民人名伝記辞典（*Dictionary of National Biography*）』の後半の巻を一人で編集されてこられたし[(1)]、また、これは私だからこそ証明できるのであるが、それ以前の巻の編集にあたっても、すこぶる重要な役割を果たされたからである[(2)]。

したがって、氏は自らの少なからざる経験に基づいて講演されたのであり、私がここで国民的伝記について同じ観点から何か申し述べなければならないとしたら、氏の御意見にただ「同感」と申し上げる以外に言うべきことはほとんど見当たらない。氏が挙げられた統計的な数字についても異論はない。もっとも実を申せば私自身が計算したものとは多少相違しているのだが、しかし、それもよくある計算上の勘違いということにしておこう[(3)]。だが、氏は非常に広範な問題を短時間の内に語っておられるので、触れずにおかれた事柄が無いではない。それも、氏の主張を補うのに欠くべからざる事柄がいくつかあるように思われる。そこで、私が個人的にも関心を抱いている事柄について少しばかりここで意見を申し述べてみようというわけである。

かつて『英国伝記辞典（*Biographia Britanica*）』が出版された時、詩人クーパー（Cowper）[(4)]は自作の詩の中で、次のような不愉快な見解を述べている。すなわち、この伝記辞典は、

忘れ去られるべく生まれついた取るに足らぬ人物たちに
不死の運命を与えんとする浅はかな試み

であると。

これが偏見のない正当な判断だとしたら、世に出たばかりの『国民人名伝記辞典』などは何をかいわんやである。『英国伝記辞典』では取り挙げるに足りずとされた無名の人物がここでは何千人も採録されているのであるから。この採録方針が正当であるという根拠としてリー氏は「記念本能」ということを指摘されているが、反論する人に言わせれば記念するに値する人間などほんの一握りしかいないではないかということになる。以下、そういう人に言わせれば次のように言うであろう。「本能に訴えるということは理性の働きを拒否し、偏執

狂を正当化することにほかならないではないか。なるほど誰もが認めるように、歴史上重要な人物の思い出を活き活きと保つことは大切なことであると認めはするが、まったく重要ならざる人物たちの伝記をこのように延々と並べ立てることが何の役に立つというのか。某日に生まれ、故郷のグラマー・スクールで教育を受け、某年に卒業し、カレッジのフェローとなり、生計をたて、結婚し、1世紀も2世紀もの間誰一人として読まないような説教集を1冊出版し、あとは教会の墓地で眠り続けているというような人物について、ことさら毎度お馴染みの紋切型の描写を繰り返す理由があるのか。そっと静かにしておいてやればいいではないか。静かなる緑の塚の下に満ち足りて眠る〈小村の質朴な祖先たち[5]〉ともども、そっとしておいてやれぬのか。地上にいた頃、たまさかわずかに光彩を放ったにすぎないイメージをいつまでも留めようとするのはほとんど嘲弄するに等しい行為ではないのか。田舎の教会の墓地には読み取るに値する記念碑がよくある。しかし、概して言うなら、どちらかを選択しなければならないとしたら、歴史を司る神とその守護神の彫刻が地主の徳行と名誉の数々を永遠に凝視しているようなたいそうな記念碑よりは〈長い間じっと辛酸を耐えてきた〉見事な古い梁のほうを採りたいと思わないだろうか。どうしてわれわれは必然の流れに抗わねばならないのか。自分が凡庸の極みであったことを永遠に認定されるよりは、忘れ去られてしまったほうがよくはありはしまいか」と。

私は自分が遅々とした単調な仕事に黙々と取り組んでいた時、そして今リー氏が同じように取り組んでおられる時、以上のような思いに襲われたことが時としてあったことを正直に打ち明けたいと思う。自分のやった仕事の大部分は、嫌でたまらないものではなかったにせよ、決して面白いものではなかった。私は、前世紀の非国教会派の立派な牧師であったサイモン・ブラウン（Simon Browne[6]）に共感を禁じ得ないことが間々ある。かわいそうなブラウンは心におそろしい打撃を受けた。一説によれば、それは妻と一人息子を失ったからだというし、他の説によれば「偶然に一人の追いはぎを締め殺した」からだという――こちらのほうはそれほど痛ましい不幸とはいえないと考える人もあるだろうが。とにかく、彼の心は傷ついた。魂はすっかり消え失せて、自分がもぬけ

の殻同然になってしまったように思った。そこで、ブラウン自身が言うには、こうなったら魂を必要としない仕事に就こうと思い立ち、そこで、辞典の制作者になったのだ、と。

それでもやはりわれわれは、ブラウン自身が信心深くも言っているように、「すべてのことに対して、したがって、辞典制作者になったことに対しても、神に感謝」しなければならないのである。ブラウンが作った辞典は、伝記辞典とは異なる種類のものであるが、私にはこの彼の言葉は痛いほど適切であるように思われた。カーライル（Carlyle）[(7)]は無味乾燥な学究的学者やその後継者によってうず高く積み重ねられたゴミの如き資料の山の中で格闘している時いつも嘆いていたが、その嘆きの核心をブラウンは言葉を換えて言い当てたにすぎない。歴史の「ごみの山」を必死になってひっかき回してみても、はたして得る所があるのかどうか。たとえ、たまにうまくいって掘り出し物があったとしても、それが膨大ながらくたの山を際限もなく掘り返した報酬として見合うものであるのかどうか。しかしながら、私には、こうした疑問にもかかわらず、これは、面白い仕事とは言い難いが、努力を傾けるだけの正当な理由はあるのだと次第に思えるようになってきたのである。

第１巻が世にあらわれた時、まず最初に序文があるべきなのにそれがないといって私に不満をもらした批評家がいる。序文があると書評をする者は大いに手間が省けるものである――時には本文を読まずに済ませることもできる。しかし、私は序文を書かなかったことをそれほど後悔はしていない。なぜかといえば、われわれの企画の真の有用性を、今でこそしっかりと認識しているが、私自身当時は充分わかっていなかったからである。今ここで序文を書こうというのではないが、後になって経験によって徐々に気がついた事柄を、当時はっきりと認識していたならば序文で述べていたかもしれない、あるいは述べるべきであった事柄を少しばかり述べてみたいと思うのである。

リー氏の言われる「記念本能」が、国民の伝記という企画に大いに関係があるのはもちろんのことである。しかし、この本能は他の本能同様に明晰な理性によって規制される必要がある。純粋に学究的な学者というのは、まったく無害な人間であるし、時には人のよい人物である。そういう学者は、少なくとも

自分の趣味は全然無害なものだと主張する。日付や名前や諸々の事実を膨大に積み重ねることに情熱を燃やす人物を非難するよりは、芸術の愛好家や博物学の研究者の方を非難すべきではないかと主張する。O.W.ホームズ(Holmes)[8]の『コガネムシ(*Scarabee*)』の中に描写されている典型的人物、名もない種類の昆虫たちの細かい特徴に異常なほど精通することに人生を捧げている人物は、自分の仲間たちになんら直接的な害は及ぼしていない。そして、たまには、ささやかなものであれ、科学の進歩になにがしかの貢献をなすこともある。他の事に使えば名声や富をもたらしていたかもしれないあり余るエネルギーを、おそらく5、6人の人間にしかその普遍的価値や要した苦労をわかってもらえない仕事に費やす情熱に対して、われわれは敬意を払わねばならない。ひたすら学究的な学者というのはそうした共感を覚えるのに値する人物である。

もっとも、そういう学者には弱点がある。その情熱が偏執狂的執念になってしまうということだ。明らかに何の重要性も無い仕事に無限の労力を注ぎ込み、自分の得た結論を馬鹿馬鹿しいくらい高く評価することがよくある。系図学や文献学といった学問は、正当な歴史家が提示した重要な問題に間接的な影響しか与えない。優秀なチェスター大佐（Chester）[9]は何年もかけてジョージ・ワシントン（George Washington）[10]の家系を調査し、多忙の合い間をぬって小教区記録簿の抜粋から成るフォリオ版で各巻400ページ以上の巻を書きつらねて87巻に及んだ、などという記述を読むと身震いが出る。大佐は「絶え間なき仕事」がもとで亡くなったと付け加えられている。故ブラドショウ氏(Bradshaw)[11]もまた、すこぶるすぐれた人格と、非常に明敏な知力の持主であったが、たゆまぬ努力によって、古書の出版された日付と場所を一目見ただけで言い当てるという驚くべき能力を身に付けていた。氏は、インディアンが枯葉や草の葉に、そこを通過して行った人間の痕跡を読み取るように、印刷上のほんのわずかな特徴からもその示唆するところを解釈することができたのである。確かに、われわれはすぐにそうした能力が、もっと明らかに有用な方面で活かされていたらと残念に思いたくなる。16世紀か17世紀のあれやこれやの名もなき田舎の地主がワシントンの先祖であるという栄誉を得ようが得まいが、それがどうしたというのか。ある本がロッテルダムで印刷されようがヴェネツィアで印刷され

ようが――1600年、あるいはそれよりも10年早く印刷されようが遅く印刷されようが、それが本当に重要なことなのかと。

私はここでモラルの問題を論ずるつもりはない。ともあれ、それはチェスの手を考えることに頭を使うよりはましだといえるかもしれない。もっともチェスも無害な気晴らしという効用はあるが。そのような仕事をする人は、政治史や文学史の研究者に本当に重要なデータを提供することが偶然にあるかもしれない。今まで混乱していたものを最終的に整然とさせ、正確な調査の一般的水準を引き上げるのに役立つことがあるからだ。必ずしも重要な利益とはいえないかもしれないが、それでもひとつの利益を人類に確実にもたらしているのである。かといって、こういう人たちが、自分は哲学者であると思い込んでいるなら、円を四角だと言い張るようなまったく無駄な努力をしていることになりかねない。ともかく、彼らは、少なくともレンガを積み重ねているのであって徒らにシャボン玉をふくらませているわけではないのである。

はっきりとわかっていない事柄を手を尽くして調べあげるという努力を数限りなく積み重ねることによって、実際、膨大な量の知識が蓄積されてきた。この際に危険なのは、歴史家は史料の膨大さに圧倒されてしまいかねないということである。1世紀か2世紀前には、ヒューム（Hume）[12]はジュリアス・シーザー（Julius Caesar）の時代からヘンリー（Henry）7世の時代に至る歴史を2年間で書き上げることができたばかりでなく、執筆に必要な知識も蓄積することができたのである。今日では良心的な仕事をしようとする歴史家は出来事を叙述する際、その出来事が要したのと同じ位の時間をかけなければならない。知識のソースは数限りなくあり、程度の差はあれ、ありとあらゆる情報手段を利用しなければ薄っぺらな歴史家と看做されてしまうことになる。

現代では、昔の年代記作者や、後にそれらを要約しただけの歴史家たちに単純に満足しているわけにはいかないのだ。古代の勅許状、訴訟手続の公的記録、荘園の公文書、町の公文書などによって歴史の隠された側面に光が当てられてきている。郷土史家たちは珍しい事実を発掘している――もっとも、そうした事実の重要性はようやく認識されはじめたばかりなのだが。国家の公文書の日程表を見れば、歴史に深く係わった人物たちの意見を辿っていくことができる。

同時代の出来事を鋭く見つめてきた外交官たちの公文書は、一部は活字にされてきており、さらにシマンカス[13]やヴェネツィアあるいはヴァティカンにはまだ山のように眠っている。歴史的写本委員会は、地方の古い大邸宅の図書室でほこりをかぶっていた膨大な量の古い書簡や文書の一部をわれわれの閲覧に供している。大英博物館の図書室へ行き、活字になった書物の膨大なカタログを見、写本部門で調べることができる山のような材料を思い出す時、われわれは――少なくとも私は――悪夢を見ているような気持に襲われる。忘却の慈悲深い帳はもちろん広い範囲にわたって降りているのだが、しかしこの２、３世紀間に起こった事実で、再び絶対に光を当てることができないほど完全に闇の中に没してしまっているような事実は無いのだとつい思いたくなってしまう。２世紀以上も前のことであるが、一人の名もなき若者がオランダのある大学で学位論文を書いた。ある時たまたま私はその論文にぶつかり、おかげで他の人には少しも興味のないような伝記上の日付を知ることができた。とはいえ、どんなに取るに足らない古めかしい記録であっても決して忘れ去られるわけにはいかないのだということを思い知る時、なんだか妙に愕然たる気持に襲われるものである。幸いなことに、大学によっては学位論文は失われてしまっているが、祖先を記念しようとする動きが加速度的に進んでいくにつれて、まるでわれわれは忘れ去られるものはなにもなくなるのだと覚悟を決めてしまっているかのように思われる。

こうした山の如き膨大な資料が、まぎれもなく歴史の役に立ってきたかどうかは疑わしいかもしれない。多くの事柄についてわれわれが先祖たちに比べて圧倒的に知識が豊富なのは間違いないが、たとえばマコーレー（Macaulay）[14]やフルード（Froude）[15]の後半の巻を読むと、このような歴史家でも国家の公文書をあまりにも多く利用しすぎているという思いがところどころする。大きなアウトライン、かつては歴史とはまさにこの大きなアウトラインのことであったが、これは今でも最も重要なものである。ところが、このアウトラインを充実し、より正確で明瞭なものにするどころか、当時の政治家や外交官がたまたまこのアウトラインについて考えた事柄――時として、彼らが真の問題点をまったく誤認した事柄――について仔細な説明を書き並べてその背後に、このアウ

トラインを隠してしまっているように思われる。

しかし、いずれにせよ、ひとつだけはっきりと言えることは、史料を蓄積すると同時に、そうした史料を利用しやすくするための工夫が常に施されなければならないということだ。大きな図書館は蔵書が増えるにつれて蔵書目録をきちんと整備していかないと絶望的な迷宮と化してしまう。蔵書を充分に活用するためには、蔵書目録だけではなく、蔵書に関する明快な案内が必要である。これがなければ広大な荒野をさまよっているようなものである。しかし、この荒野はあらゆる方向に熱帯の豊饒な土地へとつながっているのである。だから、荒野をぬけ出す小道を、それもなにか明快なシステムに基づいて知る必要を感ずる。その案内に従っていけば必要な土地へ到る道が見つかり、どの方向へさらに探究を続ければよいか教えてくれるようなそうしたシステムに基づいて小道を発見する必要がある。

さて、この必要性に応えること、あるいはこの必要性の一部でも満足させる手段を提供すること、これこそ、『国民人名伝記辞典』が第一に意図するところである。この辞典はこれがなければ複雑に入りくんだジャングルの中を絶望的にかき分けて進まなければならないことになる人にとって欠くべからざる案内とならなければならない――どの程度までそれに成功しているかは私が言うべきことではないが。私はどの研究者もこの辞典を図書館で利用すればいいなどとは言いたくない。(比喩的に言えば) いつもポケットにしのばせておくべきだと言いたい。なるほど、物理的意味ではとうてい文字通りポケットにしのばせられるようなものではない。もっとも、50巻や60巻というのは、ちゃんとした図書館なら小さな断片程度のものにすぎないが。だが、思慮ある人ならなんとか手近に備えておこうと努力するだろう。そして、この辞典が第一に意図するところは様々な調査の補助として役に立つということであるが、私はあえて次のように言いたい。この辞典は記念本能を満足させるという、より高尚な目的の役に立つばかりでなく、英語で書かれた最も楽しい作品のひとつになるかもしれないと――こんな風に言うと、私の友人たちは、時として苦笑をもらすのであるが、私は恐れず言いたいと思う。

しかしながら、もっと賛同を得やすい主張から話を始めることにしよう。山

のような古文書の泥沼を渡るための舗装道路の働きをするこの辞典の効用は誰が考えても明白である。ところが、リー氏が指摘された事実は、こちらが望むほど明確には必ずしも理解されていないのである。歴史家の領分と伝記作者の領分は、密接に関連はしているものの、面白いことにまったく別個のものなのである。もちろん、歴史は、出来事の大部分が特定の人間に結びついている限りにおいて伝記と関連がある。最も思索的な歴史家でさえ、ウィリアム(William)やハロルド（Harold）のことに言及しないでノルマン征服[16]のことを記述することはできない。そして、逆に、すべて個人の生涯は、その個人が生きた時代の状況をある程度映し出している。世捨人でさえ、少なくとも、両親と学校教育のもたらした結果であり、同時代の思想に影響を受けている。ところが、奇妙なことに、この事実が歴史家にも伝記作者にもはなはだ無視されている。

伝記の材料を普通にまとめただけのものをみると、その作者が明々白々の結論が導き出されているのに全然気付いていないことに驚かされることがしょっちゅうある。歴史家の手になれば、政治問題を明確に浮かびあがらせるかもしれない事実、あるいは、当時の社会状況の際立った特徴を示すような事実、そうした事実を叙述していながら、ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）[17]氏の言葉を借りれば、その「必然的含意」に気付いていないのである。われわれが例外的なことだと思っていることでも、同時代人は当然のことだと考えていることがもちろんあるし、あるいは、いまだに事実が曖昧模糊としているために決着がつかない論争にはっきりと終止符を打つような証拠を、同時代人はそれとは気付かずに提出していることもあるかもしれないのだ。通常の書物では、そうした事実も単に機械的に繰り返されることがしばしばで、したがって読者は手引きとなる書物を見ていながら、半分眠っているも同然のことが少なくないのである。だから、私は時々ふと思うのだが、人はみなある意味ではそれなりの伝記作者なのかもしれない。つまり、系譜上の事実や職務上の事実は数限りなく述べ立てることはできるが、事実を結びつけてそこから然るべき結論を引き出したことは決してないという意味で。

ある作家の経歴についてこまごまとした細部の事実は挙げてあるものの、その作家の伝記作者が当時の文学について一般的知識をまるっきり持ち合わせて

いないことをまぎれもなく露呈している伝記を一冊ならず読んだことがある。たとえば、ボズウェル（Boswell）[18]の『ジョンソン伝（*Life of Johnson*）』の中に登場するすべての人物についてあらゆる事実を知りながら、ジョンソン[19]、あるいはバーク（Burke）[20]やゴールドスミス（Goldsmith）[21]の英文学上の一般的な位置付けに関して皆目わかっていない伝記作者がいる。そういう伝記作者は、せっかく大きな美術館へ足を踏み入れながら、目隠しをして歩き回っているようなものだ。あるいはむしろ、不思議な働きをする眼をもっていて、そのために、様々な絵の総合的な印象を持ち合わせなくともカタログが作れるのだといったほうがよいかもしれない。

かの偉大なるシャーロック・ホームズ（Sherlock Holmes）氏は、一番取るに足らない事実こそが重要な価値をもっているのだと強調している。ホームズ氏が現代の犯罪事件ではなく歴史に目を転じてくれれば、うまく結びつけさえすれば多くの重要な問題に新しい光を投げかけるであろう小さな出来事を数多く見付け出してくれるのではないかと思う。歴史について真の想像力をもっている人の手になれば、より多くのことが為し得るのである。歴史について真の想像力をもっている人とは、スコット（Scott）[22]が祖先たちも現在のわれわれと同様に活き活きと人生を生きていたことに気付いた時に大きく前進させた一歩の意味を理解できる人のことである。顧みられることもない一見不毛に見える無数の事実の中に、祖先たちの生き方や考え方の生きた実例を見い出せる人のことである。城郭建築を愛したマコーレーが、当時の名もなき新聞や際物的文学作品の中に、欠点はあるにしろ他とは比較にならないくらい鮮やかに、実物の如く活き活きと描写する材料を見つけ出したことは広く知られている。

さて、伝記作者の第一の任務は、私が伝記と歴史の間の適切な相互作用と呼んでいるものを円滑にすることである。それぞれの研究が出来るだけお互いに光を投げかけあうようにすることである。そして、方向が異なる二つの学問が互いに新鮮な活力を与え合うことである。というのも、二つの学問が互いに依存し合っているのは明白であるにもかかわらず、無味乾燥な学究的学者たちによって両者は互いに避けあっているからである。そして、このことが、私に対してしばしばなされる次の質問に対する充分な回答になっていると思う。すな

わち、『国民人名伝記辞典』に登載される資格は何かという質問である。登載される人物は3000人あるいは30万人ではなくどうして3万人でなければならないかという質問である。リー氏はすでにこの問いに対して答えを出しておられ、それはそれなりに適切な答えだと思う。しかし、リー氏の答えに言及する前に、別の観点、つまり、より「客観的」規準と呼べそうなものがあるのだということを指摘しておかなければならない。もちろんそれは、必然的にこの問題に対する第一の答えにも大きく関係している。

すなわち、伝記作者と歴史家の間の適切な相互関係を維持するために、通常の歴史の中でさらなる研究が充分見込まれている人物はすべて登載される必要があるということである。即座に思いつく例を挙げれば次のような人物がいる。マコーレーは、英国の出版許可制の最終的廃止につながったある陰謀について非常におもしろいことを語っている。事実自体が英文学史上すこぶる興味深い事実のひとつであったが、主に関係のある二人の人物はまったく無名の人物である。それはチャールズ・ブラント（Charles Blount）とエドマンド・ボウアン（Edmund Bohun）[23]であるが、彼らは当然ながら、自分たちのちょっとした出番を演じ終えてしまうや、マコーレーのページからは消えてしまっている。しかし、真に危機的な時代の転換点に偶然にも巻き込まれてしまったこの二人の人物が、他の場面ではどういう人物であったのかを知りたいと思うのは当然のことである。『国民人名伝記辞典』を参照すれば、回答を得られるばかりでなく、当時の英国の著述家たちがすこぶる重要な権利を獲得するにいたった状況をより明確に知ることができる。歴史家は無名の人物が大衆の前に登場した特定の舞台しか扱うことができない。しかし、その出来事の意義は、表舞台に登場する前のその人物の行動を跡付けることができる時、より一層鮮明になるのである。

さて、このような調べものをする際、伝記作者には目の前にすでに一部は整理されているものの、山のような膨大な資料がある。このテーマに手をつけた人で、アンソニー・ア・ウッド（Anthony à Wood）[24]の有名な『オックスフォード学園名鑑（*Athenae Oxonienses*）』がすこぶる役に立つことを知らない人はいまい。この本はオックスフォードに縁のあるすべての人物について、手短か

ではあるが実に洞察に富んだ説明を加えたものである。そして、同時代の人物について自分が直接丹念に調べ上げた成果を記録している。それらは、ウッドがいなければ忘れ去られてしまったであろうような事実である。また、同じ頃に、様々な宗派の情熱的努力によってあらゆる宗教人の伝記集が出そろった。1662年に追放された非国教徒たちの伝記、これとは逆にイギリス共和国のもとで「受難した聖職者」の伝記、刑法によって処罰され、殉教したイエズス会士の伝記、そして、クウェーカー教徒の伝記などである。クウェーカー教徒たちは、いつの時代でも同胞の生涯の記録を残そうとしてきたことで有名である。もちろん、これら以外にも古い伝記集はいくつもある。その中には、画家や医者、裁判官、艦隊司令長官など、特定の階層の人々のみを扱った辞典もある。したがって、第一の簡単なルールは、こうした伝記集に取り上げられている人物はすべて登載される資格をもっていると看做すことである。理想的な伝記辞典とは、過去に存在したすべての伝記集を完全に集大成したものか、要約したものであろう。でき得る限り、そうしたものに近づくように努力せねばならない。言い換えれば、まず第一に、ちゃんとした伝記集にすでに名前の挙がっている人物はすべて登載せねばならないということ、次に、なんらかの理由で洩れているのだが、ほぼ同列に扱うべきだと思われる人物を大勢補充しなければならないということである。このルールは、なるほど古来用いられてきた手っ取り早い大雑把な原則には違いないが、思慮と分別を働かせて用いれば、一種の試金石として充分指針となるものである。

このルールの利点については多言は要しないと思うので、一点だけ指摘するに留めたい。研究者なら誰でも知っていることであるが、どんな調べものであれ、完全に調べがつくものと当然のように決めてかかるのはとんでもない間違いである。私がある情報を求めて闇雲に書物を何冊もひっくり返したり、あちこちの図書館を調べ回っているとしよう。しかし、その場合もし私に、そこに見つけることができなければ、そういう情報はそもそも存在しないのかもしれないと多少自信をもって言い切れる一冊の書物あるいは図書館があれば、私の努力は、否定的な結果ではあるが明確な結果を生じたことになる。たとえば、大英博物館にありとあらゆる印刷物を収集しておくのはまさにこのためである。

どんなつまらない知識であれ、それが役に立つことは決してあるまいとあらかじめ言い切れる人は誰もいないという理由からだけではない。この膨大な書棚のどこを探してみても記録が見つからないということは、それ以上その事実を探求してみたところで十中八九は無駄骨に終わるだろうということがわかっていれば、やれるだけのことはやったという満足感を得られるからである。いかなる伝記辞典といえども、完全な意味ですべてを網羅し尽くしているということはあり得ない。網羅的な伝記辞典というならば、他の記録は言うに及ばず、小教区記録簿をことごとく転載したもの、ということになるだろう。しかし、歴史の研究者の目的からすればそこまでのものでなくとも、それは網羅的に近いものと言えるのではあるまいか。もっと言えば、大抵の場合、ある程度完璧に近いものでありさえすれば目的に叶うのである。

たとえば、名も無き人物ではなく、これまで絶えず論争のほこりを舞い上げてきたもっと重要な人物を取り挙げる場合、辞典というものはまず第一に、その人物について今までに書かれたすべての著作物を充分に指摘するものでなければならない。また、最近の研究成果を手短かに述べ、最もすぐれた専門家たちの間で通説となっているように思われる見解を解説しなければならない。そして、今後問題となるように思われる点を指摘しておかなければならない。とりわけ、最良のかつ、最もオリジナルな情報源を提示すべきである。良き辞典の最も重要で価値ある部分は、その事項についての権威者たちの無味乾燥なリストであることがよくあるのである。このリストの作成には表面上ははっきりわからないが、しばしば熟練と多大の労力が要求される。しかし、必ずしも常に感謝されていないようだ。材料を収集しなければならないからこそ、このリストが重要なのである。われわれは荒野を導いてくれる案内人を日毎ますます必要としているからだ。また、正しい検索の方法を適切に示してもらえることによって、他では発見し難いことに気付くことがよくあるし、孤立無援のわれわれの努力が間違っていないかチェックすることができるからでもある。古文書の泥沼の中に足を踏み入れてしまった時、道標があると嬉しいものである。冒険家的な先人たちはどこで水中に没してしまったのか、なんとか通れそうな道はどこにつけられているのか、信頼できるガイドは誰なのかなどを教えてく

れる道標があれば助かるのである。

さらに言えば、多種多様な目的にとって、この『国民人名伝記辞典』は、なるほど二次的な典拠にすぎないかもしれないが、しかしありとあらゆる要求に充分応えてくれるのではないかと思う。歴史を貫通している無数の道のどの道を辿ろうとも、一歩進むごとに、様々な領域から入り込んでくる人物や出来事に出会うことになる。文人は政治上の陰謀に影響を受けているかもしれないし、軍人は、文学あるいは科学を専ら活動の対象にしている人物と接触をもっているかもしれない。最も徹底した研究家でさえ、膨大な二次的な事実はそのまま信用するしかないのだ。そして、そうすることによって、二次的な事柄から専門知識に関する情報を得る際の際限のない労力は節約されることになるかもしれないのだ。

さらに敷衍するなら、このことは私が辞典の実用的側面と呼ぶものに相当している。すなわち、どんな歴史上の疑問であれ、疑問が湧いたら即座に利用できるという便利さのことである。辞典というものは、いわば絶えず身近にいて、関連が出てきそうな二次的な問題点について、歴史家だけではなく、古物研究家や系譜学者、書誌学者たちの知識をかいつまんで教えてくれる信頼のおける友人のようなものでなければならない。しかし、それだけだと、いかに立派なものであれ、どうしても無味乾燥なものにならざるを得ない。博物館の標本のようなものになってしまっては、研究意欲をそがれかねないし、「記念本能」を満足させることも叶わなくなる。

さて、一定の限界内ではあるが、この『国民人名伝記辞典』は、この面においても重要になるかもしれない。将来ネルソン（Nelson）提督[25]のような人物が、「勝利か、さもなくば、かの伝記辞典にその名を留めん！[26]」と叫ぶことを期待しているのではない。私自身自分がいつの日か、項目を執筆するのではなく、項目として取り上げられるのではないかという楽しい期待を抱きつつ、自らを仕事へ駆り立ててきたことは一度もない。私の死後の希望が尊重されるのであれば、この辞典の補遺に取り上げないでいただきたい。しかし、それはそれとして、この辞典の各項目には、記憶するに価する人物の思い出を活き活きと留めるべく最善の努力が払われている。私の如き拙い辞典執筆者にボズウェルや

ロッカート（Lockhart）[27]の代りを期待している人は誰もいないだろう。賢明な批評家なら『国民人名伝記辞典』の本当の価値は、偉大な人物の伝記にあるのではないということを充分承知している。その価値は二流の人物たちの伝記にあるのだ――死亡記事や様々な回想録や書簡集に出てくる言及をもとにして伝記を構成しなければならない人たちだ。死後出版された作品の序文の中に材料を求めなければならない時もあれば、手書きの文書の山の中から苦労して発見しなければならないこともある。そういう人たちの伝記が、今や、この伝記辞典を利用するだけでたいていの場合知ることができるようになったのである――読めば読んだだけの有益な情報が得られるのだ。

分散していた材料が今度初めてひとつにまとめられてみて、初めて本当に興味深い人物であることがわかった人たちが少なからずいる。アディソン（Addison）[28]やバイロン（Byron）[29]、あるいはミルトン（Milton）[30]のことを辞典で調べなければならない人はいないだろう。こういう人物については、どこの図書館にいっても、伝記辞典よりはもっと中身の濃い充実した伝記を見つけることができる。そして、伝記辞典の執筆者も、そうした偉人についてはすでに書かれた伝記をすべて読んでそれを要約して解説するだけで満足しなければならない。

辞典の場合の制約ははっきりしている。だから、当然、レトリックを弄したり、批評的な論文を書くようなことは避けなければならない。指摘するだけでよいのであって、長々と解説することはできない。伝記辞典の執筆者は、目の前に実現不可能とわかりきっている理想を掲げているようなものなのだ。圧縮して述べるということは、伝記辞典執筆者の文体上の何よりも重要な美点であるばかりでなく、そのために他のすべてのものを犠牲にすべき美点なのである。何時間も努力してようやく事実を発掘しながら、それについて口をつぐまなければならないという結果になることも時としてある。だが、それでも満足しなければならないのだ。「この人物の出生や家柄については未詳」という文は私は断固として削るようにした。事実、半分位の人物の伝記にこの文が登場する傾向があったが、何もわかっていないのなら何も書かない方がより簡潔に思われるからである。もっとも、そういう否定的事実を発見する前に何巻もの書物を調べなければならないだろうが。

この場合も、あわれな伝記執筆者は、文体がはなはだ拙くなるという犠牲を払っても文章を圧縮しなければならないのである。100語も費やせば美しい文章になると思えるのに、それを10語で言い尽そうとして必死になって組み立てたおぞましい文章があることを私は嫌というほど承知している。短いドラマチックな装飾としてもってこいに思われる魅力的な逸話に出会うと思わずうなってしまうことがある。そして、心を鬼にしてそれを割り当てられた片隅に押し込めたことがある。しかも英語では特定の人物を 'he' や 'she' と表現しているとどうしても味も素っ気もない 'latter' や 'former' (「後者」や「前者」) という表現の助けを借りずにはいられなくなるが、この厄介な特徴に悲しくなるような戸惑いを覚えながらそうしたことが何度かある。

たぶん、内容を圧縮する訓練というのは必ずしも悪いものではないのだろう——近ごろの伝記をお読みになれば同感していただけるのではないかと思う。しかし、大事なのは本当に興味深い点を骨抜きにしないようにして圧縮することである。辞典の執筆者は内容を膨らませることはできない。でき得る限り、事実をもって事実を語らせなければならない。英雄的行為について筆者自身が賞讃の辞を述べることはできないが、読者が讃嘆の言葉を洩らしたくなるように文章を構成しなければならない。言葉を慎重に控え目にすることによって、かえって一層感動を高めることもできる。もっとも、そのような手法に訴える筆者は特別に鑑賞力のある読者を必要とするが。明らさまにはしゃいだ表現に陥らないようにしつつ、ユーモラスな面を際立たせるためには上手に物語らなければならない。「滑稽である」とわざわざ断わってやらなければジョークだと受け取ってくれない読者が大勢いることは身にしみてわかっているのであるが。また、繰り返し頭にたたき込まないとジョークだと受け取らない人もいるということも、嫌というほどわかっている。したがって、理想的な記述というのは、機械的に並べられる生のままの日付や事実に縮約してしまうという意味で圧縮されたもののことをいうのではない。目差すべき目標は、教養のある人であれば心から興味を抱くようなものは何であれ、すべて提供するということである。それはまったく読者次第のことではあるのだが。

伝記辞典の執筆者は、熟考の末ようやく得た自分の最も重要な考えを、胸の

内に秘めておくという犠牲を払わなければならないことがよくある。しかしながら、心の中に留めておくことは大切なことなのだ。単なる好古家と有能な研究者が、ある高名な哲学者もしくは聖職者の伝記を同じように限られた紙数の内で語らなければならないとする。何が本当に重要な事実であるかをわきまえている書き手と、どれもこれもみんな同じように重要な事実に思えてしまう書き手では雲泥の差がある。ところが、一見したところではどちらが書いたものも同じように無味乾燥な文のように見えてしまうかもしれないのだ。塩物業者会館会議で行われたある票決についての記述があるという理由で、一人の文芸批評家から物笑いの種にされた伝記があったのを覚えている。その批評家は、おそらくデニス（Denis）[31]やカール（Curll）[32]や、作家連中のつまらないけんかについてなら何でも知っていたのだろうが、塩物業者会館については聞いたこともなかったのだろう。そこで、誰がそんなつまらないことを知りたがるものか、そんな会議で誰が誰に投票しようが、それが一体どういう重要性があるのか、とかみついたわけだ。しかし、その会議は当時の宗教史上で極めて重要な位置を占めており、誰が誰に投票したかを知ることは、熾烈な論争でその人物がとっていた立場を明確に示すことになるかもしれないのである。つまり、執筆者は重要な事実を提供せねばならないのであるが、その重要性を発見するのは往々にして読者にまかせなければならないということである。しかし、執筆者が事実の重要性を認識するためには、説明できる以上に、はるかに広範な知識がなければならない。無味乾燥な好古家はしばしば重要な事柄を落し、瑣末な事柄を挿入する。事実をしてその意味を語らせるように、関連付けながら配列することができない。いうならば、たまたま裁判のゆくえを決定しそうな証拠を握っていながら、その意義が理解できないために証言できない証人のようなものである。だから、したがって、この二つの伝記は一見同じように無味乾燥に見えるかもしれないが、一方は、知識人にとって有益な示唆に富むものであり、他方は見かけ通り不毛なものといえよう。たとえば、聖職者の伝記はその当時の神学や宗教史を研究しており、したがって、ある時ある場所でとられた特定の行動や意見の表明のもつ意義がわかる人によって執筆されるべきである。限られた紙幅を無視するようなくだくだしい説明は慎まなければならないし、論

争を展開するようなことも慎まなければならない。異端の悪影響について長々と述べてはならないし、異端であることを証明しようとしてもならない。その時代の展開にその人物が占めた歴史上の位置を簡潔に指摘し、その人物の教義が当時主潮となっていた思想との関連でどのように分類されるべきであるかを要領よくまとめ、その教義が有能な著述家によってどのように判定されてきたか、また、現在専門家たちはどのような見解をとっているのかを指摘するだけで満足しなければならない。

以上のことはすべて、他の分野の伝記についても明らかに言えることであるが、伝記の執筆者というのは充分な知識をもちながら、なおかつその知識を使わずに取っておかねばならない、あるいは、その知識について有益なヒントを与えるだけで留めておかなければならないのだということを示している。ある書物が、何故、いかなる関連で読む価値があり、ある事件がさらに研究する価値があるかを付随的に示すこともたまにはないではないが、それにしても、知っている知識を出さずにいるということは往々にして実に苦痛なことであることは言うまでもない。

以上のような制約のもとで、上手にまとめられた伝記は記念本能も心から満足させるものであると思う。偉大な人物については『国民人名伝記辞典』以外のもので調べがつく。それほど名前が知られていない人物、大きな軍隊の下士官兵といった人物を調べる際にいつも役に立つのである。ただし、それは、その人物の生涯の物語そのものがおもしろいからというよりは、そうした人物が他の人物の生涯を叙述する時に登場したり、より広範な歴史を書く際の資料を提供するからである。しかしながら、二流の人たちではあるが、その生涯が知的な読者には示唆に富んでいる人たちもかなり大勢いるのである。そのような人たちの伝記は、墓碑銘ほど厳しい制約は課せられていないけれども、墓碑銘の長所と同じ長所を備えたものでなければならない。すなわち墓碑銘というのは、可能な限り少ない言葉で、その人物の人となりと、子孫に記念として伝えるべき事柄の要点だけを記さなければならないのだ。2、3ページでまとめる伝記はこの墓碑銘と同じ効果をねらわなければならない。そして、そうした人物のそれほど傑出しているとはいえない行為については、余裕のある限りすべ

てそれなりに表現してもかまわない。そういう場合が間々ある。あえて一例を挙げてみよう。

エリザベス朝このかた現代に到るも、様々な分野の伝記の中でも海の英雄たちの伝記ほど異彩を放っている伝記はない。私は『国民人名伝記辞典』の出来映えを批評しているのではなく、辞典の主たる目的を指摘しているだけなのだから、わが国の完全な航海史のようなものをページにぎっしりと詰め込んでみせている特定の伝記執筆者をここで誉めようというのではない。私は次のように言ってもよいのではないかと思っている。単なる文学好きの読者にとっては、理想的な航海士とは、サウジー（Southey）[33]の『ネルソン伝（*Life of Nelson*）』に描かれているような人物であると。あるいは、マリアット海軍大佐（Captain Marryat）[34]やスモーレット（Smollet）[35]の小説、キングズリー（Kingsley）[36]の『おーい西だ！（*Westward Ho!*）』、オースティン（Austen）女史[37]の『説きふせられて（*Persuasion*）』の中でもっと鮮やかに描かれている人物であると。われわれは偉大な提督たちについては、誰もが何がしかのことを知っているようだ。R・L・スティーブンスン（Stevenson）[38]が彼らについて魅力的な作品を書いているのだから。しかし、こうしたタイプの人物に魅力を感ずる人ならば、『国民人名伝記辞典』のページをめくって、マリアットや彼の部下のモデルとなったマイナーな英雄たちを次から次へと探し出していったとしても当然である。マイナーな英雄たちとは湾の中で敵船を捕獲したり、商船で軍艦に立ち向かった人たちである。ガリオン船を待伏せ、反乱を鎮圧し、フランスやアメリカのフリゲート艦と破れかぶれの一騎打ちを挑んだ人たちである。トラニオン家（Trunnions）やエーミャス・リー家（Amyas Leighs）、ピーター・シンプル家（Peter Simples）などの実在の人物たちは、架空の人物たちと同じくらい実に興味深い人たちである。彼らの多くは現在まで、いわば断片的に存在していたにすぎない。つまり、彼らは公文書や、様々な回想録や歴史書の中で偶然に言及されていただけなのだ。だから、その伝記はそうした文章をもとにしてまとめあげなければならない。とはいえ、再構築されたその伝記は、グリーニッジ・ホスピタルの回廊[39]よりももっと興味深いものとなる。彼らは、いわば、戦死した英雄の霊が迎えられるヴァルハラ神の小さな殿堂の中におさまったのだ。『国

民人名伝記辞典』によって、彼らは彼らにふさわしい所を得たのであり、また、名士たちの想い出をそれなりに回復したいというわれわれの願いも充分叶えられたのである。この点を疑う者は誰もいないと思う。(原註1)

そして最後に、以上のことは、この人名伝記辞典が読んでおもしろい作品でもあるという私の大胆なる発言を裏付けてくれるように思うのである。もちろん、一定の条件付きのことではあるが。一定の条件とはすなわち、すでにほのめかしたように、読者の方でもなすべきことがあるということだ。つまり、いわばこの巨大な植物標本集の中から乾燥した標本を取り出し、自分自身の想像力によってそれらがなにがしかの生命ある形と色を帯びるまで、足りないところを補ってやらねばならないということである。また、次のことも付け加えておかねばならないだろう。それは、私の優秀な友人たちの中には各巻が出るたびに全部通読してくれた者もいるのであるが、読者は拾い読みの技術も身に付けておく必要があるということだ(だからこそ、全部通読してくれた友人たちの好意がよけいありがたく思われるのだが)。雑多な内容を寄せ集めた書物のページをめくりながら思いがけずおもしろい記述を発見する喜びを知ってはじめて人は真の読書好きといえるのである。あたかも川の中の鱒が目の前を流れていくものならどんなちっぽけな変わったごちそうにでもその思いがけない魅力に誘われて飛びつくように。この点で、由緒ある雑誌「ジェントルマンズ・マガジン」[40]は魅力ある雑誌であるが、しかし、『国民人名伝記辞典』以上に獲物の豊富な猟場は見当たらないのではないかと思う。

私は時々まったく適当に中の1巻を取り出して、何が飛び出すだろうかと心待ちにしながらざっと拾い読みすることがある。すると、たとえば、たまたま私は、紀元50年以前に象の軍団を率いるローマ軍と戦ったカラドック(Caradoc)(ローマ人はカラクタクス(Caractacus)と呼んだ)に始まり、後にハウドン(Howden)卿となり1873年に亡くなった同名の紳士に及ぶ全世紀を見渡していることになる。あるいは、3世紀に生きた海賊でかつ皇帝のような人物、伝記の執筆者がその生涯の正確な日付と冒険については「必ずしも詳らかではない」と嘆いているカローシアス(Carausius)から、現代の伝記作家たちの情熱の炎によってその生涯のどんな小さな細部もないがしろにされずに描かれたカーライル(Carlyle)

に到るまでの全世紀を見渡していることになる。クヌート（Canute）がいる。この人物の生涯は『国民人名伝記辞典』では細部に到るまで考証するという現代の潮流が及んでいないのであるが、それは執筆者が途中で、逸話というのは嘘の丁寧な別名にすぎないことを発見したからである。中世の聖職者たちがいる。たとえば、尊者チャッド（Chad）であるが、スコットによれば狂信者ブルック（Brooke）がリッチフィールドで当然の報償を得たのはチャッドのお蔭だという。ウィリアム・ド・サン・カリーレフ（William de St.Carilef）についてはその人となりは残念ながらいまだに謎となっている。この人物が然るべき議論の対象となってから実に800年もたっているにもかかわらずである。やがて、明らかになることを期待しよう。われわれ大多数の者にとって、オーソドックスな歴史書の中の言い回しよりももっとはるかに印象的な例の有名な滑稽詩「猫に鼠に犬のラヴェル、こいつらが豚のもとでイングランド全土を支配していやがる」で知られているあのキャッビイ（Catesby）がいる。そして、もう一人キャッビイがいて、こちらの方は国王と議会を空中に吹き飛ばしてやったら国民はどう思うだろうか、これはすこぶる興味深い深遠な実験だと考え、なんとかやってみたいと思った人物である。テュダー朝時代には３人のキャサリン（Catherine）がいて、彼女たちはヘンリー８世を夫と呼ぶことに満足した。18世紀には、彼女たちに負けず劣らずの３人のキャロライン（Caroline）がいる。エリザベス朝の政治家であった偉大なバーリー卿セシル（Cecil）がいる。それに、ジェームス１世時代の暗黒の悲劇へとわれわれを導いてくれるサマセット伯のロバート・カー（Robert Carr）がいる。また、あの大きな内乱（清教徒革命）のことを想起させるのであるが、いまも「繰り返し平和を説いた」人物として通っているルシアス・ケアリィ（Lucius Cary）（フォークランド卿）がいる。ジョン・カータレット（John Carteret）（グランヴィル伯）の名前もみえる。この人物は陽気なハノーヴァー朝にあって「酔っぱらい政治」の頭目だった人物である。こうした人物の何人かは、標準的な歴史書に登場するくらい名の通った人物なのだが、どの人物も自宅に訪ねてみたくなるような人間的魅力を備えている。

このような人物とは対照的に、基本的には風変わりな行為をなしただけなの

だが、それがたまたま社会の奇妙な側面に光を当てることになった人物たちがいる。たとえば、正真正銘の恋のヒロインであるマーガレット・キャッチポール（Margaret Catchpole）がいる。彼女は馬を盗み、その馬を70マイルも駆って恋人のもとを訪れた。判事たちの同情をかったものの、オーストラリアに流刑となり、そこで一家を取り仕切るたくましい母親の一人となりオーストラリアのわれらの同胞たちの先祖となった女性である。バンフィールド・ムーア・カルー（Bampfylde Moore Carew）は自発的にジプシーになった人物で、一昔前のジョージ・ボロウ（George Borrow）[41]を先取りした人物である。この人物の生涯は昔の英国の道端や広場で放浪者たちがどんな暮しをしていたか、垣間見せてくれる。占星術師のジョン・ケイス（John Case）がいる。アディソンによると、この人物は、ドライデンが生涯に稼いだ以上の金を自分の詩で稼いだのだという。その詩はたとえば「この地に　ケイス博士住めり」といったたわいもない二行句から成るものなのだが、明らかに、詩というものが巧みな宣伝技術によって成功を収めた初期の例といえる。名士キャット（Cat）がいる。この人は「教養のある思慮深い」人で、彼の生涯をみると様々なクラブの初期の発展が明らかになる。新しいスタイルの肖像画によって彼の名は今日に伝わっている。現代の英雄ベン・コーント（Ben Caunt）の名前もみえる。懸賞ボクシング試合の最後の栄光の時代を体現した人物である。ここで私はコーントの伝記に新たな逸話を提供することにする。かつて私はミルトンが「アレグロ（Allegro）」と「ペンセローソ（Penseroso）」を書いた土地を訪れたことがあった。当地ではこの偉大な詩人の名前はとっくに忘れ去られてしまっていたようであるが、しかし、偉大なボクサー、ベン・コーントの胸像は英雄を崇拝する気持がいまだに失われていないことを示していた。その胸像の所有者が誇らしげに次のような話をしてくれたのである。コーントの息子が、コーントの死後彼の崇拝者の所へ件の胸像を荷車に積んで運ぼうとしていた。ところが、息子は途中酒場で「ソーダ水」でも飲んで一服しようと次の角をまがった時、荷車をひっくりかえしてしまったのである。そのはずみで胸像が、息子の上にころがり落ち、息子は即死してしまった。胸像は幸い無事だったので、いまだに村人たちの胸をあつく燃やしている、というのである。ミルトン同様、コーント

のような人物も人々の記憶に留められてしかるべきではあるまいか。少なくとも、トラファルガーやワーテルローの戦いのあった時代を代表する人物である。コーント以上に記憶するに値する当時の人物に勇敢なカルー（Carew）がいる（当時はハロウウェル（Hallowell）と名乗っていた）。この男は、偉大なネルソンといえども不死身ではないということをネルソン自身に思い出させるため（と思われていた）、オリエント号のメインマストで作った棺を贈った人物である。ナイル川の負け戦さの直後だったので、こんなものは不要だっただろうが。この時代についておそらく一層興味深い一面を垣間見せてくれるのは、リチャード・カーライル（Richard Carlile）の生涯であろう。この人物は宗教上の自由思想家で、近隣の大多数の人たちにとって腹立たしい説を広めたために９年以上にわたって投獄された。しかし、出版の自由という思想を広める上で、当時の誰よりも貢献したといわれている。私もその通りであると思う。ともかく、この人物の経歴は、出版の自由を求める最後の戦いの興味深い経緯をまざまざと示している。これとは異なるが、やはり大きな目的に殉じた行為を知りたいと思えばエドマンド・キャスル（Edmund Castle）の生涯を見ればよい。「セム語学に一時代を画した」人物である。彼は富裕な財産家であったが、辞典の編纂に１日18時間も19時間も努力することを選んだ――またまた辞典編纂家の登場である！　健康を失い、手足の骨折や挫傷に苦しみ（どうしてかは不明であるが）、目もほとんど見えなくなり、全財産を失ってしまった。彼は自分の不滅の成果を予約出版したのだが、わずかの報酬を得るために、購入者の戸口で何か月も待たねばならなかった。このあわれな人物は少なくとも晩年には多少経済的にも社会的にもましな生活を送ることができたのであるが、学問を志している者は同情を禁じ得ないであろう。しかし、この人物についてはこのくらいにして、さらに示唆的な名前を見てみよう。たとえば、カートライト（Cartwright）という名前をもつ人物には重要な機械の発明家、有名な歯科医、ピューリタンの偉大な牧師、ローマカトリックに帰依しつつあった主教、一時才気あふれた劇作家だった人物たちがいる。１巻だけ取り出して、ざっと拾い読みしてみたのだが、どの巻を通読してみても同じように、読めば読んだだけの価値があるのではないかと思う。私の言っていることが正しいかどうかは、一人ひとりの読

者に判断していただくほかないだろう。思慮深い読者は読めば必ずその中に、示唆に富む実例を見い出すことができるのではないかと私は思っている。もっとも、読者の側にもなすべきことがあるのだが。

「あなたは人間性に対するさぞや素晴らしい知識を身に付けられたことでしょうね」と皮肉っぽく私におっしゃる方がある。Bの項目の人物を調べているうちに、Aの項目の人物たちが私の頭の中から退散してしまうということがなければ、また、ある人物の生涯の主な行動を簡潔に記録したものが、その人物そのものに関する知識とまったく同等のものと言えるのであれば、おそらくそうかもしれない。しかし、次の点ははっきり言える。すなわち、ものを考える際に数限りない示唆を得てきたし、想像力を駆り立てる数多くのヒントを得てきたと。それらは、いやしくも思考を練り、想像をめぐらす人間には興味に満ちたものであったと。すなわち、もし私がマコーレーのような能力の持主であったら、彼のように歴史のパノラマを活き活きと眼前に思い浮べることができたはずだということだ。マコーレーはそうするために歴史の生の素材を吸収同化しなければならなかったのであるが。マコーレーはしばしば欠点を指摘されてきたので、今ならおそらく専門領域における自己のこの目覚ましい能力を第一に強調したいのではないかと思う。なるほどわれわれはマコーレーが見落した歴史の多くの局面を見たいとは思うけれども、しかし、マコーレーのように過去をはっきりと、あざやかに手に取るように見ることができればこれ以上素晴らしいことはないのではないか。私はそう思う。これは巨大な記憶力と鋭い想像力があってはじめてできることである。しかし、『国民人名伝記辞典』が上手に利用され、考えをめぐらしながら読まれ、事実という干からびた骸骨に絶えず肉付けし、血を通わせる努力をするならば、誰であれ、その人の持てる能力を最高度に発揮するのに何にもまして役に立つものと私は確信している。そして、記念本能は必ずしも充分に満たされないかもしれないが、この伝記辞典という回廊をぶらついてみれば、さほど際立たない人物についても活き活きとしたイメージを必ず数多く蓄積できるはずである。そういう人々のイメージも歴史を把握する際に役に立つのである。真に際立った一連の人物たちが、歴史という道程を物語る際に役に立つのと同じように。最後に、私が思い出してはし

ばしば慰めとしていることを付け加えておきたい。つまり、良い作品と悪い作品の差は大きいけれども、それがたとえ欠点のある業績であっても、何もなさないよりははるかにましだということである。

原註1

この点について『提督たち（Admirals All）』の著者も私と同意見であるということを知って嬉しく思っている。氏こそ『国民人名伝記辞典』のこの部分についてコメントされるにふさわしい方である。散文家の判断が詩人の判断によって裏付けられたことになり、私としては喜ばしい限りである。ただし、氏からこの辞典の編集について戴いた讃辞は、件の人物たちの伝記を執筆されたロートン（Laughton）教授に帰すべきものであることをお断わりしておかなければならない。

訳　註

(1) Sidney Lee（1859～1926）は*DNB*の22-26巻をL.Stephenと共同編集し、Stephenが健康上の理由で編集を降りた後は27巻から最終巻の63巻まで単独編集した。

(2) リーはアシスタント・エディターとして初期の頃からスティーブンを助けて編集にあたってきた。

(3) シドニー・リーの「国民的伝記」とは付録1註(45)参照。

(4) William Cowper（1731～1800）イギリスの詩人。ホメロスの翻訳家としてもしられる。引用されている詩は「英国伝記辞典に記録されている取るに足らない名前を見て」と題する詩の一節。

(5) イギリスの詩人トマス・グレイ（Thomas Gray1716～71）の詩、「田舎の墓地で詠んだ挽歌」からの引用。

(6) Simon Browne（1680～1732）イギリスの聖職者。

(7) Thomas Carlyle（1795～1881）イギリスの歴史家、思想家。『フランス革命』『英雄崇拝論』『フレデリック大王伝』など。

(8) O.W.Holmes（1809～94）アメリカの医者、詩人、文筆家。『朝の食卓の独裁者』など。

(9) Joseph L. Chester（1821～82）アメリカの系譜学者。チェスター大佐と呼ばれたのは、ペンシルバニア州知事の副官に任命されたことがあり、それが軍隊の位でいえば大佐に相当したため。

(10) George Washington（1732～99）アメリカの初代大統領。

(11) Henry Bradshaw（1831～86）イギリスの古事研究家、図書研究家。

(12) David Hume（1711～76）スコットランドの哲学者。『英国史』（全8巻）。

(13) スペインの古都。

(14) Thomas Babington (1st baron Macaulay) (1800〜59) イギリスの歴史家、政治家。『英国史』(全5巻)

(15) James A.Froude (1818〜94) イギリスの歴史家。カーライルに傾倒。『英国史』(全12巻)。

(16) 1066年イングランド王エドワード懺悔王が死に、義弟ハロルドが即位した際、ノルマンディー公ウィリアムが王位継承権を主張して侵入、ヘースティングの戦いでハロルドを破ってウィリアム1世として即位し、ノルマン朝を開く。

(17) Herbert Spencer (1820〜1903) イギリスの哲学者、進化論哲学の創唱者。

(18) James Boswell (1740〜95) イギリスの伝記作家、弁護士。『サミュエル・ジョンソン伝』は伝記文学の最高傑作のひとつ。

(19) Samuel Johnson (1709〜84) イギリスの作家、評論家。『英語辞典』を独力で完成。当時の文壇の大御所的人物。

(20) Edmund Burke (1729〜97) イギリスの思想家、政治家。『崇高と美の観念の起源』『フランス革命の考察』など。

(21) Oliver Goldsmith (1730頃〜74) イギリスの詩人、小説家、劇作家。『旅人』『ウェークフィールドの牧師』『負けるが勝』など。

(22) Walter Scott (1771〜1832) イギリスの詩人、小説家。活き活きとした描写の歴史小説を多く書く。『ウェイヴァリ』『アイヴァンホー』など。

(23) Charles Blount (1654〜93、イギリスの文筆家) は後に議会で問題となるような政治パンフレットを匿名で書き、それが出版許可を与える役人であるEdmund Bohun (1645〜99) の許可をすでに得ているように細工して、出版の許可を願い出る。許可は与えられ、ブラントが予期した通り議会で物議をかもし、焼却処分となる。ボウアンは責任をとらされ、役を解かれて投獄される。出版許可制度の無効さが痛感され、やがて廃止へといたる。マコーレーがその『英国史』の中で初めてこの陰謀の重要性を指摘した。

(24) Anthony à Wood (1632〜95) イギリスの好古家、歴史家。『オックスフォード大学の歴史と故実』。

(25) Horaitio Nelson (1758〜1805) イギリス海軍の提督。ナポレオンの艦隊をトラファルガー沖で撃滅するも、自身は戦死。

(26) ネルソンの「ウエストミンスター寺院か、さもなくば勝利を！」をもじったもの。

(27) ボズウェルはサミュエル・ジョンソンの、ロッカートはウォルター・スコットのすぐれた伝記を書いている。

(28) Joseph Addison (1672〜1719) イギリスのエッセイスト、詩人、政治家。定期刊行物「タトラー」、「スペクテーター」を創刊。模範的な散文のスタイルを完成。

(29) George G.Byron (1788〜1824) イギリス・ロマン派の代表的詩人。

(30) John Milton (1608〜74) イギリスの詩人。

(31) John Dennis（1657～1734）イギリスの批評家。ウイッグ党に属し、反対党を攻撃するパンフレットを書く。詩人アレキサンダー・ポープの風刺に応えてポープを風刺したものを書くが、逆にポープの風刺詩の中で手きびしく非難される。

(32) Edmund Curll（1675～1747）イギリスの書籍商。猥本、盗作本を平気で出版し、しばしば問題を起こす。詩人ポープと書簡集出版に関して起こした紛争は有名。

(33) Robert Southey（1774～1843）イギリスの詩人、文学者。『ネルソン伝』は一世を風靡した。

(34) Frederick Marryat（1792～1848）イギリス海軍の大佐。数多くの海洋小説を書く。

(35) Tobias G.Smollett（1721～71）イギリスの小説家。代表作『ロデリック・ランダム』はピカレスク（悪漢）小説の手法で描いた写実的海洋小説。

(36) Charles Kingsley（1819～75）イギリスの著述家。『おーい、西だ！』はエリザベス1世時代の海上冒険物語。

(37) Jane Austen（1775～1817）イギリスの女流小説家。『説きふせられて』は海軍士官を主人公の一人とした恋愛小説。

(38) Robert L.Stevenson（1850～94）スコットランドの小説家、詩人。『宝島』など海洋冒険小説を書いている。

(39) もとグリーニッジ病院であったが、1873年に王立海軍大学となる。その回廊には有名な提督たちの肖像画とイギリスの主要な海戦の絵が飾られている。

(40) 1731年創刊の雑誌。議会報道、エッセイ、短編小説などを掲載。1907年廃刊。

(41) George Borrow（1803～81）イギリスの小説家。イギリス国内、ヨーロッパを広く旅行し、その経験をもとにしてジプシーや無頼漢などを主人公とした小説を書く。ジプシー文学の確立者と呼ばれる。

付 録 3

アディソン伝

レズリー・スティーブン

訳注

これはL.スティーブンが文体及び体裁の見本例として各執筆者に示した項目の翻訳である

アディソン、ジョセフ
(Addison, Joseph) (1672—1719)

随筆家、詩人、政治家。父、ランスロット・アディソン(Lancelot Addison)(アディソン、ランスロットの項参照)と彼の最初の妻の息子として1672年5月1日、ウィルト県、エイムズベリーの近く、マイルストンの父の司祭館で生まれる。虚弱そうに見えたので、同日受洗。父がリッチフィールドの主任司祭になった時(1683年)、すでにエイムズベリーとソールズベリーの学校に通っていたのだが、リッチフィールドの学校に転校させられる。この学校で、ジョンソン(Johnson)が伝えるところによれば、「教師締め出し」騒動のリーダーとなる。すぐに今度はカルトジオスクールに移されるが、当時この学校はまだ財団設立の学校ではなかった。そして、この学校では3歳年下だったスティール(Steele)の憧れのヒーローとなる。近所でアディソンを見かけたスティールは、後年そのユニークな魅力を思い出として書き記している(「タトラー(Tatler)」235号)。アディソンによれば、父親は公平なやさしい人物であったので、子供たちの間にはお互いに仲良く助け合う気持ちが培われ、また父親にたいする尊敬の念が育まれたという。1687年アディソンは父親の出身校であるオックスフォード大学のクウィーンズ・カレッジに入れられる。彼の古典に関する知識はすぐに注目をひき、たまたま、彼のラテン語の詩を読んだ、当時カレッジのフェローで後に学寮長となったランカスター(Lancaster)博士は、1689年にアディソンのためにモードリン・カレッジの奨学金のひとつを得てやっている。もっとも当時、モードリン・カレッジの奨学金の多くは、ジェームズ2世がこのカレッジの特権を攻撃していたので誰も貰い手がいない状態になっていたのであるが。彼は1693年にM.A.の学位を取得。1697年には準フェローの地位を、1698年にはフェローの地位を得、1711年まで保持する。生徒を受け持つと、そのすぐれた学識、とりわけラテン詩に関する学識によって急速にその名声が高まる。自作のラテン語の詩もジョンソンによって高い評価を受けている。また、マコーレー(Macaulay)もミルトン(Milton)やブキャナン(Buchanan)のものを除けば、他のいかなる英国人の書いたものよりもアディソンの詩を好んだ。そうしたラテン詩の中には、リズウィックの平和に寄せるもの、モードリン・カレッジにあるキリスト復

活の祭壇画を歌ったもの、カルトジオスクールのハーネス（Hannes）博士やバーネット（Burnet）博士に宛てた詩で、ボウリング用芝生、気圧計、人形芝居を描写したもの、鶴と小人の英雄気取りの戦いを歌ったものなどがある。マコーレーは最後に挙げた詩の中に、スウィフト（Swift）の『ガリヴァー旅行記（*Gulliver's Travels*）』に登場する、宮廷内の誰よりも爪の幅だけ背が高いリリパット国王を先取りした描写を認めている。アディソンの古典文学に関する名声はまもなくロンドンの文壇にまで知れわたる。彼は当時英国文壇の大御所であったドライデン（Dryden）が乏しい収入を補うために古典の詩人を翻訳したことを祝福する詩を書く。ドライデンはこの詩を『雑歌集（*Miscellany Poems*）』（1693年）の第三部に挿入する。1694年に出版されたこの詩集の第四部にはヴェルギリウスの「農耕詩」第四部の翻訳と、教訓的な「英国の偉大な詩人たちについての解説（Account of the Greatest English Poets）」を寄稿している。最後に挙げた詩は、H.S.に捧げられている。H.S.とはヘンリー・サチェヴェレル（Henry Sacheverell）だといわれており、モードリン・カレッジ時代の同期生で、後に政敵として異彩を放つ人物である（しかし、ジョンソンの書簡によれば、これは同名のマン島人に捧げられたものだという。ニコルズ（Nichols）の『文学逸話集（*Literary Anecdotes*）』1巻113頁も参照）。1697年、ドライデン訳のヴェルギリウスの「農耕詩」について無署名のエッセイを寄稿する。これに対してドライデンは「『アエネイス』のあとがき」の中で「オックスフォード大学の才子アディソン氏」に高い敬意を表している。アディソンの「農耕詩」第四部の翻訳に言及してドライデンは「彼の〝ミツバチ〟たちのあとでは、わがミツバチどもは群れをなして蝟集しても虚しい限りだ」と述べている。

かくして、アディソンはプロの作家たちの中に地位を占めていくことになる。トンソン（Tonson）と交わした書簡（ミス・エイキン（Miss Aikin）出版）を見ると、この本屋はアディソンにヘロドトスの翻訳を引き受けさせていたことがわかる。H.S.に宛てた詩（1694年4月3日）の結びに示されているように、彼の学者としての立場からすれば、要請を引き受ける意志はあったかもしれない。ティクル（Tickell）によるとアディソンは謙遜の気持からこの件を思い止まったという。しかし、スティールは翻意したのは、後のハリファックス（Halifax）伯爵、チャールズ・モ

ンタギュー（Charles Montague）から後援者になる申し出があったためだといっている。ハリファックスはすでに自ら詩人としての最初の成功を収めており、文学者のパトロンたりたいと願っていた。当時は政治上のパトロンのみならず文学者に対するパトロンが登場し始めており、すでにハリファックスはコングリーブ（Congreve）のパトロンになっていた。コングリーブは当時日の出の勢いの詩人で、ドライデンは彼に、名声と文学界の王座を譲りつつあった。スティールによると（彼は自らコングリーブに確認しているのであるが）コングリーブはアディソンを、当時大蔵大臣だったモンタギューに紹介している。サマーズ（Somers）卿への献辞が付された「国王陛下に寄する（to the King）」（1697年）と題する詩はアディソンの政治上の正統派的信念と文学上の才能をいかんなく示している。続いて発表したリズウィックの平和についてのラテン詩（1697年）にはモンタギューへの献辞が付されている。モンタギューはこの若い詩人のためにサマーズを通じて年300ポンドの年金を得てやっている。そして同時にモードリン・カレッジの学寮長に宛てた手紙のなかで自分は教会に対して非友好的であるとされているが、アディソンをカレッジから引き抜くこと以外にはいかなる害をなすつもりもないと宣言している。この年金はアディソンに外国旅行をさせ、外交上の仕事につく能力を養わせるためのものであったようである。彼は1699年の秋に英国を発ち、パリに短期間滞在した後、フランス語を身に付けるためブロワに１年ばかり腰を落ち着けている。ブロワの修道院長は、アディソンはほとんど閉じ籠もって勉強し、食事を供にする教師たち――おそらくフランス語の――以外には誰とも会わなかったとスペンス（Spence）に語っている（『逸話集（*Anecdotes*）』184頁）。1700年にパリに戻った時にはフランス語が話せるようになっており、有名な著述家のマルブラーンシュ（Malebranche）やボアロー（Boileau）と語り合っている。ティクルによると、ボアローはアディソンのラテン詩にざっと目を通して、英国人が詩に対して無能ではないことを初めて知ったと語ったという。ボアローの影響はアディソンの後の著作物の中に読み取れるかもしれない。1700年12月（彼の「旅行記」には1699年と誤記されている）にフランスを去り、イタリアに向かっている。マルセーユを船出したのだが嵐に出会い、止むなくサボーナに上陸。そこから山越えをしてジェノヴァに至り、さらにミラノ

を経由してヴェネツィアに旅している。ヴェネツィアではカトーの死に基づいたグロテスクな芝居に空想力を大いに刺激される。サン・マリーノという小共和国を訪れ、慌ただしくローマを経て、ナポリに至り、そこで聖週を過ごす。ベスビオ山に登頂し、カプリ島に渡り、オスティア経由でローマに戻り、その年の秋を過ごす。そこからフィレンツェに向かい、モンスニ峠を越えて、1701年11月にジェノヴァに到着している。彼の書き残している言葉からすると、全旅程で彼が目にした光景はことごとく彼の愛してやまない詩人たちを彷彿させたらしい。ローマからナポリへ向かう道はホラティウスが、帰りはヴェリギリウスが道案内だと考えては一人悦に入ったらしい。彼はあらゆる領域のラテン詩の中から時に応じて詩行を活き活きと思い浮べることができた。ローマに保存されている古代の美術作品は、とりわけユヴェナリス、オヴィディウス、マニリウス、セネカの詩行の意味を明らかにしてくれたので喜んだ。古代キリスト教文化に対しては、あまりにも「寓話や伝説によって混乱してしまっているので、研究してもほとんど満足感は得られない」と短くコメントして、背を向けてしまっている。しかし、アディソンはディレッタントでは決してなかった。その学識は、古典の精神はゴシックの曖昧さに対するアンチ・テーゼであるとする同時代の教養を充分に吸収した人物にふさわしいものであった。自身は誠実な、献身的ですらあるキリスト教徒だったが、カトリックの儀式に対しては、理神論者のシャフツベリー(Shaftesbury)のように軽蔑の念を抱いていた。彼はローマカトリックの教義や恣意的な権力に抵抗する道徳を強調する。たとえばサン・マリーノの「未開の山」に住む農夫たちは幸福である、彼らは自由なのだからという。一方、専制君主たちはローマの豊かなカンパーニャの平野を荒野に変えてしまったと嘆く。こうした思いは、彼の詩の中でも最良のひとつに数えられる「イタリアからの手紙 (Letter from Italy)」の中に鮮明に表われている。この詩はアルプス越えの時、ハリファックスに宛てて書かれたものである。ハリファックスはアディソンが英国を出発して間もなくその職を追われていた。しかし、彼にはほかにも権力者の友人たちがいた。国務大臣になっていたマンチェスター(Manchester)とはパリで知り合いになっている。だから、彼はウジェーヌの野営地で英国の情報部員として働くという約束が果たされるのを期待しつつ、

ジェノヴァで3か月間待っていた。ところが、それどころか、ほどなくウィリアム(William) 3世の死去と、彼の政界の友人たちが政権から排除されたという報せをうける。アディソンはまだたった1年分の年金しか受け取っていなかった。当てにできるものは友情しかなかった。しかし、旅は続け、1702年の夏にはウィーンに到着している。ここに滞在中にメダルについての優雅な対話篇を書いている。この作品にはあまり愛着がなかったようで、生前には出版していない。冬にはウィーンを去り、ハンブルクを訪れる。そして、夏にはオランダに到着している。そこで、父の訃報を受け取る。1703年の9月頃、英国に帰国する。

アディソンがどうやって金を得ていたのかは、まったく不明である。スウィフトは「デラニィに関する中傷(Libel on Delany)」の中で、アディソンは外国で困窮しており、「領主の巡回家庭教師」をしていたと記している。スウィフトは皮肉を述べているのであり、彼の言葉には裏付けはない。オランダでアディソンに会った本屋のトンソンは、「誇り高い」サマセット(Samerset)公爵から、公爵の息子の家庭教師になるようアディソンに提案してもよいという許しを得ていた。この交渉は不首尾に終わったが、それは、1年100ギニーでは少ないとほのめかしてアディソンが公爵を怒らせたためらしい。ともかく、アディソンは英国に戻り、1年以上の間、職のないまま過ごした。しかしながら、政党の指導者たちとは昔ながらの友情を保っていた。また、国外在住の英国人名士の友人も何人かいた。とりわけ、後にレディ・メアリー(Lady Mary)の夫となるエドワード・ウォートリー・モンタギュー(Edward Wortley Montagu)、ウィーン駐在の外交官でハリファックスの友人の一人であるステプニィ(Stepney)と親交を結んでいた。アディソンは有名なキットキャット・クラブの会員になる。このクラブには大物ウィッグ党員は全員加入していた。アディソンは、彼らの乾杯の時のグラスに刻まれているマンチェスター公爵夫人を讃える言葉のひとつを書いている。政権がウィッグ党のほうに傾き始めた時、アディソンが報いられたのは当然であった。バジェル(Budgell)が語るところによれば(『ボイル家回想録(*Memoirs of the Boyles*)』1732年、151頁)、ゴドルフィン(Godolphin)はブレンハイムの戦い(1704年8月13日)を祝賀する詩人を求めていた。そこで、ハリファックスに相談する。この辺はバジェルは必ずしも詳らかにはしてい

ない。ハリファックスは、充分な報酬が与えられるなら有能な詩人を紹介することができると答えている。そこでゴドルフィンは、当時、大蔵大臣をしていたボイルをアディソンのもとに派遣。彼は粗末な宿屋に滞在していたアディソンに会い、依頼料としてロック(Locke)の死によって空席になっていた訴願局長の地位を与える。「戦役(Campaign)」と題する彼の詩は好評を得、その報償として国務次官に昇進している。ティクルによると、この詩が完成した時ゴドルフィンは「天使という耳触りのいい直喩」が目にはいるや、ただちに局長の職を与えたという。この逸話はアディソンがパトロンの心を見抜いて成り上がった凡庸な物書きであったと決め付けたい人々によってさまざまに潤色されてきている。詩よりも競馬のほうに興味があったゴドルフィンであるから、支持者を昇進させて重要な政治家を満足させることは大いにありえても、一篇の詩の著者に褒美を与えることはあまりありそうもないことである。いずれにせ、この詩と直喩は大きな成功をもたらした。この詩は、この種のアディソンのすべての作品同様、詩的天才といわないまでも、巧みな才能と詩的感性を示している。ハリファックスが書いたボインの戦いについての同様の詩よりはすぐれている。が、当時において、とりわけ傑出した出来のものだったわけではない。マコーレーは馬鹿馬鹿しいくらい神話じみてはいないと評しているが、これはハリファックスやその他の詩人たちにも等しく当てはまる程度の賛辞にすぎない。マコーレーは天使の直喩が大きな効果をあげたのは1703年の嵐をほのめかすからだと註記している。ジョンソンは同じ主題を10人の生徒に与えれば、8人の生徒が天使の直喩を使っても驚くにはあたらないという、マドン(Maddon)博士の言葉を引用している。ウォートン(Warton)は冷淡にこの詩を「韻を踏んだ官報」(『ポープ論(*Essay on Pope*)』1章29頁)と呼んでいる。しかし、官選の詩の中では質のいいものであったために、文学上でも政治上でもアディソンの株はあがった。政治の世界で昇進していったということは、権力のある友人たちが彼に敬意を払っていたことを示している。1704年から1708年までは訴願局長をつとめ、1705年にはチャールズ・ヘッジス(Charles Hedges)卿のもとで国務次官を拝命している。この職にはトーリー党員のヘッジスがウィッグ党員のサンダーランド(Sunderland)に道を譲るまで留まった(1706年12月)。1706年には、ハ

リファックスに随行して、後にジョージ（George）2世となるハノーヴァー選帝侯にガーター勲章を授与する表敬使節団に加わっている。1709年、新任のアイルランド総督ウォートンの秘書となる。書記官の職で、年収は400ポンドに引き上げられる(『ドレイピアの書簡(*Drapier's Letter*)』の第四参照)。しかし、いかなる公務であれ、彼から文学に対する関心を奪うことはなかった。『イタリア雑感（*Remarks on several Parts of Italy*）』は1705年に出版され、好評を博したため、1718年に第2版がでる前に値段はもとの4倍、5倍にはねあがった。後に「スペクテーター(Spectator)」18号のなかで詳述する原理にしたがってオペラ「ロザモンド(Rosamond)」を執筆。わけのわからないイタリア語のナンセンスを音楽で聴くというのは、当時の常識からするとまったく馬鹿げたことであった。そこでアディソンは英語で詩を書く。これは叙情性と独特のユーモアにあふれた詩だったが、上演は不成功に終わる。もっとも、後にアーニィ（Arne）が新しい曲をつけて成功している。同じ頃、スティールが芝居「優しき夫（Tender Husband）」を書くのを手伝っている。これはスティールがいつもの気の良さから引き受けた義理の仕事だった。スティールはこの芝居をあたたかい言葉でアディソンに捧げている。スティールは後に「最も観客に受けた台詞の多くはアディソンの書いたものだった」(「スペクテーター」555号）と明言している。そして自分の作品に対する最良のコメントはアディソンが自宅あるいは外国にいるということであろうといっている。

アディソンのもつ社交性も成功の一助となっている。洗練された個性、謙虚さ、温雅さによってパトロンたちや多くの文人仲間から敬慕されていた。文人仲間には対等の立場の者もいたし彼が庇護してやっている者もいた。スウィフトとは早くから親交を結んでいた。アディソンはイタリア旅行についての著作(現在はフォスター文庫所収)を「最も気持ちの良い仲間、最も信頼する友人、同時代の最も傑出した天才へ」と記してスウィフトに献呈している。スティールはアディソンの最も熱烈な崇拝者だった。スティールほど有名人ではないがティクル、アンブローズ・フィリップス（Ambrose Philips)、ユースタス・バジェル(Eustase Budgell)(従兄)、ダヴィナント(Davenant)、コロネル・ブレット（Colonel Brett)、ケアリィ(Carey)たちはアディソンに対する共通の崇敬の念から、小さなサー

クルを結成していた。ポープ(Pope)によると、アディソンは多くの時間をこうした友人たちとコーヒーハウスで過ごすのが常だったという。友人たちとあまりにも長時間コーヒーハウスに入り浸ったことが彼の健康に障ったのではないかとポープはみている(スペンス:199, 286頁)。これは主に「スペクテーター」時代のことである。こうした会合はバトン(Button)の店でもたれた。彼の店はウイル(Will)の店に次いで当時才人たちのたまり場になっていた。バトンはアディソンとウォーリック(Lady Warwick)夫人の召使をしていた人物で、アディソンの後ろ盾を得て1711年にコーヒーハウスを開店したのである。アディソンはついついその当時の飲酒の習慣に屈して飲みすぎたことがあったとよくいわれる。手紙その他にも自分の意志力の弱さを自ら責めている部分が散見される。「タトラー」の註(1797年版、第4巻300頁)はアディソンは「カナリア諸島産の葡萄酒とバルバドス水」を飲みすぎて命を縮めたと報告している。また、同誌はトンソンが酒を飲むうまい口実をアディソンに教えては彼に取り入っていたと報告している。だが「タトラー」(252号)の中のスティールの次の言葉が真相のように思われる。すなわち、アディソンについてはっきりしていることをいえば、と次のように述べている。「アディソンを酒場につれだすことはめったにできない。しかし、彼はいったん酒杯を手に取ると周囲に気を配り友達のようになり始める。そういう時、いままで隠れていた彼の素晴らしい面が次から次に表にでてきた」と。実際、アディソンは当時の基準からいえば決して不節制な方ではなかったが内気さや落ち込んだ精神に打ち克つために時として酒という刺激に助けを求めることがあった。酒によって氷がひとたび溶けると彼の口から流れ出てくる魅力にあふれた会話を直に耳にしたのは一人スティールのみではない。アディソンのことを口にすれば必ず賛嘆の言葉をもらしたスウィフトは、よく共に過ごした夕べでは二人とも水いらずで語り合いたがったものだったと記している(ディレイニ(Delany):『観察』(*Observations*)32頁)。メアリー・ウォートリー・モンタギュー夫人はアディソンは世界中で一番素敵な仲間だったと言い切っているし、ヤング(Young)博士はアディソンがひとたび内気さを乗り越えてしまうと「彼の口から高貴な思想や言葉が奔流のように溢れ出た」と語っている。ポープでさえ彼の会話の傑出した魅力について述べている(スペンス:

『逸話集』232,335,350頁)。最も印象的な事はスウィフトの「ジョンソン夫人の人柄 (character of Mrs.Johnson)」の中に書き留められている。スウィフトが書いているのは、「間違った意見をもっていても親しい」人々に意見を合わせようとするアディソンの態度を夫人が誉めていたということである。こういう態度にたいしてポープは自作の詩の中で好意的ではない意見を述べている。

気のない誉め方をし、大衆の色目に迎合
軽蔑するのではなく、軽蔑することを教える

アディソンの感受性の強い内気な性格は粗暴に意見を言い合う社交界には向いていなかった。しかし、気の合った友人との会話や大勢の会合の席で彼が逃げ込んだ皮肉の沈黙では類い稀な魅力を発揮した。

この魅力は彼がその本領を発揮した著作物の中にも窺えるかもしれない。アディソンはすでに政争に首を突っ込んでいた。1707年「このたびの戦争の現状 (Present State of the War)」と題するパンフレットを出版し、この機会をとらえてフランスとスペインを最終的に切り離そうと国民に強く勧告している。そしてフランス国民の貧窮と悲惨を力説し、彼らが最後にはそれらに打ち克つよう励まそうと強調している。1708年11月にはロストウィシール選出の下院議員になっている。1709年12月20日その選挙が無効とされた時ウォートン (Wharton) の影響力 (スペンス:350頁) や同僚のJ.ラシュアウト (Rushout) 卿のおかげでマームズベリ選出の議員になっている。J.ラシュアウト卿の弟にはかつてオックスフォードで家庭教師をしたことがあった(エイキン前掲書)。生涯彼はその議席を維持した。スウィフトは1710年の再選の時のことを、「楽勝でなんの反対もなかった」「その気があれば国王に選出されるのも難しくはなかっただろう」と記している(『ステラへの日誌 (*Journal to Stella*)』1710年10月8日)。しかし、控えめな性格から相変わらず口数は少なかった。1710年秋、ウィッグ党内閣が失脚した時、「ウィッグ・イグザミナー (Wig Examiner)」に彼らの擁護論を書いている。もっともそのうち掲載されたのは5本のみであったが (1710年9月14、21、28日、10月5、12日)。それらの中には過激な論調のものも含まれており、アディソンにしては「イグザミナー」を辛辣に攻撃しているものもある。「イグザミナー」は当時ハーレイ (Harley) とSt.ジョン (St.John) の機関誌でスウィフ

トはまだ編集に関与していなかった。アディソンは、しかしながらしばらくの間、積極的政治活動から身を引き、生涯で最高の成功を収めることになる。ウィッグ党の失脚によって彼は官職を失っている。ウォートリー・モンタギューによると（1711年7月21日）12か月の間に年収2000ポンドの官職と、インドにある14000ポンドの不動産と愛人を失ったという（エイキン：2章44頁）。最後に挙げられている不運については現在もなにもわかっていない。しかしながら、同年にウォーリックシャーのビルトンに10000ポンドの不動産を購入しているのは奇妙である（アイアランド（Ireland）：『エイボン河の美（*Beauties of the Avon*）』70頁）。この土地は1735年当時、年収600ポンドの価値があった（『エジャートン手稿（*Egerton MS*）』1973, f107）。彼がこの買物ができたのは弟のガルストン（Gulston）の財産を相続したからだと一般にいわれている。この弟はアディソンの力で「ダイアモンド」ピット（Pitt）の後任としてセント・ジョージ要塞の長官に任命されていた（「ウエントワース・ペーパー（Wentworth Papers）」75,6）。大英博物館に保管されている書簡を見るとこれが間違いであることがわかる（『エジャートン手稿』1972）。1709年10月10日に死んだこの弟は、アディソンを遺言執行者と残余財産受取人に指名している。しかしながら、非常にあやふやな、また非常に遠隔の地に残された不動産を相続することは極めてやっかいなことであった。管財人たちは非常に怠慢であった。彼らの一人はさらし刑に値する、直接本人にそういってやりたいとアディソンはもらしている。最終的に換金された金額が届いたのは1716年になってからのことであった。そして多額の借金と他人への遺贈分を差し引くと、アディソンのふところに入ったのは、もともと35000ポゴダすなわち14000ポンドの価値があった遺産の十分の一であった。この金額は、確かにアディソンが手紙のなかで言及している金額である。とはいえ、彼は貧乏ではなかった。貸間を所有していたほか、チェルシーの近くに隠居所をもっていた。スウィフトはそこで食事を共にしている（『ステラへの日誌』1710年9月18日）。この隠居所はかつてはネル・グウィン（Nell Gwyn）のもちものであった。そこから彼は野原を横切って、当時レディ・ウォーリックが所有していたホランド・ハウスまで歩いていくことができた。1713年に悲劇「カトー（Cato）」の莫大な利益を放棄しているし、1711年にはすでにモードリン・カレッジのフェローの地

位を退いていた。

スティールはアディソンよりももっと貧乏していたが、1709年4月12日に「タトラー」を創刊する。その頃アディソンは公務に追われ、またダブリンに向け旅立ったばかりだった(ダブリン着4月21日。スウィフトへの1709年4月22日付手紙)ので、この事業には関心を示していない。4月23日号に載った彼自身の言葉を借りて言えば、アディソンはスティールの手腕を買っていた。しばらく後に2、3の文章を寄稿するが、彼の論文が頻繁に掲載され、かつ重要な位置を占めるようになるのは81号(10月15日号)以降である。ロンドンで過ごしたその年の冬は頻繁に寄稿しているし、1710年も、春と夏はダブリンで過ごしたため中断しているが、後半は再び頻繁に寄稿している。アディソンの文章の影響力は絶大であった。最終号の前書きでスティールは言っている、「強力な隣国に助けを求めて苦境に喘いでいる君主のように、私は自分の力ではもうやっていけなかった。ひとたび彼に助けを求めるや、彼に頼らなくてはもうやっていけないことがわかった」。アディソンは41編の文章を単独で執筆し、34編をスティールと共同で執筆している。「タトラー」は最初はニュース記事と劇評、短いエッセイ、古い意味でのノヴェルなどを掲載していた。アディソンが協力するようになってからはエッセイの比重が大きくなり、ニュース記事は減少していった。スティールの最終号の謝辞は、アディソンが書いたどちらかというとまじめな宗教的内省や寓意的理想像が当時人気があったことを意味しているように思われる。155号の「政治のうわさ好き (Political Quidnuncs)」、216号の「名人の意図 (Virtuoso's Will)」、254号の「冷たい言葉 (Frozen Words)」のような純粋なユーモアに富んだエッセイは、間もなく一層目覚ましく発揮されることになるアディソンの比類なきユーモア精神を示している。

「タトラー」は1711年1月2日をもって最終号となった。「スペクテーター」はその年の3月1日に創刊されている。毎日発刊され、1712年12月6日の555号まで続いた。「スペクテーター」は、政党間の争いが熾烈な時代にあって、現実の政治に巻き込まれないよう慎重に一歩距離をおいていた。「タトラー」が徐々に作り上げていったスタイルをお手本にしつつ、「スペクテーター」は専らエッセイを主体にした紙面を作っていった。そして、いまだかつてない大成功を収める。1712年4月に課せられた印紙税によって売り上げ部数は半減

するのであるが、最終号のスティールの言によると毎週支払った印紙税は20ポンドだったという。これだと毎日1600部しか売れなかったことになる。アディソンは10号で売り上げはすでに3000部に達したといっている。『ビオグラフィア・ブリタニカ（*Biographia Britannica*）』によると、号によっては一日20000部売れたという。スティールは最初の合本版は9000部だったという。大英博物館に保管されている合意書によると(Add.手稿、21110)、アディソンとスティールは折半という条件で、数巻から成る最初の合本版をバックリィ(Buckley)という出版業者に575ポンドで売っている。正確な数字がなんであれ、ともかく「スペクテーター」は英文学において画期的成功を収めたのであり、その後続出した数々の定期刊行物によってこの世紀の終わりまで厳格に踏襲されることになるひとつのスタイルを築き上げたのであった。

アディソンは「スペクテーター」に274本のエッセイを執筆している。一般に「スペクテーター」の成功はアディソンに負うところが大であるといわれている。ジョンソンは、アディソンが半分も執筆していなければその素晴らしさは半減していただろうといっている（ボズウェル（Boswell）：1776年4月10日)。マコーレーは、アディソンの執筆した最低の出来のエッセイでも、彼の補佐たちの最良のものと同じ位すぐれているといっている。この判断についてはフォスター（Forster）氏が疑問を投げ掛けているし(『スティール論(*Essay on Steele*)』参照)、ハズリット(Hazllitt)も異なった見解を抱いている（『ラウンド・テーブル（*Round Table*）』6章及び『コミック・ライター（*Comic Writer*）』第5講)。ハズリットはスティールのほうが垢抜けした上品なアディソンよりも心情に訴えるものをもっていると考えている。しかし、ともかくアディソンのエッセイが最も広範な人気を獲得していたことは純然たる事実である。この事実は「スペクテーター」に言及される時、いまだに想起される事実であり、18世紀のあらゆる批評家が称賛した事実である。ジョンソンはアディソンの文体は「中庸を得た文体のお手本」であると断言し、「親しみやすいが卑俗に流れない、品格があるがこれみよがしなところのない英語の文体を身につけようと思う者はだれでもアディソンの著作を日々学ばなければならない」と述べて、彼のアディソン伝の結びとしている。このジョンソンの言葉は、表現の仕方には様々な違いはあるが、ケイムズ(Kames)、ブレアー(Blair)、

ハード(Hurd)、ビーティー(Beattie)など当時の批評家の説を述べたに過ぎない。ランドー(Landor)は、アディソンの文体は「称賛されてはいるが、その称賛の仕方は非常にあやふやで不正確である。彼の文体には恋人のはにかみのようなところがあるのだ。大人になりきっていない美しい乙女の上品なはにかみが。人々は涼やかな心地よい流れを感ずるが決してその源を探らない」といっている(ガーネット(Garnett)氏のシェリー(Shelley)夫人宛て書簡)。アディソンの最大の功績はサー・ロジャー・ド・カヴァリー(Sir Roger de Coverley)という仮想の人物を作り出したことであることは広く認められている。サー・ロジャーは軽妙な軽口というベールをまとわされているが、アディソン自身のやさしい心根を体現している人物である。まずスティールが「スペクテーター」の2号でこの人物を簡潔に描写する。1711年の7月にアディソンはこの人物が田舎の別荘を訪れるという設定のもと15回のシリーズで詳しくその人柄を描写している。スティールがサー・ロジャーについて時々書いたものが6編あるが、その中で重要なものはアディソンが書くことを許したサー・ロジャーの恋物語に関する2編だけである。そのほかバジェルが狩猟パーティーについて1回書いている。その後は、1712年1月にプリンス・ユージェイン(Eugene)に会うためにロンドンにやってくるという設定になるまでサー・ロジャーは登場しない。アディソンは3月18日にサー・ロジャーをウェストミンスター寺院に連れていっている。3月25日にはフィリップ作の劇「悩める母(Distressed Mother)」にともない、5月20日には大衆遊園地のヴォークスホールに案内している。その後スティールはサー・ロジャーを(アディソンが当惑したことには)町の女に紹介している(6月20日)。10月23日にアディソンは彼の死を描写している。「誰も彼を殺さないだろうから僕が殺した」とアディソンはバジェルに語っている(バジェル:『みつばち(*Bee*)』1章27節)。アディソンが書いたサー・ロジャーもの以外のものは、ユーモアもの、批評もの、厳粛な問題を扱ったものの三種類に分類できよう。ユーモアものの中には、当時の社会の様々な愚行に触れた文章が含まれる。そうした文章にはしばしばおだやかな諧謔に満ちた絶妙な表現があふれている。中でも一番人気を博したのは、スティールの鷹揚な慇懃さほど爽快ではないが、やはりへり下った態度で女性の様々な欠点や社交上の愚行をあげつらったも

のである。批評の中で最も重要なものは、1712年1月5日から3月3日まで17回にわたって毎週土曜日に連載されたミルトンの『失楽園』に関するものである。その批評原理は時代遅れであり、下された判断はしばしば単に時代遅れという以上にひどいものであるけれども、また必ずしもオリジナルなものとはいえないけれども、ミルトンの天才に与えられていた極めて高いオーソドックスな評価に対して、当時最も権威あるお墨付きを与えた批評であったといえるかもしれない。1711年5月21日と25日に出た民謡チェヴィー・チェースに関する2編の論文はまぎれもない詩的感性を明確に示すものとして有名である。また、当時文学の蔑ろにされていた分野に一般の人々の注意を引き付けたことでも有名である。同月に出た「ウィット（Wit）」についての6編の文章、1712年の6月と7月に出た「想像力の楽しみ（Pleasures of Imagination）」に関する11編のさらに野心的な連載はアディソンを審美哲学者とも呼び得る根拠ともなっている。その哲学的側面は実際には皮相なものであるが、その文体の卓抜さと、的確な判断力によって、一時的にせよ高い名声を博している。1864年にダイクス・キャンベル（Dykes Cambell）氏はグラスゴーで「アディソン氏がスペクテーターに寄稿せしエッセイの断章：氏の原稿帳より初めて印刷されしもの」と題するものを（私的に）印刷している。このアディソンの原稿帳は1858年に売りに出されたときキャンベル氏によって購入されたものである。その内容から、また筆跡から、この中には自らの手で注意深く推敲され、やがて同一の主題を扱った「スペクテーター」掲載の論文へと結実していく三つのエッセイ――「想像力について（Of Imagination）」「嫉妬について（Of Jealousy）」「名声について（Of Fame）」――が含まれていることがわかる。すなわち、170号、と171号（「嫉妬について」）、233、236、237号（「名声について」）、411～14号、416～18号、420、421号（「想像力の楽しみ」）である。三つともアディソンの文章の構成の仕方が明瞭にわかって興味深い。より厳粛な問題を扱った文章の中で最も注目を引くのは、1711年10月20日から始まった土曜日ごとの連載ものである。それらは、もともと説教を意図して書かれたのではないかと想像している人もいる。また、これらの文章はマンデヴィル（Mandeville）の言葉だとされている。アディソンは「タイ鬘をつけた聖職者」だという言や（ホーキンズ（Hawkins）：『音楽史（*History*

of Music)』315、316節)、アディソンは「常に心の中では自分は聖職者だと思っていた」(スペンス:200頁)というトンソンの言を裏付けているともいえる。さらに、1712年の秋にいくつか発表された「聖歌」(その中の二つは間違ってマーヴェルのものとされている)には、アディソンの散文に多くの魅力を付与しているおだやかな敬神の念が表われているばかりでなく、最もすぐれた詩人としての力量も表われているといえる。

「スペクテーター」は1712年12月に終刊した。今や名声の絶頂にあったアディソンは新たな試みに取りかかる。トンソン(スペンス、46頁)とシバー(Cibber)は、アディソンが1703年に旅から帰った時、すでに悲劇「カトー」の最初の四幕の原稿を見ていたと打ち明けている。マコーレーがいうように、この劇はアディソンがヴェネツィアで上演されているのを見てヒントを得ていたのかもしれない。ともかくその頃アディソンはこれを舞台にかけるよう懇請されていた。それでヒューズ(Hughes)に第五幕を書くよう頼んだのち、自ら筆を執ることを決意し、スティールによると1週間で書き上げたという(「鼓手(Drummer)」の前書き)。さらに、劇場を満員にする計画を立てる。もっとも、アディソンの絶大な人気によって超満員になったのかもしれないが。上演は1713年4月14日にドルーリー・レイン劇場で行われている(ジェネスト(Genest):2章512節)。ただし、劇としての難点があったことは否めない。ラブ・シーンが首尾一貫していないし、劇の大部分が劇的効果をねらう演説から成り立っている。もっとも、それらの演説はアディソンのセンスによって度を越さない程度には止まってはいるが。そして、陳腐なところもあるが、今でもよく知られた洗練された名台詞となっているのである。ともあれ、この劇は未曽有の大成功を収めている。ウィッグ党もトーリー党も口をそろえてアディソンを讃えたばかりでなく、アディソンの自由についての台詞を口にする権利を欲しがった。アディソン自身はひとつの政党に肩入れする意図のないことを明言している。トーリー党の党友であったポープは雄弁な前口上を書いたし、ウィッグ党の支持者であったスウィフトはアディソンとは長い間疎遠になっていたのに自らリハーサルに立ち会っている。ポープがカリル(Caryll)に語っているところによると(1713年4月30日)、ボーリンブローク(Bolingbroke)はカトー役を演じたブース(Booth)を使いに送って、アディソンに「永遠の独裁者(マールボロウ

のことをほのめかしている）から自由の大義をかくも見事に守った」ことに対して50ギニーを贈っている。ポープによると、ウィッグ党も同じプレゼントと同じようにうまい文句を考えていたという。ポープは後にアディソンが第一王女に「カトー」と共に献呈した（1714年11月）詩集の中で政治的庇護を懇請したらしいことを冷笑している(『アウグストゥスへの書簡（*Epistle to Augustus*）』215節)。しかしながら、いかなるトーリー党員も「カトー」の中で強調されている政治上の行動原理を実行することをためらう事はできなかった。あらゆる政党人は高らかに拍手喝采を贈ったのである。20日間連続上演され、千秋楽となったのは5月9日であった。5月4日には第4刷が出ており、その年のうちに8回増刷されている。3人のマネージャーたちはその時期までにそれぞれ1350ポンド儲けており、さらにオックスフォードでの続演で150ポンド儲けている。これは前代未聞の収益であった(シバー：『アポロジー(*Apology*)』377、387頁)。この劇はフランス語、イタリア語、さらにドイツ語に翻訳されている。イエズス会は過ぎ越しの祝いに学者たちが上演できるようにラテン語に翻訳している。ヴォルテール(Voltaire)はこれは最初のまずまずの出来の英語の悲劇であると誉めている。そして、その言葉使いの持続する優美さと新奇さに言及している。ただし、劇としての弱点を非難し、シェイクスピアによって是認されることになった破格用法と不規則性がアディソンにも残っていると指摘している（『ブルータスとザイール（*Brutus and Zaire*）』の冒頭におかれた「ボーリンブロウクとフォークナーへの手紙（Letter to Bolingbroke and Falkner）」；『ルイ14世伝（*Life of Louis* XIV）』及び『英国書簡（*Letter on the English*）』）。「カトー」は事実、前年にフィリップが「悩める母」の中ですでにお手本を示していたが――これはラシーヌ（Racine）の「アンドロマック（Andromaque）」の翻案であった――、英国の劇の中で、どの劇よりもフランス演劇の規範を全面的に受け入れたものであった。しかしながら、薄れつつあったとはいえシェイクスピアの影響は完全に消えていたわけではない。ロウはシェイクスピアの文体をまねて何本か悲劇を書いているし、アディソン自身も(ド・クウィンシー(De Quincy)は奇妙なことに彼の『シェイクスピア伝（*Life of Shakespeare*）』の中で正反対の主張をしているのであるが）しばしばシェイクスピアについて高い賛辞を書き残している(「タトラー」41号、「ス

ペクテーター」25、39、40、61、160、419、592号参照)。

ジョン・デニス(John Dennis)は「カトー」の劇的構成のまずさについて、的外れではないものの、意地の悪い攻撃をしている。構成のまずさは主としてアディソンが三一致の法則を守ろうとして生じたものである。デニスの攻撃は、ジョンソンのアディソン伝に全文が引用されている。ポープは「ジョン・デニスとかいう頭のいかれた人物の野蛮なる言説」を書いてアディソンを擁護している(ポープ自身の腹癒せのための仕返しだったかもしれない)。アディソンはポープのこの攻撃については一切自分は共同していないことと、そのやり方を否定する旨をデニスに伝えている。これは、デニスとアディソン自身の人柄によるものであったが、ポープを悔しがらせた。ポープはすでにアンブローズ・フィリップとの激しい口論に巻き込まれており、バトンのコーヒー・ハウスでアディソンを取り巻いていたすべての連中に腹を立てるようになった。ポープが1715年ホメロスの最初の4巻を出版した時、同時にティクル訳の『イリアッド』が出た。ティクルはポープのライヴァルになる意図は毛頭ないことを明言し、この仕事が自分よりも有能な人物によってなされることになったのであるから、自分は手を引く旨宣言している。そして、読者に了解してもらうためすでに取り組んでいた『オデッセイア』の翻訳の断片だけを出版した。ポープは自ら報告している会話の中で、アディソンに対して自分はホメロスを独占するつもりはないことを伝え、ティクル訳の第1巻を読んだようにポープ訳の第2巻を読むというアディソンの申し出を受け入れたと語っている。しかし、ポープは自分の名声をおとしめる陰謀があると信じ込むようになり、またそう主張するようになった。アディソンはティクルに書くように促していたし、ティクルの詩に手を入れたり、またティクルの名前で自分自身が書いていた。ポープがスペンスに語っているように、この陰謀の別の証拠はまもなくアディソンの継子となるウォーリックによってもたらされている。アディソンはギルドン(Gildon)を促してウィッチェリー(Wycherley)に関するパンフレットの中でポープを攻撃させている。そしてこの攻撃に対してあとで10ギニー支払っている。これに対してポープはその陰険なやり口に対する軽蔑の念を書き綴った手紙をアディソンに書き送り、締め括りに自らの公明正大さを示す証拠として、後に「アーバスノット

への書簡（Epistle to Arbuthnot）」の中に収められる有名な詩行を書き付けている。ポープはずっと後になってアディソンは「自分を礼儀正しく扱ってくれた」と書いている。アディソンは雑誌「フリーホルダー（Freeholder）」の中でポープのホメロス訳について賛辞を呈しているが、これがアディソンが後にポープに対して抱いていた感情を明確に示す唯一のものである。

この非難の応酬は現在までに充分論じられてきており、『ビオグラフィア・ブリタニカ』では、ブラックストーン(Blackstone)が注釈のテーマに取り上げている。この中でブラックストーンはアディソンには咎はなかったと主張している。後に明らかになった事実からそれが証明されたからである。すなわち、ティクルの原稿が保存されていて、それによって彼自身の手で翻訳されたものであることが証明されたからである。要するに、言えることは、アディソンは（ポープ自身が認めているように）ティクルが出版する権利のあるものを、そしてポープに打撃を与えることには決してならないものを、ティクルが出版するのを止めなかったということだけである。ウォーリックに関する話は多少ゴシップめいており(もしポープ自身の作り話でないのなら)、ポープは一笑に付すべきだった。事件全体でポープが一番望んでいたことは、アディソンに関する風刺はその被害者の死後書かれたものであるという報告がなされた場合に備えてその誤りを立証しておくことであったようだ。この誤りを立証する別個の証拠が事実存在している。もっとも、それはアディソンに対して決して示されなかったようであるが。ポープのいう証拠とは、好んで嘘をつく人物のあげる類の証拠に過ぎない。なぜなら、日付が一致しないからである。また、ポープはアディソンと交わしたすべての書簡を、自分たちの関係を潤色して説明するために別の手紙を利用して意識的にでっちあげていることが今日わかっているからである。この風刺はアディソンに対するポープの感情を物語っている。そしてなんにしろ、それはそれなりにありそうな、また首尾一貫した真実を含んでいる。敵意のある鋭い目で観察すれば、アディソンの中には、サークルの中心人物にありがちな欠点――おだてられることを好み、外部の者に嫉妬しやすいという欠点――があったと指摘出来よう。そして、アディソンは真実の一面――極めて好ましくない一面――しか見なかったといえるかもしれない。

「カトー」制作の後、アディソンは再びエッセイの執筆に戻っている。「ガーディアン(Guardian)」(そのころ、スティールが「スペクテーター」の代わりに編集していた)に、1713年5月28日から9月22日までの間に51編の寄稿をしている。そして、おそらくバジェルが運営していたと思われる復刊された「スペクテーター」に1714年6月18日から9月29日の間に24編寄稿している。同年の前半にはスティール編集の「ラヴァー(Lover)」に2編寄稿している。これらの文章はおしなべてかつての質は留めてはいるものの、それほど上出来のものとはいえない。彼の純粋な文学上の活動は「鼓手」の制作をもって終わる。これはグランヴィル(Glanvill)の「サドウシスム・トリウムファートゥス(Sadducismus Triumphatus)」の中で語られているテッドワース(Tedworth)の鼓手の物語に基づいた散文喜劇である。アディソンはこれを特別秘密厳守の指示を付して、スティールに与えている。この劇は1715年に上演されたが当たらなかった。スティールは後に台本を出版している。彼はこの劇の良さは、劇場で楽しむにはあまりにも弱々し過ぎるが、私室では楽しめるだろうと考えたからである。ティクルはこれがアディソンの真筆かどうか疑わしいと考え、彼が編集したアディソン全集から除外している。これに対してスティールは新版の巻頭に付したコングリーブへの献辞を兼ねた手紙の中で激しく抗議している。この劇にはアディソンに欠けていた劇的力強さがやはりみられないこと、その一方アディソンならではのユーモアがみられることを疑う批評家は今やいない。

アン女王の死とウィッグ党の勝利はアディソンを政界に復帰させた。まず控訴院秘書官に任命される。そして、サンダーランドがアイルランド総督になると旧職の秘書官に任命されている。サンダーランドが10か月の在職を終えて退官すると、通商部委員会委員の一人に任命される。このころ、「フリーホルダー」(1715年12月23日から1716年6月9日まで、55編の論文)を発刊している。これは政治的色彩の濃い「スペクテーター」ともいうべきもので、スコットランドで起きた反乱によって脅かされていた正統的ウィッグ党の主義を擁護しようとしたものである。現在この雑誌が有名なのは、主として、狐狩りにうつつを抜かすトーリー党員――サー・ロジャー・ド・カヴァリーと郷士ウェスタン(Western)の中間的人物としてなかなかうまい人物描写がされていると――のことを書いた2号のため

である。

1716年8月3日、アディソンはウォーリック伯爵夫人と結婚している。彼は伯爵家とは古くからの友人であった。チェルシーにあったアディソンの住まいが伯爵のホランド・ハウスの近所だったからである。また、彼は当時17歳だった伯爵夫人の息子の教育に関心をもっていた。もっとも、彼が実際に家庭教師をしたというのは正確ではない。前年にアディソンがアイルランドに出発する時、ロウ（Rowe）が伯爵夫人に送った詩の写しの中に見られるように、二人の恋愛はある期間続いていた。結婚自体は楽しいものではなかったというのが通説である。ジョンソンは、この結婚はサルタンが自分の娘を娘の奴隷だった男に与えたような結婚だったといっている。アディソンは豪華なホランド・ハウスからケンジントンのコーヒー・ハウスへよく逃げだしていたという報告もある。そのようなゴシップにはあまり意味はない。この結婚によってアディソンの公職における出世は容易になったであろう。サンダーランドは1717年春、タウンシェッド（Townshed）に勝利した時、アディソンを同僚の国務大臣の一人としてむかえている。アディソンが政界で成功したのは、主として彼の高い個人的人気のためであると考えねばならない。社会的地位からくる大きな権力があったわけでもないし、舌鋒鋭い論客だったわけでもない。さらに、彼は自分の文体に非常にうるさかったので陳腐な公文書に筆を執ることができなかったという指摘もある（スペンス：175頁）。マコーレーは、それは彼が公文書の書式に無知だったためだといっている。注意深く推敲はしたが、彼がすらすらと文章を書くことができたことについては証明の必要はない。スティールによるとアディソンはペンをもった時と同じように歩きながらすらすらと正確に口述することができたという――スティールはしばしば筆記者の役をつとめている。ポープは「スペクテーター」は素早く執筆され、ただちに印刷に回されることが多かった、そして、推敲する時間が無い時アディソンは最も素晴らしい文章を書いたといっている。ウォートンが耳にはさんだ話によると、アディソンは新たに前置詞や接続詞を挿入するために、印刷がほとんどできあがっているのによく印刷機を止めさせたことがあったという（『ポープ論』1章145頁）。彼の文章に対する厳しさがどの程度まで公文書執筆の妨げになったものか、はっきり断言することはできない。

そうこうするうちに、アディソンは健康を害していく。1718年3月に年間1500ポンドの年金をもらって退職する。そして、文学の新たな仕事に取り組む。ソクラテスの死を扱った悲劇の執筆が予定されていたし、キリスト教信仰の根拠についての断片的な、極めて皮相な文章を残している。また、「詩編」をパラフレーズしようという計画もあったようだ。彼の最後の出版となった作品は、これまでとは性格の異なるもので、旧友スティールとの対立を招くことになる。

スティールがアディソンに対して抱いていた限りない称賛の念はよく知られているところである。スティールは盟友であるアディソンに地位を取って代わられた時自ら語っているように、アディソンが自分を凌いだことを喜んでいる。そして、スティール氏がアディソン氏にどんなお陰を被っているにせよ、世間がアディソンを得ることが出来たのはこのスティールのお陰なのだと誇らしげに言い放っている。しかしながら、この二人の仲はしっくりいかなくなる。スティールの手紙から、彼が自分よりも金持ちだったアディソンに時折借金していたことがわかる。ジョンソンははっきりした典拠に基づいて次のような話を伝えている。すなわち、アディソンはかつてスティールの家を1000ポンドの借金のかたとして差し押えたことがあり、これにスティールがいたく傷ついたというのである。これにまつわる一番信憑性のある逸話は俳優のB.ヴィクター（Victor）が伝えている（『原典書簡集（*Original Letters*）』1巻328-9頁）。ヴィクターはスティールを知っており、事実をギャリック（Garrick）宛ての手紙の中で語っている。それによると、スティールはハンプトン・コートに家を建てるためにアディソンから1000ポンド借りている。アディソンはその金を彼の弁護士たちを通して、期限がきた時には強制的に取り立てるという指示書きを付して融通している。スティールがその年の終わりまでに返済することが出来なかったので、その家と家具は売却され、残額がスティールに支払われている。その際、スティールを「怠惰」から目覚めさせるために取られた措置である旨を伝える短い手紙が添えられている。

スティールは「哲学者のように冷静に」アディソンを非難したのであるが、間もなく二人の仲はもとに戻っている。このことからも分かるように、これは友人が腹を立てて突如厳しい借金取りになったのではなく、きつい教訓を与えようとの意図的な計画から出たもの

だった。いかに善意の意図があろうとも、あるいは善意をもって受け取ろうとも、そうした非難によって友情は厳しくためされることになる。スティールはその無鉄砲な情熱のために、自らウィッグ党のスケープゴートにされてしまっていた。すなわち、ウィッグ党が勝利を収めた時も、一切官職は与えられず、劇場の特許に関する任務が与えられたにすぎなかった。これにはいたく傷付いたであろうと思われる。アディソンの友情がティクルに傾いてしまったこと、アディソンに会うのに次官となった若造のティクルに約束を取り付けなければならなくなったことにも相当傷付いていた。1717年にスティールは妻に洩らしている、「アディソン大臣閣下」にはもうなにも頼めなくなった、と。

スティールは「プレビアン(Plebeian)」紙を発刊し(1719年3月14日)、貴族の数を制限するために提案された基準を攻撃している。アディソンは「オールド・ウイッグ（Old Whig)」紙上で、権力の正しいバランスという観点から算出した基準について根本から論じながら、スティールの攻撃にやんわりと応酬している。スティールはさらに二度「プレビアン」で攻撃を続ける（3月29日、30日)。その中のひとつで、見当違いな下品なほのめかしを行い、論敵の品行に「濡れ衣を着せようとする鼻持ちならない言説」とマコーレーから厳しく非難されている。アディソンはただちに「オールド・ウィッグ」（4月2日）で手厳しく、軽蔑的に応じている。しかし、最後は、「プレビアン」が大義のために筆を執ってくれるものと信ずると結んでいる。マコーレーは、アディソンがジョンソンがいうようにスティールのことを「小さなロバ」と呼んだりしてはいないことを指摘している。スティールは最後にもう一度「プレビアン」（4月6日）でアディソンのウイッグ根性について辛辣なことを書いている。もっとも、末尾では分別のあるところを示そうとして「カトー」からの引用で締め括っているが。昔からの盟友と仲たがいしたことに対するいくぶんかの後悔の念がそれぞれの結びの文にみられるが、関係を修復しようとする気持ちはまったくみられない。

アディソンの健康は急速に衰えていった。死の床にあった彼は、ゲイ(Gay)を呼んできてもらい、ゲイを傷つけたことに対して、たぶん彼の昇進を妨害したことに対して許しを請うている。アディソンはこのことに対して自責の念を感じていたのである。また、ヤングによると(「オリジナルな創作について

の憶測（Conjectures on Original Composition）」『作品集』136頁）、アディソンは継子ウォーリックを呼んできてもらい、この息子に「クリスチャンがいかにおだやかに死ねるものであるかを見よ」と言ったという。このことは、アディソンの言葉を使ってティクルがウォーリックに宛てた次の詩行のことを暗示しているように思われる。アディソンは、

如何に生きるかを我らに教え（おお、知識の代償の何と高きことか）、如何に死すべきかを教えたり

アディソンはティクルに作品の管理を委ねている。彼は感動的な手紙を添えて作品をクレッグズ（Craggs）に遺贈している。そして、1719年6月17日喘息と水腫で死亡。ウォーリック夫人は1731年7月7日に世を去っている。

アディソンは1719年1月30日に娘を一人もうけている。この娘は知能に欠陥があったらしい（「ジェントルマンズ・マガジン（Gentleman's Magazine）」1797年3月号及び1798年5月号；M.W.モンタギュー夫人作品集のルイーザ・スチュワート（Louisa Stewart）夫人の序文、15頁；『エジャートン手稿』1974所収の手紙）。彼女は長年ビルトンで暮らしていた。1797年未婚のまま死去。アディソンの蔵書は1799年5月に456ポンド2シリング9ペニーで売却されている。

アディソンの肖像画は国立肖像画美術館に1点、モードリン・カレッジに2点、ボードリアン・カレッジに1点（1750年娘によって寄贈）所蔵されている。ホランド・ハウスにあるアディソンの肖像画といわれているものは実際には彼の友人のA.フォンテイン（Fountaine）卿らしい（『注釈と質問（*Notes and Queries*）』第4シリーズ12章357節、第5シリーズ5章488節、6章94節；『ジョセフ・アディソンとA.フォンテイン卿、肖像画の物語（*Joseph Addison and Sir A.Fountaine,the Romance of a Portrait*）』ロンドン、1858年）。

アディソンのラテン詩は『エグザーメン・ポエティクーム・デュピュレックス（*Examen Poeticum Duplex*）』（ロンドン、1698年）と『ムザールム・アングリカナールム・アナレクタ（*Musarum Anglicanarum Analecta*）』（第2巻、オックスフォード、1699年）に掲載されている。後者には平和に関する詩とハーネス博士に宛てた詩の2編が含まれている。この2編は前者には含まれていない。P.フロード（Frowde）の詩とされているスケートについての詩はアディソンのものとして1720年にカール（Curll）によって出版されている。

『雑歌集』（1693年）の第3部には詩「ド

ライデン氏に寄す」が含まれており、第4部（1693年）には「農耕歌第4部」の翻訳、「最も偉大な英国の詩人たちの評価」「聖セシリアの日を祝う歌」、オヴィディウスの「サルマキス」の翻訳が、第5部（1704年）にはイタリアからの手紙（すでに出版されている）、ミルトンをまねて行った『アエネイス』からの翻訳、オヴィディウスからの様々な翻訳を含む。マコーレーは「スペクテーター」の603号と623号はアディソンの作品と見做されるべきだと述べている（ローンズ（Lowndes）の『マニュアル（*Manual*）』所収の「マコーレー」の項の註参照）。

アディソンのものとされている、オックスフォードの学生時代の作「新しき哲学を擁護して（in defence of the new philosophy）」（1693年7月7日）と題する演説の翻訳は、ガードナー（Gardiner）訳のフォントネル（Fontenelle）の「世は様々（Plurarity of Worlds）」に付録として添えられている（ロンドン、1728年）。最初サマーズ、のちにジャクル（Jekyl）が所蔵した原稿に基づいて1739年オズボーン（Osborne）によって出版された「古代及び現代の学問に関する論考（Discourse on Ancient and Modern Learning）」は、ハードによってまぎれもなくアディソンの初期の作品であると認められている。現在はアディソン作品集の中にリプリントされている。「著名なるローマの詩人論（Dissertatio de insignioribus Romanis Poetis）」は1692、1698、1718、1725、1750年に印刷されており、パール（Parr）博士によってその価値が認められている（『注釈と質問』第3シリーズ、9章312節）。アディソンのものとされている「三年議会法に関する論（Argument about the Alteration of the Triennial Election of Parliaments）」は1716年ボイヤー（Boyer）の「ポリティカル・ステイツ（Political State）」に最初掲載されているが、後にデ・フォー（De Foe）からクレームがついている（『注釈と質問』第1シリーズ、5章577節）。ボーン版では認められてはいるもののこれは明らかにアディソンの筆になるものではない。他の出版物は以下の通り。

1、「国王陛下に寄する詩」1695年国璽尚書（サマーズ）より献呈。

2、「1701年、チャールズ・ハリファックス卿閣下にイタリアより宛てたる書簡」1703年印刷。

3、「イタリア雑感」1705年、第2版1718年。

4、「美しきロザモンド」三幕の韻文オペラ（匿名）、1707年。

5、「タトラー」寄稿、1709〜10年。
6、「ウィッグ・エグザミナー」寄稿、1710年。
7、「スペクテーター」寄稿、1711〜12年(ミルトン論、想像力論、コヴァリーものは独立して出版されている)。
8、「カトー」1713年。
9、「ガーディアン」寄稿、1713年。
10、「タリフ伯爵に関する最近の裁判と有罪判決」1713年。
11、8巻本「スペクテーター」1714年。
12、「鼓手」(匿名) 1716年 (上演1715年)。
13、「フリーホリダー」寄稿、1716年。
14、「オールド・ウィッグ」寄稿、1719年。これは(「プレビアン」に寄稿したものとともに)グリーン版作品集とボーン版作品集のみに所収。「メダルに関する対話」と「キリスト教信仰の根拠」はティクル版作品集において死後出版。

作品集にはティクル版4巻、1721年；バスカヴィル版4巻、バーミンガム、1761年；別に4巻本作品集、1765年、ロンドンがあり、12か月間にしばしば増刷される；ビショップ・ハード版(文法上の注釈付き) 6巻、1811年；G. W. グリーン版、ニューヨーク、1856年；最も完全で手軽な版はボーンの「英国古典叢書」6巻1856年に所収のもの。

［アディソン作品集のティケルの前書き；「鼓手」に付けられたスティールの前書き、コングリーブ氏に宛てた献辞を兼ねた書簡に所収、ティクルの前書きに対して書かれたもの；スペンスの『逸話集』(1820年)；『エジャートン手稿』1971〜4；『ビオグラフィア・ブリタニカ』所収の伝記；ジョンソンの『詩人伝』所収の伝記；『アデソニアーナ』サー・R.フィリップスによる粗雑な逸話集 (1803年)、この時初めて出版されたウォートリー・モンタギューに宛てた手紙の複製を収めている；ルーシー・エイキンによる伝記 (1843年) とこの本の書評。この書評はマコーレーの最良のエッセイのひとつである；ネイザン・ドレイクによる「タトラー」「ガーディアン」「スペクテーター」を解説したエッセイ (1805年)；チャマーズの『英国のエッセイスト』の前書き、1巻、6巻、15巻；ティヤーズの『歴史的エッセイ』(1783年)、これは役に立たず；スウィフト作品集；エリヴィン版ポープ書簡集；カラサーズのポープ伝］

L.S.

下谷和幸（しもたに　かずゆき）

昭和22（1947）年石川県生まれ。上智大学大学院修士課程修了。英米文学専攻。現在、東邦大学助教授。著書に『マニエリスム芸術の世界』（講談社現代新書、1977年刊）、「ダンの恋愛詩におけるLoveのMetaphors」、「Gentleman概念の歴史的変遷」など。

野間教育研究所紀要　第35集

The Dictionary of National Biography:
その概要と方法論

頒布価4,000円

平成4年3月27日発行
著　者　下谷和幸
発行者　野間佐和子
発行所　財団法人　野間教育研究所
東京都文京区音羽2－12－21
電話　(03) 5395－3679　〒112-01
製　作　株式会社 周

©1992 Kazuyuki Shimotani　　Printed in Japan

頒布価　4,000円